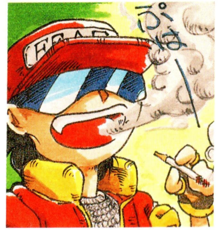


●山本　剛（やまもと　つよし）

1969年８月７日茨城県生まれ。気鋭のゲームデザイナー集団F. E. A. R. に所属。ＴＲＰＧのデザインやライティングを中心に活躍中。主なゲームに『アラベスク　運命の風』（ホビー・データ）がある。趣味はスポーツをすること。特に好きなのが、アメリカンフットボールと格闘技。

カバーイラスト／壱
カバーデザイン／小林博明（K Plus artworks）



56-6
Y480
新☆魔導物語3　シェゾと悪の華
山本　剛
角川スニーカー文庫

9784044156060
1920193004809
ISBN4-04-415606-9
C0193 ¥480E
定価：本体480円（税別）

『神を汚す華やかなる者よ（シェゾ・ウィグィィ）……』闇からシェゾを誘う声。迷宮の主ルーンロードに見込まれて、シェゾは悪の道に目覚めた！
シェゾの力に目を付けて、すけとうだら軍団がちょっかいを出してくる。しかしたちまち思わぬ騒動に発展、シェゾは宿命の大冒険に乗り出した。本当の敵は誰なのか？　アルルとルルーを巻き込んで、ホントはいいヤツかもしんない（？）悪の魔導師はどこへゆく！
人気キャラクターの活躍を描くシリーズ完結編!!

カバー　暁印刷

新★魔導物語3

シェゾと悪の華

山本剛

角川文庫 10489

新★魔導物語3 シェゾと悪の華

山本剛

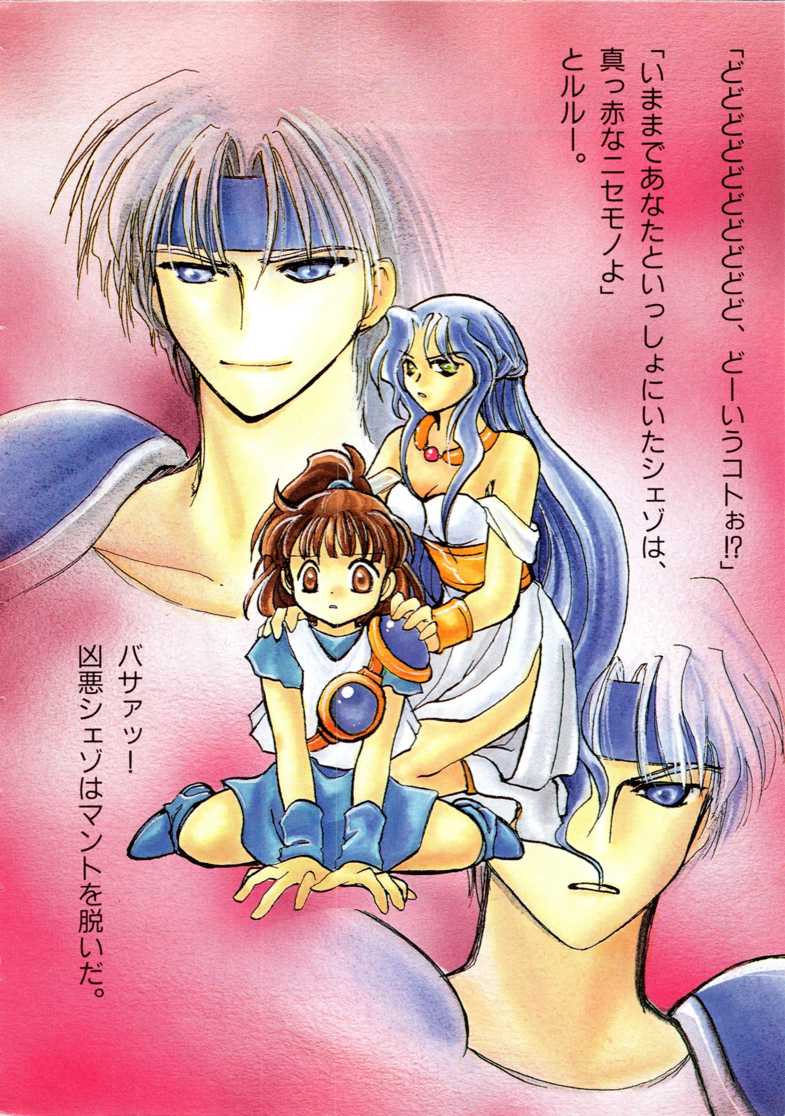
角川文庫

10489


『悪はいいですよ……』
シェゾの心の奥で眠る
〝悪〟を呼び覚ますように、
ルーンロードはいう。
「断る!」
キッパリ!


ルシファーの話を聞いて、
シェゾはだいぶ落ち着きを取り戻した。
いまはもう、恐怖もアセりもない。
落ち着いていればなんのコトはなく、
マグマのように沸き立つ邪悪な力も
意のままに動く。




「どどどどどどど、どーいうコトぉ!?」
「いままであなたといっしょにいたシェゾは、真っ赤なニセモノよ」
とルルー。
バサァッ!
凶悪シェゾはマントを脱いだ。

新★魔導物語 3

シエゾと悪の華

山本剛

角川文庫 10489

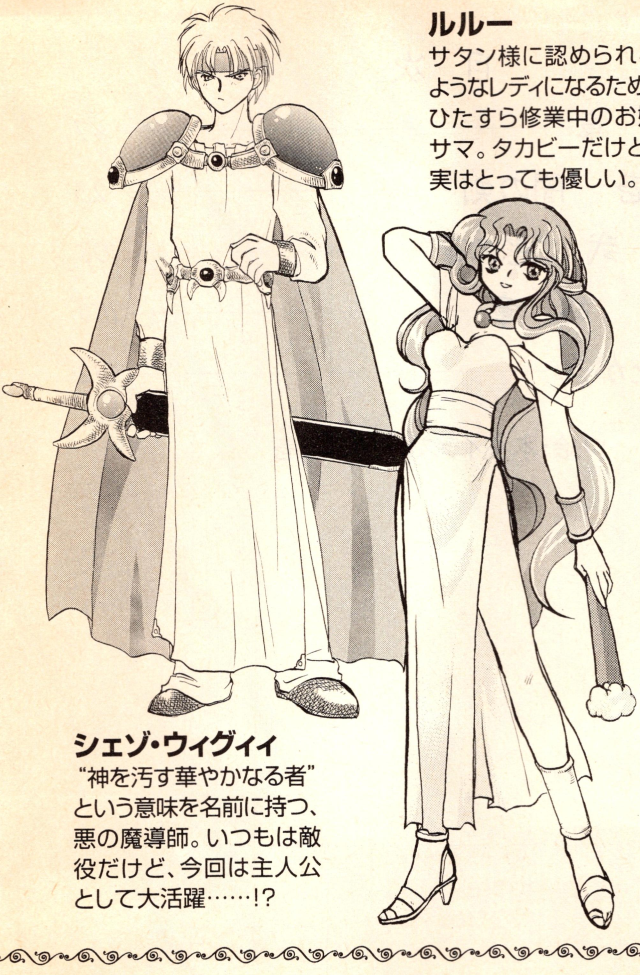
目　次

序　章 ―――― 7
壱 〝闇の剣〟 ―――― 23
弐 〝悪の華〟 ―――― 108
終　章 ―――― 185
あとがき ―――― 192

口絵・本文イラスト――壱

ルルー

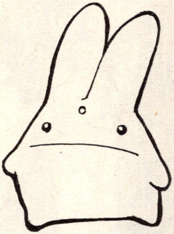
サタン様に認められる
ようなレディになるため、
ひたすら修業中のお嬢
サマ。タカビーだけど、
実はとってても優しい。

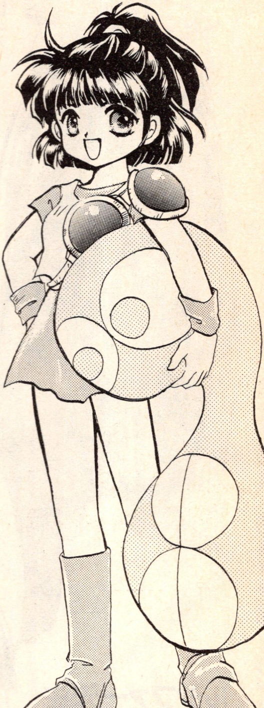


シェゾ・ウィグィィ

“神を汚す華やかなる者”
という意味を名前に持つ、
悪の魔導師。いつもは敵
役だけど、今回は主人公
として大活躍……!?

登場人物（とうじょうじんぶつ）





カーバンクル

いつもアルルにくっついている、ふしぎなどうぶつ。とりあえずなんでも口に入れるクセが、ちょっと困ったちゃん。

アルル・ナジャ

超一流の魔導師を目指して修業している、いつもゲンキいっぱいの女のコ。今回も主役をシェゾに取られてしまった……。

サタン様

10万年も生きている、魔界の貴公子。魔界での実力は最高レベル。強大な魔力を秘めるアルルを妃にしようとしている。



ルシファー先生

以前からアルルやルルーがお世話になっている先生。占い師、医師、魔導師など、肩書きの多いヒト。実はサタン様の双子の弟。

序章

ひとつの終わりは、新たなひとつの始まりでしかなかった。生命を謳歌(おうか)しきった華の種が大地に根づき、再び芽をふくかのように……。

『神を汚す華やかなる者(シェゾ・ウィグィィ)よ……』

言霊が、血のごとき真紅のくちびるから紡ぎだされた。余韻が、死者を送る鐘のように重々しくこだまし、息苦しいほどにたちこめる暗黒の瘴気(しょうき)の中に溶けこんでいく。

『新たに選ばれし、闇の導師(ダークマスター)よ……』

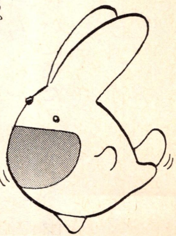
紅(あか)い口がまた動いた。それにあわせて、人を魅了する悪魔の呪文(じゅもん)のように、言葉がゆっくりと吐き出される。

悪魔のように……？

いや、ちがう。ヤツは、悪魔そのものだ！

少年はそう思った。

青白い肌はまるでロウ人形か死人で、それをつつむ真っ黒なローブは、かなりの年月をへて



風化し、朽ちかけている。それでいて、まなざしは邪悪な精気にあふれてギラつき、くちびるは地獄の業火のように紅い。
絹糸かと見間違う(みまごう)ほどに細い銀髪を瘴気の渦にはためかせ、蜃気楼(しんきろう)のように少年の前に立つそれは、まさしく地獄からよみがえった悪魔だった。
『さあ……』
右手を差し伸べ、聖者の笑みを浮かべながら悪魔がいう。
『その闇(やみ)の剣で、私に斬りかかってきなさい。あなたが、闇の後継者となるために……。といっても……』
ふと、悪魔の笑みがいたずらっぽくなる。
『私とて、そう簡単にやられはしませんよ……。これは、あなたに対する試験……。全力の私に勝たなければ、後継者となる資格などありませんからね……』
「ふざけるな!!」
聖者に見せかけた悪魔の誘惑を払うように頭を振り、少年はいい放った。
「オレは、この迷宮の出口はどこだと聞いてるんだ! お前なんかと戦いに来たワケでも、後継者なんかになりに来たワケでもない!!」
怒りをふくんだ声が暗黒の瘴気にこだまし、やがて、消えていった。
『………』

余韻が完全に消えたあとも、悪魔は、しばらく眼をパチクリと見開いていた。まるで、予想外の回答を受け取ったかのように。
『確かに……』
静けさのあまり頭がどうにかなってしまう直前に、ようやく悪魔はしゃべりだした。
『この迷宮に訪れたのは、あなたの意思によるものでなかったかもしれません……。ですが、いまのこの状況が、私の声に応じた結果であることは、間違いありませんよね……?』
「それがどうした!」
フン、と鼻をならして、少年は吐き捨てる。
少年――シェゾ・ウィグィィは、修学旅行の最中だった。
目的地は、二百年前に勇者との戦いに敗れた大魔導師が封印されているという〝廃都ラーナの遺跡〟。つまり、ここだ。クラスメイトや先生たちは、シェゾの頭上にいるはず。
そのときシェゾは、ガイドさんのかったるい説明を聞き流しながら、列のイチバン後ろをダラダラと歩いていた。廃都ラーナの伝説など歴史書ですでに知っていたし、負け犬の話なんか聞きたくもなかった。勇者がどれほどのものかは知らないが、シェゾにとっては、勝てなかったらタダの負け犬だ。その大魔導師とやらがいかに実力者であっても、シェゾの将来の目標になるには役不足というもの。オレの夢は、歴史上のどんな魔導師にも負けない術者になることだ。負け犬にかまってるヒマなんかない。

まあとにかく、14歳のシェゾ少年は、あまり役に立ちそうもない遺跡見学なんかより大人にすら難解な古代の魔導書を読んでいたほうがいいなと思いながら、たいして軽くない足取りでクラスメイトたちの後にくっついていた。エスケープするのはカンタンだが、あとで先生のお説教を聞かなきゃいけないのはうざったい。

そんなコトを考えながら、ボーっと歩いていたときだった。シェゾが、この暗い迷宮で悪魔と対峙(たいじ)する原因がやってきたのは……。

『神を汚す華やかなる者よ……』

突然、耳もとでささやくような声が、シェゾの頭の中を駆け抜けた。ビックリしてシェゾはあたりを見回すが、声の主らしき人物は見当たらず、クラスメイトたちの様子に変化はない。どうやら、謎(なぞ)の声に気がついたのはシェゾだけらしい。

足を止めてキョロキョロしていると、また同じ声が聞こえてきた。その声が、間隔をおいて何度も何度も耳に飛びこんでくる……というより、頭の中に直接こだまする。まるで、シェゾに救いの手を差し伸べ、タイクツな日常から新たな世界へといざなうかのように。

——ラッキー！

声の正体よりもなによりも、シェゾはそう考えた。こりゃいいタイクツしのぎができたぜ。すかさず、先生やガイドさんの眼を盗んで列をはなれる。もはや先生のお説教すらも、突然にわき起こった知的好奇心にはかなわない。オレを呼ぶのは誰だ？　どこで？　なぜ？　なん

のために……？

そのあいだにも、シェゾを呼ぶ謎の声はくり返しくり返し聞こえている。頭にささやきかけるような声にもかかわらず、なぜか、どっちの方角から聞こえてくるかがシェゾにはわかった。それをたよりに見学コースから外れて遺跡を歩き回っていると、やがて、真っ黒な石板を発見。黒曜石かなにかでできているようで、それはカガミのように光っており、前に立ったシェゾの姿がキレイに映る。

どうやら声は、ここ——の奥のほう——から聞こえているようだった。

声に誘われるままに石板に触れた瞬間！　シェゾの身体（からだ）はいきなり石板に引き込まれ、落ちるような感覚に襲われた。そして気がつけば、重々しい空気と魔物どもの気配がたちこめる迷宮に、シェゾは立っていたのである。

「ことわっておくが……」

キッ！　と眼の前の悪魔をニラみながら、シェゾはいった。

「オレを呼んでたのがお前だったなんて、いま知ったぜ。もし本当にそうなら、後継者がどうしたとかほざく前に、自己紹介ぐらいしたらどうなんだ！」

謎の声の主がこの悪魔だということはさっきからすでにわかっていたし、悪魔の——実は悪魔ではないその正体にもだいたいの見当をつけていながら、シェゾはまくしたてる。それは、実力未知数の相手に対する心細さとそこはかとない恐怖感、相手より優位に立とうと挑発する

強気、そして少年特有の斜(はす)にかまえた反抗的意識の戦いの結果だった。

『おや、これは失礼……』

さして悪びれたふうもなく、悪魔はいう。

『私はルーンロード……。この廃都ラーナの地下に広がる迷宮の主ですよ……』

「負け犬が、オレになんの用だ！」

予感的中の喜びを押し隠しつつ、シェゾはワザとイヤミたっぷりにいった。

『負け犬、ですか……？　これは手厳しい……』

「勇者と戦って負けたんだろ？　だったら負け犬だ！　おまけに封印されてここから出られないクセに、主だなんだとカッコつけるな！」

『あまり、負け犬負け犬とくり返すのはやめませんか……？』

ルーンロードは微笑(ほほえ)んでいるが、その声にはほんのりと怒気が含まれていた。

そりゃまあ怒るわな、とシェゾは思う。結果的に封印されたとはいえ、かつては世界を恐怖のどん底におとしいれた男。その悪魔のごとき魔導力は魔界の王と肩をならべるほどで、全盛期は大多数の上級悪魔を従えていたという。

それほどの大魔導師が、たかだか14歳の少年に負け犬呼ばわりされているのである。もしシェゾが逆の立場だったら、相手はいまごろこの世に存在しない。ルーンロードも同じように考え、シェゾを瞬殺しようとするかもしれない。

「…………」

来るべき戦いのために、シェゾは心の準備をした。

しかし、次にルーンロードの口から出てきたのは、なんとも意外なセリフ。

『あなたも、その負け犬の能力を受け継いでいるのですよ……』

「なんだと……!?」

予想外の展開に、相手を挑発して動揺を誘うつもりだったシェゾは、逆に動揺のあまり絶句してしまった。

「ど、どういうことだ!?　お前がオレの先祖だというのか!?」

『血縁、というワケではありませんがね……。いわば、運命の紅い糸で結ばれているとでも申しましょうか……』

いいながらルーンロードは、クスッと声を出して笑い、

『ああもちろん、いまのはあなたと私が結ばれる運命にあるという比喩で使ったワケじゃありませんよ……。まあ、あなたさえよければ私は拒否しませんが……』

「ふざけるな!!」

ルーンロードのセリフを、シェゾの怒鳴り声がかき消した。

『ふざけてなんかいませんよ……。いいですか……？　この世は、ある現象のくり返しによって成り立っています……。巨大な〝悪〟が現れ、それを〝善〟の勇者が倒す……。そしてまた

何百年か何千年か後に巨悪が出現し、善がそれを打ち破る……。聡明なあなたなら、これだけでおわかりいただけたと思いますが……？』
「あ、ああ……」
遠く神話の時代から、英雄伝説などというものは世の中、歴史書の中にあふれかえっている。百年、千年単位の誤差を考えると、確かにサイクルになっているといえなくもない。
『二百年前は私の番でした……。そして、次はあなたの番というワケです……』
「冗談じゃない！」
『ですから、冗談じゃないんですってば……。まあ、あなたにこのコトを話すには少々時期が早いかなと思っていたのですが……、封印された影響で私のこの身体——というか延命の呪法もそうそう永くもたないのですよ……』
「なんでオレがお前の代わりをやらなきゃならないんだ⁉　だいたい、すき好んで悪者になるヤツがどこにいる⁉」
『おかしいなぁ……、あなたなら即オーケーだと思っていたんですがねぇ……』
「…………」
ルーンロードのいうとおり、ある程度の心の準備さえできていれば、シェゾは即オーケーだったかもしれない。それほどまでにシェゾは、〝悪〟というものにそこはかとない魅力を感じていた。シェゾの目標はこの世の魔導のすべてを極めることだが、どうせなるなら、勇者とと

もに悪を滅ぼす側よりも、世界を悪で満たすような大魔導師になりたかった。
そんな考え方のせいか、シェゾの授業態度はすこぶる悪い。授業の内容なんてゼンゼン聞いちゃいないし、気分がノらなければ即エスケープなんてあたりまえ。そのたびに先生に怒られても、まさに馬耳東風の状態である。
しかしそれは、勉強がキライだからではなかった。むしろ魔法の勉強は大好きで、独学で魔導学校で教えるすべてのコトを、すでに頭の中に入れてしまっている。それどころか古代の上級魔法さえ習得ずみで、14歳にしてその実力は、魔導学校の教師と同じか、あるいはそれ以上だった。だから、すでに知っている授業を受けてもタイクツでしょうがないのである。
魔導師としての実力はともかく、態度がまるっきり不良で一匹オオカミを気取っているため、ほかのツッパリ連中とのケンカはよく発生した。といっても拳（こぶし）だけの殴り合いならともかく、魔法を使えばどんな相手も赤子同然。足元にかる～くファイヤーの呪文を爆発させただけで、たいていのツッパリは退散した。泡をくって逃げまどう不良どもの後ろ姿を見るとき、シェゾはいつも、正義感とは逆の、サディスティックな悦（よろこ）びをなんとなく感じてしまうのだった。
『悪はいいですよ……』
シェゾの心の奥で眠る〝悪〟を呼び覚ますように、ルーンロードはいう。
『最強最大の能力を持っていなければ、悪になることはできません……。それも、勇者をはるかに凌駕（りょうが）するほどの……。しかし、勇者には絶対に勝てないという運命……。この〝滅びの美

学〟というべきものも、とても魅力的ではありませんか……？　あなたには悪になる素質があるのです……。さあ、私の後継となって運命に殉じ、悪の華を咲かせましょう……！』

「断る！」

キッパリ！　という効果音が聞こえるほど、シェゾはハッキリといい切った。

『なぜです……？』

さも意外だというように、ルーンロードは眼を丸くする。

「運命なんかにしばられるなんて、オレはゴメンだね。それに——あえていわせてもらうが、負け犬のお前の後継になるっていうのも気に入らない。オレは、オレのやり方で悪の大魔導師になってみせるぜ！」

『やれやれ……』

ふぅ、とタメ息をつき、ルーンロードは軽く肩をすくめる。

『いいですか……、運命は誰にも変えられないんですよ……？　唯一の例外があるとすれば、それは勇者だけです……。負けて当然の戦いをねじ曲げることができるのは……。しかしそれすらも、さらに大きく見れば運命の輪の流れにすぎません……』

シェゾは、やけに芝居がかったルーンロードの口調が鼻につき始めていた。負け犬ほど、大仰にほざきやがる。運命なんてコトバは、負け犬の遠吠えにすぎないんだよ……！

『そして英雄伝説の成就によって、人々はまた活気づき、世の中を安定の方向へと向かわせる

のです……。しかし、水は低きに流れるというコトバのとおり、永き星霜を重ねるうちに人々の心はまた堕落してきます……。そこで、また新たな英雄伝説が人々に喝を入れるのです……。誰もが、この運命の輪の中で生きているのですよ……』

「…………」

『あなたとて例外ではありません……。生まれたときからすでに、運命の歯車は動き出しているのですよ……』

「なんだとぉ……!?」

運命というコトバを聞くたびに、気分がだんだんイライラしてくる。溶岩が沸騰しているかのように、心の奥がムズムズしてくる。

『たとえばあなたの名前……。あなたのシェゾ・ウィグィィという名前に、〝神を汚す華やかなる者〟という意味があるのはご存知ですね……?』

「それがどうした?」

シェゾは、自分の名前がとても気に入っていた。特に、名前の意味を書物で知ってから……。

『ご両親は、意味を知っていてその名前をつけたのでしょうか……? それとも偶然でしょうか……? 知っていたとしても、どうしてそんな不吉な名前をつけたのでしょうね……?』

「う……」

厄除(やくよ)けのために、〝死〟とか〝悪魔〟という名前を子供につけることがあるらしいのはシェ

ゾも知っている。しかし、シェゾの場合はそうではなかった。名前の意味を知ったときに、両親がひどく驚いていた記憶がある。

『それから、その闇の剣……。まるでしつらえたように、あなたの右手にピッタリではありませんか……？　それに、彼はいいませんでしたか……？「我が主よ」と……』

「…………」

シェゾは右手を見た。そこには、刀身の真っ黒な長剣が握られている。グリップがとてもフィットしていて、どことなく安心感というか安定感がある。

これは、謎の声の主と出口を求めて迷宮をさまよっているあいだに見つけたものだ――ありがちなことに、入ったところから迷宮を出ることはできなかった。ルーンロードのいうとおり、それを前にしたときに剣はいった。

『主よ、我を手に取るのだ……』

と……。

そしてシェゾは、思わず岩に突き刺さっていた剣を手に取ってしまった。

『果たして、それすらも偶然でしょうか……？』

ルーンロードはいう。

『まるであなたを待っていたかのように、そこにたたずんでいたのではありませんか……？』

「…………」

確かに、偶然といってしまえばそれまでだが、運命として片づけることもできる。するとオレも運命の歯車のひとつにすぎないのか……？　世を支配するような大魔導師になるのは悪くない……。だが、結局は勇者に倒されてしまう運命なのか……？　冗談じゃないぞ！　人生っていうのは結果がわからないから張り合いがあるんじゃないか！　結果がわかってる人生なんて、いまのタイクツな生活と変わりゃしない！　とりあえず登校して、中身がわかりきってる授業を受けて、そして帰る。毎日そのくり返し……。オレの運命全体がそれとおんなじなんて、あまりにもイヤすぎる！　そんな運命ならオレがムリヤリにでもねじ曲げてやる！　誰も運命を変えられないなら、オレが初めての人間になってやろうじゃないか！　そうだ、オレはシェゾ・ウィグィィ——神を汚す華やかなる者だ……!!

キッ！

「………」

決意と闘志を胸に、シェゾはルーンロードをニラみつけた。

『ようやく運命を享受する気に……なった眼ではありませんね……』

「運命なんてくそくらえだ！　運命も、お前も、すべてをブチ壊してやる……!!　オレの前に立ちはだかるものすべてをだ!!」

『う～ん……、いいですねぇ……。その気勢、その憎しみ……。憎しみが大きければ大きいほど、それだけ美しい悪の華が咲くというものですが……。残念でなりません……』

ルーンロードは肩をすくめる。
『運命を享受する気がないというなら、もはやこれまで……。あなたの魔導力をすべていただくことにします……。あなたの若々しいエネルギーがあれば、次の後継者が現れるまで、私の身体もつことでしょう……』
「ふざけるな!!」
いいながらシェゾは、呪文を唱えるべく意識を集中させる。しかし次の瞬間、
『主よ！』
突然、奇妙な声がシェゾの頭の中にとどろいた。ルーンロードの声とは違い、どっしりとした安定感がある。
それは、右手に握った闇の剣の声だった。
『魔法だけでは彼奴に勝てぬ！　我を使え！　我と意識を同調させるのだ……！』
剣の指示に、頭よりも身体が先に反応した。

「おおおおおおおおおおおおおおっ……!!」

闇の剣を振りかぶり、無心でルーンロードに突撃する。
そこから先は、よく覚えていない。運命のあやつり糸を断ち切りたい一心で剣を振り、呪文を唱えたような気がするが、いまとなっては本当に運命に逆らいたくて戦っていたのかどうか

さえわからない。
　気がついたら、シェゾは肩で息をしながら、足元に倒れ伏したルーンロードを見つめていた。キズだらけで、汗だくで、短めの銀髪が汗で額にはりついている。身体中には、何十キロもの距離をダッシュしたような疲労感が駆け巡っていた。
　しかし足元のルーンロードは、シェゾ以上にキズだらけ。どうやらシェゾは勝ったらしい。それだけはいまのシェゾにも判断できた。
『ふふふ……』
　ルーンロードはまだ生きていた。口の端から血をしたたらせながら、ゆっくりと顔を上げる。そこには、満足感をたたえた笑みがあった。
『すでに、あなたの魂には闇の種が植えられ、芽が顔を出しました……』
「……………」
　いまのシェゾには、ルーンロードのつぶやきを聞き、ゼェゼェとあえぎ声を返すことしかできない。
『わたしにはわかりますよ……。いずれ咲く華の色が、美しい闇であるというのが……！』
　がはっ！
　セリフが終わった瞬間に、ルーンロードは喀血(かっけつ)し、再び床に伏した。やがて彼の身体は細かい砂と化し、ザザァッと音を立てて崩れていった。まるで、二百年ものあいだせき止めていた

砂時計を、一気に解放したかのように……。

「…………」

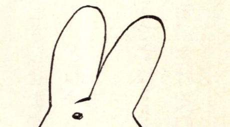
シェゾは、相棒の闇の剣を片手に、まだ整わない息をしながら見つめるだけ。

ひとつが終わりを告げ、また新たなひとつが始まった瞬間だった……。

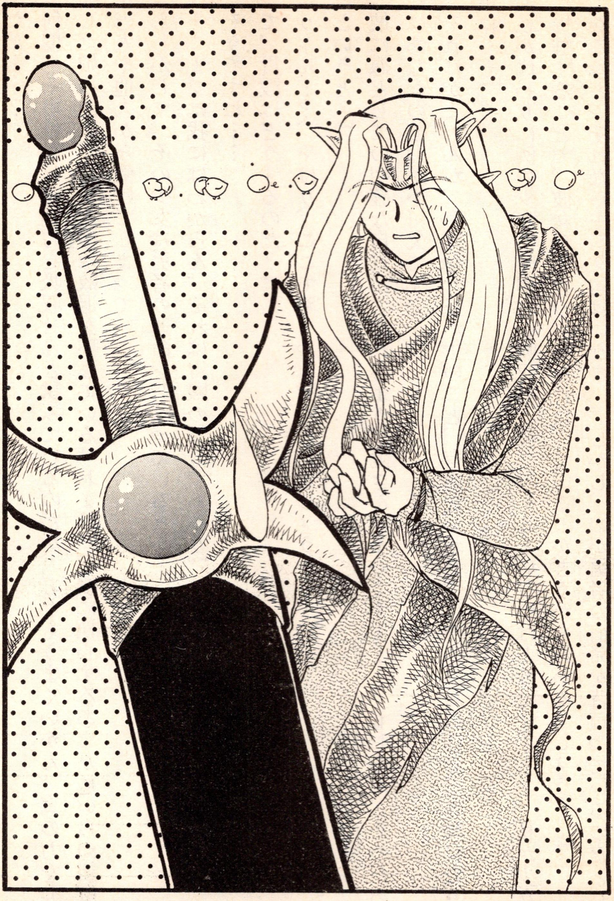
壱　〝闇（やみ）の剣〟

1

『ちょいと、剣さん……』
『誰だ？　我を横丁の若ダンナのように呼ぶのは？』
『私ですよ……』
『貴殿は死んだのではなかったか？　我が主にすべてをたくして』
『そこなんですがねぇ……。あのとき、かなりメチャクチャな戦いになってしまったじゃありませんか……。彼もブチ切れてしまったし……』
『確かに』
『ですから、彼が運命の享受を自覚しているのかどうか心配になりましてねぇ……。最後の力をふりしぼって、この世に舞い戻ってしまいました……』
『なるほど』
『で、下界ではあれから何年もたっているようですが……、どうですか……？　あなたの主人



は〝悪〟としての自覚をもって活動していますか……？』
『ふ〜む……。あれから学校とやらも卒業し、人間社会的地位としては一人前の魔導師になった。その後は我とともに諸国を旅し、かなりの見聞を広めている。魔導力もかなり高まっているようだ。他人の魔導力を吸収してたな』
『ん〜……、いいですねぇ……』
『探求心もなかなかのものだ。古文書(こもんじょ)にある事柄はすぐにでも試そうとする。もちろん、他人への迷惑などおかまいなしにな』
『ほほう、なるほど……』
『ただ、貴殿にたくされた運命を自覚しているのかどうかは、はなはだ疑問だな。心の奥底で眠る悪の種が、我が主を動かしているようにしか見えん。単に、悪のニオイにひきつけられているというか……』
『やはりそうですか……。私も似たような状況でしたから……、それほどさしせまって心配はしていないんですが……。そろそろ自覚してくれてもいい頃合いなんですけどねぇ……』
『ふむ……』
『ところで……、ひきつけられるといえば、彼はある少女にご執心のようですね……』
『うむ。我も感じたが、その娘には過去に例を見ない魔導力が眠っている。主はその魔導力を手に入れ、さらなる境地を目指しているのだ。ただ……』



『何度もその娘から魔導力を吸収せんと試みているのだが、どうもうまくいかん。真の力を発揮した娘の前に、必ず無様な敗退を喫している。おまけに、娘に執心するあまりにいらぬ誤解を当人や他人から受けてしまっている』
『もしかして、その少女は勇者の運命を背負っているとか……』
『そこまでは我にはわからん。それは貴殿の領分であろう』
『そうですね……』
『で、貴殿はどうするのだ？』
『う～ん……、やはり、ここでちょっと活を入れましょうか……』
『というと？』
『彼に悪としての明確な自覚が生まれるよう、働きかけるのですよ……。もちろん、そのためにはあなたの協力が不可欠です……』
『それはかまわんが、意固地な我が主のこと、有無をいわせずにやったら以前の二の舞になりかねんぞ』
『私が代わりに例の少女の魔導力を吸収し、彼に与えるというのはどうです……？　私が少女に接触することで、彼女が勇者の宿命を背負っているのかどうかもわかるでしょう……』
『なるほど、それなら主も文句はいうまい。しかし、娘が勇者の宿命を背負っているのだとし

たら？』
『運命的に勝てないしくみになっているので、その場合は彼にあきらめていただきます……。もちろん代替物を用意しますが……』
『そこまでやって、もし我が主に悪の自覚が生まれなかったら？』
『種が芽吹きはじめているのですから、そうなることはまずないと思いますが……。そのときには、後継の資格なしと判断して私の魔力となっていただきます……。悪でなければ、あなたを所有する資格だってないわけでしょう……？』
『確かに。我は、悪の――邪念や憎しみといった、いわゆる負のエネルギーを刃に変える。悪の華が心に根差していなければ、我を持っていても無意味だ』
『というワケで、私に協力してください……』
『よかろう。しばし主のもとを離れて、貴殿の計画に力を貸すことにしよう……』

2

ぽっかぽかの陽気である。
雲ひとつない快晴に太陽がサンサンと笑顔を見せていて、気温はむしろ暑いくらい。しかし、そよそよと流れる風が、イイ感じに涼しくさせている。
暑くもなく寒くもなく、春が過ぎて梅雨に入る直前の、ちょうどいい頃合い。テラスや草原で昼寝でもしたらさぞかし気持ちイイだろう、なぁんて誰もが考えるような陽気であった。
うらやましいコトに、草原のド真ん中でそれを実行しているヤツがいた。
「う〜ん……」
ゴロリゴロリと寝返るたびに、青いバンダナを巻いた短めの銀髪がサラサラとゆれる。身体（からだ）を包むローブは髪と同じ白銀で、バンダナと同じ青いマントを肩のアーマーでとめている。
名をシェゾ・ウィグィィといい、若くして古代魔法にも通じ相当な実力を持ちながらも、まわりの人間からはなぜかヘンタイ呼ばわりされている、希代の魔導師だった。
「う〜ん……」
ゴロリ。
と寝返るたびに、ザザァッ……！　とさわやかな風が通り過ぎる。
「う〜ん……」

ゴロリ。

と寝返るたびに、チチチチチ……！　と小鳥たちがさえずる。

「う～ん……」

ゴロリ。

「うう～ん……」

ゴロリ。

シェゾは、初夏の清々(すがすが)しい陽気を満喫して、すやすやぐっすりと……、

「う～ん……」

ゴロリ。

眠っちゃいない。

シェゾの寝顔は、昼寝を心から楽しんでいるというカンジではなかった。むしろカタチのいい眉(まゆ)をしかめて、アブラ汗をかきながら、苦しそうに何度も寝返りをうっている。初夏の昼下がりというよりは、真夏の熱帯夜というカンジだ。

「う～ん……」

ゴロリ。

「うう～ん……」

ゴロリ。

「うぬぅ……っ！」
ゴロリ。
「うぉのれぇぇぇぇっ……!!」
がばっ！
突然、悪夢から覚めたみたいに、シェゾは跳ね起きた。
「ぜーはー、ぜーはー……」
そして、宙を見つめて肩で息をする。
悪夢から覚めたみたいに、ではなく、シェゾは本当に悪夢から覚めたのだった。
闇(やみ)の剣の紛失――。
たとえ夢であっても、シェゾにとって、これほど最悪の事態はない。魔導師としてかなりの実力を持ってはいるが、闇の剣がなければ有無をいわせぬ悪のパワーも半減である。
しかも、慌てて闇の剣を探しているシェゾのところに、アルルやルルー、サタンといった見知った連中がやってきて、シェゾの無様な姿を笑うのだ。その笑い声は、プライドが空より高いシェゾの怒りを一気にバクハツさせた。そして、あざ笑う連中を魔法で吹き飛ばそうとした途端に眼が覚めたのである。
「夢か……」

確認するように、シェゾはつぶやいた。まだ呼吸が荒いが、夢だということがわかって、ちょっと安心。

「ふぅ……」

深呼吸をしつつ、右手はかたわらをまさぐる。寝る前に、闇の剣をそこに置いといたのだ。もちろん、夢ではない現実なのだから、そこに剣はあるはず。しかしあんな悪夢をみたあとでは、なんとなく心配になってしまうというもの。

「………」

ガサガサ。

「……?」

ガサガサ。

「……!?」

ガサガサ。

しかし、いくら地面をさぐっても、そこに闇の剣らしい感触はなかった。指先の神経から脳に伝わってくるのは、草と土の存在ばかり。

「ま、まさか……」

おそるおそる、シェゾはそちらを見た。

果たしてシェゾのイヤな予感は大当たり！　寝る前に確かに置いたはずの場所から、闇の剣

はコッゼンと姿を消していた！

「あ———っ!!」

慌ててシェゾは飛び上がり、まわりの草むらや木々のあいだ、岩の下とそこらじゅうを探しまわった。……が、闇の剣は見つからない。

「いまここで闇の剣を失ったら……！」

なにやらつぶやきながら、焦りまくりで辺りを探しまくる。だが、シェゾの眼につく範囲内では、大事な闇の剣は見つからなかった。

右を見ても、左を見ても、前を見ても、後ろを見ても、上を見ても、下を見ても、やっぱりない。

一応、自分の位置を確認してみる。寝返りのくり返しで、闇の剣ではなくシェゾのほうが移動してしまっている可能性があるからだ。けれど、もともと寝相はいいほうだし、やはり自分が動いた様子はない。寝る前と同じ光景が、シェゾのまわりに広がっている。すがすがしい陽気はまだ続いているが、ハッキリいって、いまのシェゾにはそんなものを味わっているヒマなどありはしない。

「ぬおお———っ！　どこだ!?　どこにある———っ！　アレがなければ、わた……オレは、オレはぁぁぁぁっ……!!」

大騒ぎしながら、シェゾは再び捜索を開始。
そこへ……、
「カーくん、今日の夕ゴハンはなににしようか？」
「ぐー！」
「え――っ？　またカレー？」
聞きなれた声が、シェゾの耳の中に飛び込んできた。見ると、亜麻色の髪をちょこんと結んだ少女と、黄色い奇妙な生き物が歩いてくる。
「昨日もカレーだったじゃない」
「ぐぐー！」
「そりゃあボクも好きだし、キミも大好きなのは知ってるケド……」
アルル・ナジャとカーバンクルのコンビだった。アルルの右手には、カーバンクル柄のサイフが握られている。その様子とふたりの会話からみて、どうやら夕食の買い物をしようと街に向かっているところらしい。
「あれ？　シェゾじゃない」
シェゾが隠れてやり過ごそうかと悩んでいるうちに、アルルはこちらに気がついた。
「こんなところでなにしてるの？」
「ああ、まあな……」

気のない返事をしつつ、シェゾはいぶかしんだ。

タイミングがよすぎるな……。闇の剣がないと気づいた途端に姿を現すとは……。まさかとは思うが、アルル・ナジャが闇の剣を……？

しかしシェゾは、すぐにそんな考えを打ち消した。いくらなんでも疑いすぎだ。アルル・ナジャがそんなコトをするはずがない。

たとえからかい半分であっても、ヒトの物を盗むような邪悪な考えは、アルルの頭の中には絶対に出てこない。性格としてはむしろお人好しに属するほうで、闇の剣を失ったことを素直に話せば、本気で心配していっしょに探してくれるだろう。

ふむ、コイツに手伝わせるか……。ふたりで探せば見つかるのも早かろうし、こっちはサボって昼寝の続きとシャレこんでもいい。

と思ったが、またすぐに考えを打ち消した。ふと、悪夢のワンシーンが脳裏によみがえったからだ。

アルル、ルルー、サタン、ルシファー、ミノタウロス、すけとうだら、ドラコケンタウロスなどなど、よく見知った連中がおおいかぶさるように集まり、オドオドと闇の剣を探すシェゾをあざ笑うのだ。とりわけアルルは、腹をかかえて大爆笑していた。

いま現在、あの悪夢は正夢となっている。となると、ここで闇の剣をなくしたことをアルルに話せば、きっと夢と同じように大爆笑するに違いない。

「どうしたの？　シェゾ」
そのコトバで我にかえると、心配そうな顔でのぞきこむアルルの顔が眼の前にあった。
「わあっ!!」
「そんなにビックリしなくてもいいじゃない」
「はは……、ま、まあな……」
「どうしたの？　顔色悪いよ」
「い、いや、なんでもないぞ……」
「そぉ？　なぁんか今日のシェゾ、様子がおかしいよ？　まあ、いつもおかしいケド……」
「ムッ！　わた……オレの様子がおかしかろうが顔色が悪かろうが、お前には関係のないコトだろうが」
「そ、そりゃまぁ、そうだけど……」
「わかったらさっさと行け。オレは忙しいんだ」
「またなんか悪いコト企(たくら)んでるんじゃないのぉ？」
「仮にそうだとしても、お前にいうワケがないだろう。だいたいお前は、買い物の途中じゃないのか？」
「あ、忘れてた」
「あいかわらずマヌケなヤツだ。まあとにかく、オレもお前も忙しい。互いにこんなところで

ダベってるヒマなんかないはずだぞ」
「わかったよ。そんなにいうんなら、ボクもう行くからね」
アルルは、くるりと背を向けた。
「行こ、カーくん」
「ぐー！」
そしてふたりは去って行く。シェゾはその姿を小さくなるまで見送り、完全に見えなくなったところで、
「やれやれ……」
どぉぉぉっ、とタメ息をついた。とにもかくにも、ひとまずの危機は去ったワケだ。だがここから先、知り合いの連中にさとられないように闇(やみ)の剣を探さねばならない。でないと、剣の紛失のみならず、連中の嘲笑(ちょうしょう)までもが現実に……！
「闇の剣よ——っ！　出てこ——いっ！」
シェゾはまた探しはじめた。
ピンチは、まだ始まったばかりである……。

3

のどかな昼下がりである。
まわりの山々に根づいた樹たちは、いっぱいの陽光をあびて青々とした葉をしげらせ、さわやかな風の精霊や鳥たちが楽しそうにそのあいだを行き交う。耳をすませれば、風の音にまじって、カッコウやホトトギスの声。
そんな、初夏の風情にかこまれた一軒の茶屋。〝ぷよまん本舗〟のノボリがはためくその茶屋で、ルルーはひとり、優雅な茶を楽しんでいた。
ぷよまん本舗の新メニュー、〝ぷよせん〟をパクつき、渋めの抹茶をひと口すする。
「あー、おいしっ★」
せんべいをかじるパリパリという音も、茶をすするずずぅっという音も、山あいの雰囲気をかき乱すことは決してない。むしろ、のどかさをより引き立てている。
「お茶のおかわりはいかがでっか?」
「ありがとう、いただくわ」
店員のさそりまんの声に、ルルーは手にした文庫本から眼を離さずに応えた。そして、いれたての茶をすすり、ページをめくる。
ルルーは、この名も知らぬ山岳地帯に、たったひとりで訪れていた。お供のミノタウロスも、

執事のじいも、遠くはなれたルルーの屋敷で留守番である。
もちろん、単に茶を楽しむためにやってきたのではない。ぷよまん本舗は、全国的規模のチェーン店。わざわざこんなところに来なくても茶は飲めるし、ぷよまんやぷよせんを食べることができる。
ルルーがこんな人里はなれた山の中にやってきたのは、修業のためだった。屋敷にほど近い〝腹いっぱい山〟でなら、何度かひとりで修業したことがあるけれど、こんなに遠いところまで——おまけに山の名前すら知らないところにひとりで来たのは、まったくの初めて。
ハッキリいって、さみしくないといえばウソになる。ミノタウロスやじいがいないのもさることながら、愛するサタン様の顔が見れないのがなによりツライ。しかしこれも、サタン様に認められるようなリッパなレディになるための精神修養だと自分にいい聞かせて、なんとか涙がこぼれそうになるのをガマンし続けているのだった。
といっても、こうして茶を飲みながら文庫を読むのが修業、というワケではない。いつもはちゃんと、樹を相手に格闘技の打ちこみをやったり、滝にうたれて己(おのれ)を見つめ直したりしている。だけどそればかりでは、肉体的にツライ。「精神修養も結構だが、無意味に肉体をイジメるのはよくないぞ」と格闘技の師匠もいっていた。健全な精神は、健全な肉体に宿るのである。
というワケでルルーは、お茶とぷよせんと読みさしの『必殺ばたんきゅ〜人』を楽しみつつ、ひとときの休養をとっているのであった。

茶をもう一杯おかわりしたところで、ルルーはザッザッという足音が近づいてくるのに気がついた。旅人かしら？　と思いつつ、気にせずルルーは文庫のページをめくる。この茶屋は街道沿いにある。旅人なんて珍しくもないし、その旅人が疲れた足を休めようと茶屋にやってきたとしてもゼンゼン不思議ではない。

それに、ルルーは足音なんかに気を使ってるヒマなどなかった。ストーリーが佳境に入り、いまや〝必殺ばたんきゅ〜人〟が悪者を退治しに行こうとしているところだったからだ。

やがて、ルルーがまったく注意をはらわなくなった頃、足音は止まった。その足音の主らしい人の影が、ルルーにおおいかぶさるように重なる。

ルルーは、影のコトなどしばらく気にせずに読書を続けていたが、ふと、影がずっと微動だにしないのを不思議に感じはじめた。影の位置から考えて、どうみてもイスに座って一服してるというワケではない。明らかに、道ばたにぼーっと突っ立っている。

それを気にしはじめるともー止まらない。気が散って読書どころの騒ぎじゃないし、オマケに手元が暗くて読みづらいことこのうえない。

「ちょっと、そんなところに立たないでよ。本が読めないじゃない」

と文句をいいつつ影のほうを見た途端、

「あら？」

ルルーはすっとんきょうな声をあげた。そこには、よく見知った人物が立っていたからだ。

それも、できるなら会いたくない部類の。
青いバンダナを巻いた、キレイな短めの銀髪。黒いツメエリの衣服に身を包み、それをさらに漆黒のマントで包んでいる。右手には動物の頭ガイコツかなにかをかたどったような杖。
美形だが邪悪に切れ上がった蒼い眼の、いかにも魔導師ふうの男。
シェゾ・ウィグィィだった。
「なんの用?」
ニラむというほどではないが、明らかな嫌悪の視線を向けつつ、ルルーは文庫本を置き、ゆっくりと立ち上がった。いきなりシェゾが襲いかかってきても、すぐに対応できるようにするためだ。実際には、さすがにそこまではならないだろうが、シェゾが出てくるとナニが起こるかわからない。しかも、必ずロクでもない結果になる。
さらにルルーは、ついこのあいだ、このシェゾにヒドイめにあわされたばかりである。そんな相手に気軽なアイサツができるほど、ルルーはお人好しじゃあない。
「…………」
一方のシェゾは、ルルーが立ち上がって身構えるまで、ずっと無言だった。いつもなら「なんの用、とはご挨拶だな」というようなセリフが出てくるところだが、今回はまるで悪霊が乗り移ったような凶々しい眼で、じっとルルーを見据えている。
「ルルー……」

お茶が冷たくなるほどの間をあけて、ようやくシェゾが口を開いた。
「しばらくオレにつきあってもらう。イヤとはいわせん」
「はぁ？」
ルルーはまたすっとんきょうな声をあげたが、すぐにあきれ半分、怒り半分の表情になる。
「あなたねぇ……、あたくしが同じテに二度もひっかかると思ってるの？　アルルじゃあるまいし」
「なんのことだ？」
「トボケるんじゃないわよ！　こないだ、伯爵の城の前であたくしをコケにしたでしょう！」
「ああ……。確か、そんなこともあったな」
ついこのあいだにあわされたヒドイめとは、このことである。
突然、シェゾがルルーに愛の告白をしたのだった。〝魔界の貴公子〟サタンを一途に思いこがれている、ルルーの乙女心を大きくゆるがすほどマジで。そしてルルーは、サタンを取るかシェゾを取るか、繊細な乙女心を本気で悩ませたのであった。
だがそれは、そんなルルーの思い悩む姿を見たいがための、シェゾの——本人としてはちょっとした——イタズラだったのである。もちろん、ルルーの乙女心はズタズタになったが、そこで泣いたりするようなことはルルーはしない。格闘技の達人である鉄腕お嬢サマの怒りをバクハツさせて、ルルーはシェゾに豪快な背負い投げをみまったのであった。

ヒドイめにあったのは、むしろシェゾだといえた。

「いっとくけど、あたくしはもうそのテには乗りませんからね！」

しかし自分のほうがヒドイめにあわされたと信じて疑わないルルーは、そのときの怒りを思い返して荒々しくいった。

「いったい、さっきからなんのコトをいっているのだ？」

「トボケないでっていってるでしょ！　さっきいったじゃない！『オレとつきあえ』って」

「断っておくが……、お前とのマヌケな会話につきあったり、お前をからかっていられるほど、オレはヒマではない」

シェゾの表情は、凶々しさを凍りつかせたまま、さっきからまったく変わっていない。

「オレと、ではなく、オレにつきあえといったのだ」

「え？　そーだっけ？」

「そうだ」

「だったら、あたくしの聞きマチガイだったみたいね。ゴメンなさい」

「そんなコトはどうでもいい。とにかくお前は、しばらくオレと行動を供にしてもらう。道案内も兼ねてな」

「道案内？」

「ルシファーのところに案内してもらう」

「どうして？　あなたなんかが、ルシファー先生になんの用事があるワケ？」
「理由をお前が知る必要はない」
「もし……」
ルルーはようやく、シェゾのただならぬ気配に気づきはじめていた。顔をあわせてからこっち、表情がゼンゼン変わっていない。しかも、氷のように鋭い邪悪さとともに、怒りのバクハツをガマンしているかのような、せっぱ詰まった顔のままで。いつもなら、ニヤリと口をねじまげたり、見下ろすような視線を向けたりするのに……。
「あたくしがイヤだといったら？」
「オレはいったはずだ、イヤとはいわせんとな。お前に選択権はない」
「いつものあなただったら、ちょっとは考えてあげなくもないケド……、いまのあなたに土下座されてもイヤね。なんだか、ものすごく悪い予感がしてきたわ。あなたをルシファー先生に会わせたら、ゼッタイによくないコトが起こる……」
「素直にしたがったほうが身のためだぞ。このままオレをほうっておいたら、もっと悪いことが起こるかもしれん」
「信じられないわ。もしそれが本当だとしても、いままであなたがしてきたコトを考えれば、信じられるワケないと思わない？」
「よかろう」

バサァッ！

大きくマントを広げて、シェゾは魔法の杖を構えた。

「力ずくでもオレに従ってもらう。これ以上、問答している時間はない……！」

4

「だあっ！　どこだぁ――っ！」

陽がだんだんと傾きはじめる中、シェゾはあいかわらず闇の剣を探しまくっていた。

「くっそぉ！　いったいドコにいったんだぁ!?」

しかし、いっこうに見つかる気配はない。

「こんなところでグズグズしてるヒマなどないのに……！」

ヒマがないワリには昼寝なんぞしていたシェゾだが、もはやそんなコトにこだわってるバアイではない。

いまや、シェゾのまわりは戦場跡のような状態になっていた。地面はそこらじゅう掘り返され、草どころか木々までも根っこまで引き抜かれている。めぼしい石という石は逆さにひっくり返され、アリの巣にすらほじくったような跡がある。このまま闇の剣が見つからなければ、世界中の地面を耕しかねない勢いだ。

「でぇえっ！　ジャマだ――っ!!」

ドッゴォンッ！

眼の前にあった樹を――これまでと同じように――怒りにまかせて呪文で吹き飛ばす。しかしそんなコトをしても、闇の剣が見つかるはずもなかった。

「ぬぉぉぉぉぉぉ――――っ！　闇のけ――――ん!!　ドコだ――――っ！」

張り裂けんばかりの大声で呼ぶが、ヤケに清々しい風に溶けこむだけで、やはり相手の応答はまったくない。

これが普通の剣ならば、いくら呼びかけても応えが返ってくるはずもない。しかし、闇の剣には、ヒトと同じような〝意識〟を持っている。呼べば、それなりの応答が頭の中に飛びこんでくるはずだった。それがないというコトは、少なくとも会話できるような範囲に闇の剣は存在しないことになる。

「闇のけ――――ん!!　出てこ――――いっ!!」

シェゾは再び叫んだが、やはり応えはない。

そのとき！

「おちゅーしゃでござる――――っ!!」

ひゅ――――ん!!

突然、カン高い声と風を切る音が、シェゾの耳に飛びこんだ。そして……！

スコ――――ンッ!!

ナニかが、イイ音をたててシェゾの後頭部にブチ当たった。

「誰だ!?」

バサァッ！　とマントをひるがえしてシェゾは振りかえるが、そこにはなにもない。ただ、シェゾに掘り返された地面となぎ倒された木々の、哀（あわ）れな風景が広がっているだけだった。

ひゅるるるる……。

と、わびしさを強調するように風が通りすぎて行く。

「おかしいな……？」

念のためにぐるりと見回すが、シェゾの後ろアタマにナニかをぶつけた犯人らしきものはどこにも見当たらない。

「気のせいか……？」

くるりと向き直ったシェゾの後頭部には、ハチのモンスターに抱えられた大きな注射器が、深々と突き刺さっていた……。

5

ドドォンッ!!

のどかな山林の静けさを蹂躙(じゅうりん)するような、何度かめの爆発音が、あたりに響き渡った。そして、バキバキという樹の倒れる音がそれに続く。

「たぁっ！」

タン！　タン！　タンッ！

ルルーは、飛び石を渡るような連続ジャンプで、次々と倒れる木々の中をかいくぐっていく。

もちろん、そのあいだにも相手との間合いをつめるのを忘れない。

そして、敵の黒い姿を射程距離内にとらえた瞬間、ルルーはジャンプ一番！

「や――――っ!!」

水鳥のように華麗に舞ったかと思うと、その勢いを利用して突き刺すような急降下キック！

敵――シェゾは、背中を向けている。絶対に当たるタイミング！　ルルーはずっとこれを狙(ねら)っていたのだ。後ろに眼をつけてないかぎり、避けることは不可能。そのままキックをくらうか、振り向いてなんとか防御するしかない。しかし、充分にスピードの乗ったルルーのキックなら、ガードの上からでもかなりのダメージを与えられるはず！

くるり。

ルルーの予想通り、シェゾは振り向いた。達人の蹴(け)りをモロに受けるより、せめてガードしたほうがいいに決まっている。

ただ、ルルーの予想と違っていたのは、シェゾが——驚きの表情ではなく——人食いザメのように邪悪な笑みを浮かべていたことだった。ヤバイ！　とルルーは直感したが、もうキックの軌道を変えることなんてできない。

「あまいな……」

つぶやきながらシェゾは、魔法エネルギーを凝縮させた右手を、掌底突きのように繰り出す。そして、ルルーの脚とシェゾの手が触れた瞬間！

「アレイアード!!」

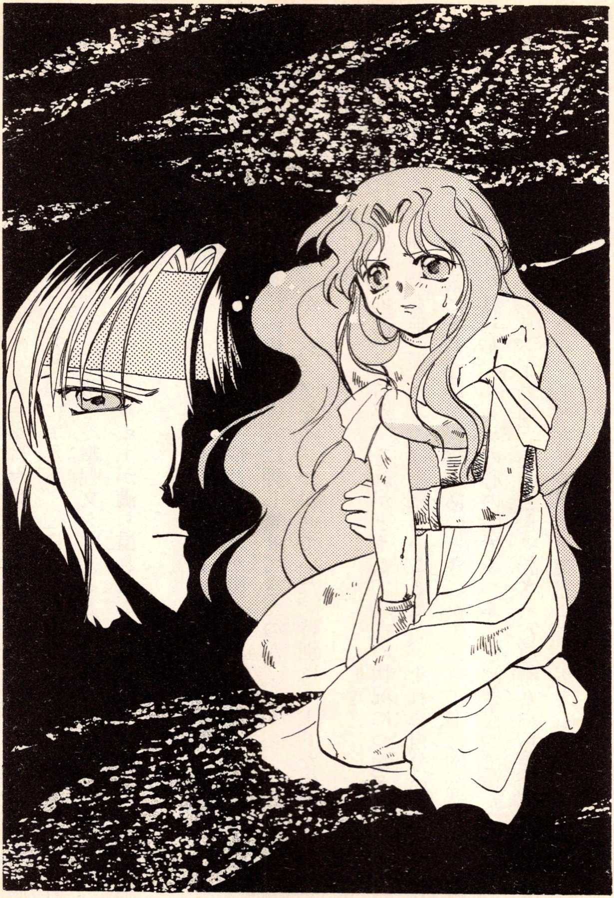
ドドォンッ!!

呪文の詠唱とともに、大爆発がふたりを包みこんだ。

「きゃあああああっ！」

渾身(こんしん)の飛び蹴りがあっさりとはじかれ、ルルーの身体(からだ)は大きく弧を描いて宙を舞った。そして、どさりと地面に落ちる。幸い、爆発に弾き飛ばされた勢いのまま樹に叩(たた)きつけられるということはなかった。戦場は鬱蒼(うっそう)とした森の中だったが、シェゾの呪文によってあたりの樹々が

根こそぎ倒されていたからだ。
「くっ……！」
ボロボロの身体を気力で立ちあげようと、ルルーはもがく。全身のひどいキズは、いまのアレイアードによるものだけではなかった。すでに、シェゾの攻撃呪文を避けきれずに何度も食らっていたのだ。逆に、ルルーの攻撃はまったく当たらない。接近戦オンリーのルルーは、遠距離戦の得意な魔法使いに対しては明らかに不利だった。遠い間合いから魔法をバンバン打たれては、拳の間合いに近づくことすらままならない。近づけたとしても、得意の破岩掌や女王乱舞が当たらないのではオハナシにならない。
それでもルルーはあきらめずに起死回生のチャンスをうかがっていて、ようやく取ったシェゾの背後にキックを繰り出したのだが、それさえもあっさり見切られ、あげくの果てにカウンター攻撃まで食らってしまった……。
「ぐぅ……っ！」
節々の痛みを懸命にこらえて、ようやく上半身を起こしたとき、
チャキッ！
ルルーの眼の前に、魔法の杖の先が突き出された。動物のホネかなにかをかたどった彫刻がどアップになる。ちょっと視線をずらすと、その先には、出会ったときよりもさらに悪魔的な雰囲気を増しつつあるシェゾの姿があった。



ドロとキズだらけのルルーに対して、シェゾはマントにすらホコリひとつつけていない。眼の前で放った呪文の爆風に巻きこまれたのにである。逆にいえば、シェゾには爆風にたえられるだけの自信があったからこそ、至近距離で攻撃呪文を唱えるという危険を冒したのだ。それほどまでに、シェゾの体内にはエネルギーが満ち溢(あふ)れていた。まるで、満月の夜の人狼のように。

だが、外見と表情とはうらはらに、シェゾの心の中はそれほど穏やかで冷静ではなかった。魔的な力が身体の中を駆け巡ることに対する、悦(よろこ)びと怒りが戦っているのだ。

なぜ、突然にエネルギーの奔流が津波のように押し寄せてきたのか？

その理由がみつからないことが、シェゾをイラつかせていた。特別にハードな修業をつんだワケではない。ではなぜ……？

キッカケについてはだいたい推測できるが、それがどうして現在の状況につながるのかがイマイチはっきりしない。強い力を手に入れるのは喜ばしいことだが、それに自分の意志が介在していないコトが、マッタク気に入らない。14歳のあのとき、ルーンロードに突然「後継者になれ」といわれたときのような怒りが、シェゾの心の中でふつふつと沸き立っていた。

あのときのオレは若かった……。いまでは、あのときに託された運命とやらを成就させてやろうとさえ考えている。だったらなぜ、あのときの感覚が突然によみがえるのだ……？

その理由がみつからないのも、シェゾは気に入らなかった。

「これ以上、よけいな手間をかけさせるな」

荒れ模様の内心を鉄の表情で隠して、シェゾはいった。

「わからなければ、何度でもいってやる」

パリパリパリッ……!

杖の先が、魔法のエネルギーでスパークし始める。そのまま一気にパワーを解放すれば、ルルーの小さくてカタチのいい頭部などカンタンに消し飛んでしまうだろう。

「お前と遊んでるヒマなど、オレにはないのだ」

少しでもヘタなことをすればすぐにでもそうする、という視線で、シェゾはルルーをつらぬいた。

「………」

つ、強い――。

ルルーは無意識にそうつぶやいたつもりだったが、くちびるがかすかに動いただけだった。

その心のつぶやきは、シェゾの圧倒的なパワーに対する、恐怖と驚きから出た本音であった。

シェゾが魔導師としてかなりの実力を持っていることは、ルルーは以前から知っていた。魔導力への飽くなき執念と、それを手に入れるために努力するさまに、学ぶべき点もあるとさえ思っている。

だが、いざ戦闘になると、まるで英雄物語の悪役のように負けてしまう。ルルー、そしてア

ルルはこれまでに、シェゾと何度も戦いを繰り広げてきた。その結果はいつも同じ。怒りをバクハツさせたルルーやアルルの超本気パワーの前に、シェゾはなすすべもない。
それが今回、なすすべもないのはルルーのほうだった。それどころか、赤子同然の扱いである。いつものように、シェゾの悪事に対する怒りに燃え、潜在能力を発揮したワケではないが、それでも互角にわたりあえるくらいの実力はルルーも持っていたはずだった。それに、ルルーだってハードな修業をつんでいる。
そこに、おごる心があったかもしれないと反省するが、シェゾにまったく歯が立たない理由がそれだけではないのはわかりきっていた。まるで鬼神がのりうつったかのような凶相と、情け容赦のない戦いかた。明らかに、いつものシェゾとは違うナニかがあった。しかしルルーには、それがなんなのかは見当もつかない。
「さあ、ルシファーのところに案内してもらおう」
鬼のような眼で見下ろしたまま、少々イラだちぎみにシェゾはいう。
それにつられるように、ルルーはゆっくりとうなずいた……。

6

夕方になってしまった。

西の山の向こうでは、太陽が寝床の準備をしている。それにつられるように、カラスたちが、鳴きながら真っ赤な夕焼け空を家路に向かう。

しかし、カンジンの闇の剣は見つからない。

このあたりに闇の剣はおそらくないという確信と、念のために一応は探しておこうという思いとがビミョーなバランスで戦っているうちに、こんな時間になってしまった。

西の赤から東に向かって夜になっていく夕方の空と、カラスの鳴くカァカァという声が、ヤケにワビしさを強調している。ヒュルルルルルルル……、と秋を思わせるような風が、あたりに吹きすさぶ。

しかし、やはり闇の剣は見つからない。

「しかたない、今日のところはあきらめるか……」

精神的にも肉体的にもヘトヘトのシェゾは、ゲンナリした顔でつぶやいた。これだけ探して見つからないというコトは、少なくともというかやはり、この草原に闇の剣がないというコトである。だとすると、闇の剣がドコに消えたかまったく見当がつかないので、聞きこみなどで情報を集めなければならないだろう。だが、今日それをやるゲンキはもうないので、ひとまず

は身体を休めることにする。
「………」
ところどころシロートが耕したようなできそこないの畑が散らばる草原を、シェゾは今夜の宿を探すべく、街のほうにトボトボと歩きはじめた。
それからしばらくののち……、

「いで――――――――っ!!」

突然、大絶叫が草原じゅうに響き渡った。
そして、
「いでででででででででででででででででででっ……!!」
どたどたどたどたどたどた……!!
と草原じゅうを走りまわる。
闇の剣探しでキンチョーしていた神経をゆるめた途端、なぜか、シェゾの後頭部に剣で刺されたような激痛が走ったのだ。
「いでででででででででででででででででででっ……!!」
どたどたどたどたどた……!!
「あだだだだだだだだだだだだだだだだだだだっ……!!」

どたどたどたどたどた……!!
「ぐあああああああああああああああああああああああっ……!!」
どたどたどたどたどた……!!
あまりの激痛と、イキナリそれが襲ってきた驚きのあまり、シェゾは痛みの原因をつきとめることすら忘れてあたりを走りまくった。
「ええ〜い！　イタイならさっさと抜かんかぁっ！」
スッポン！
またイキナリ、カン高い声と、ナニかが引っこ抜かれるような音がした。
その瞬間！
じ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ん……!!
深々と突き刺さったクギかなにかを引き抜いた衝撃が、とてつもない痛みとなって、再びシェゾの頭を駆け巡る。
「――――――――――――――――――――――――っ!!」
じたばたじたばたじたばた……！
もはやシェゾは声もなく、まるで殺虫剤をかけられた断末魔の害虫のように、地面にゴロゴロと転がった。
やがて、陽もとっぷりと暮れ、夜のとばりが降りた頃……、

「ぜぇ、ぜぇ、ぜぇ……！」
ようやくシェゾは、突然に襲いかかってきた激痛から、なんとか四つんばいになって呼吸を整えられるくらいにまで立ち直った。
「まーったく、ニブイにもホドがあるでござるよ」
またカン高い声。
顔を上げると、そこにはハチと女のコをミックスしたようなモンスターが宙に浮かんでいた。妖精のように小さく、かわいらしい女のコがハチのヌイグルミを着たようなカンジ。手には槍のようなベル型の注射器を持ち、背中の羽根が一生懸命に羽ばたいて身体を空中で支えている。
「こちらも、お主にずっとつきあってられるほどヒマじゃないでござるのに……」
ヤケに時代劇がかった口調で、そいつ——ハニービーはいった。怒っているらしく、ホッペがプリプリとふくらんでいる。
「まったく、無礼な男でござるよ……」
がしっ！
ハニービーのセリフが終わるか終わらないかのうちに、シェゾはその小さな身体をひっつかんだ。
そして、
「キサマがやったのか……!?」

ずぅぅ……ん！
と怒りのオーラをまとった、大ハクリョクのコワイ顔でハニービーをにらみつける。その顔は、いつものシェゾ・ウィグィィとはほど遠く、むしろその昔に地上を支配しようとたくらんだ悪の大魔導師というカンジだった。
「オマケに……、ニブイ？　無礼だと？　このわた……オレにそのような口をきくとは、イイ度胸だ」
ぐぐっ……！
ハニービーを握った手に、ゆっくりと力がこめられる。出会い頭（がしら）にニブイだの無礼だのといわれた怒りと、激痛の原因に対する報復と、痛みにのたうちまわっていたところを見られたという気恥ずかしさと、それらすべてに対する腹いせが、その力を引き出していた。
「それなりのカクゴはできているんだろうな？」
シェゾは怒っていた。まあ確かに、イキナリ後頭部に注射を突き刺され、あげくにニブイだの無礼だのといわれたのである。怒らないほうがおかしい。しかしいまのシェゾの怒りには、それ以上のなにかがあった。まるで、痛みのショックで理性のタガが外れてしまったような、かぶっていた仮面がはがれてしまったような……、まさに豹変（ひょうへん）というカンジである。
ぐぅぅぅぅ……っ！
やがて、シェゾの手はハニービーの小さな身体をギュウギュウと圧迫し、ハニービーの顔は

途端に苦痛にゆがんだ。

「に……ニブイからニブイといっただけでござるよ！　こっちは、昼間にお主のところにやってきたというのに……！」

「ナニ!?」

「せ……拙者は、昼間にお主の後ろアタマに注射器を突き刺したのでござるよ。しかしお主は、マッタク気がつく様子なしだったのでござるよ……！」

「…………」

そういえば……、と空を見上げ、シェゾは思い出す。

闇の剣を探し回っている最中、ナニかが後頭部に当たったような衝撃を感じた。しかし振り返ってもナニかを投げたらしい人影とかも見当たらなかったので、そのまま剣を探し続けたのである。

振り返っても見当たらないのはあたりまえ。ハニービーはシェゾの後頭部にブチ当たり、そのままひっついていたからだ。

そんな出来事があったのが昼間。しかし、いまは夜。太陽に代わって、満月と星々が地上を見守っている。シェゾは闇の剣をなくしたショックと、剣探しに集中するあまり、注射器に刺された痛みをいまのいままでマッタク感じなかったのであった。

「だったら……！」

じろっ！
再びシェゾはハニービーを見下ろし、
「昼間のうちにいえばよかろうがぁっ……!!」
ぎうううううう……！
握った手にさらに力をこめた。
「イタタタタ……！　ゆ、ゆるしてくだされぃ……！　せ……、拙者の、ほんのたあいないイタズラ心でござるよ……！」
「ふん……！　まあよかろう。スナオにあやまったから、今回だけは許してやる」
パッ！
と手をはなすと、ハニービーはシェゾの手の上にへたりこんだ。
「で？　オレになんの用だ？」
「ぜぇ、ぜぇ、ぜぇ……！」
「まさか、オレに注射器を刺すだけだったんじゃないだろうな……？　だとしたら、本当に握り潰(つぶ)してやるぞ……！」
「ち、違うでござるよ……！」
ハニービーは慌てて呼吸をととのえ、
「これを届けに来たのでござるよ」

と、ふわふわの綿のようなふところから、ちっちゃく折りたたまれた紙を取り出した。
「なんだこれは？」
シェゾは左手で紙を受け取る。
「よくは知らぬ。拙者はお主に渡すよう頼まれただけでござる」
「これを渡すのに、お前はヒトのアタマを注射器で刺すのか？」
「いや、それは拙者の単なるシュミでござる。まあ、らいふわぁく、と申してもよいかのう」
「……なるほど、それはご苦労だったたな。なにか、礼をせねばなるまい。オレが無礼でないことを証明するためにもな」
「それにはおよばぬでござるよ。依頼主から、おいしいハチミツをたくさん頂戴(ちょうだい)したでござる」
「まあ、そういうな。お前、家はどっちの方角にある？」
「え？　あっちのほうでござるが……？」
と、ハニービーが東のほうを指差した瞬間！
がしっ！
シェゾは再びハニービーを握りしめた。
「な、なにをする!?」
「二度とオレの前に……！」

騒ぐハニービーを無視して、シェゾは大きくふりかぶり、

「姿を現すな――――っ!!」

ぶぉぉぉぉぉぉぉぉんっ!

ありったけの怒りをこめて、ハニービーを東の空に投げつけた。

「りふじんな〜〜りぃ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ……!!」

キラ――――ンッ!

叫び声の余韻を残して、ハニービーは夜空の星になった。

「やれやれ……。まあ、少しは気が晴れたからよしとするか……」

スッキリした顔でつぶやきながら、シェゾはハニービーから受け取った紙を広げた。しかしハニービーのサイズに小さく折りたたまれているので、広げにくいことこの上ない。まるでらっきょのように、広げても広げても紙が折られている。

「〜〜〜っ!」

いいかげんイライラしてきたところで、ようやくその紙に字が見え始めてきた。どうやら手紙らしい。

全部広げてみると、確かにそれは手紙だった。まるで幼稚園児が書いたようなキタナイ字であるため、解読するのにひと苦労だったが、月もしずみかける夜半近くになって、シェゾはよ

うやく手紙の内容を把握した……。

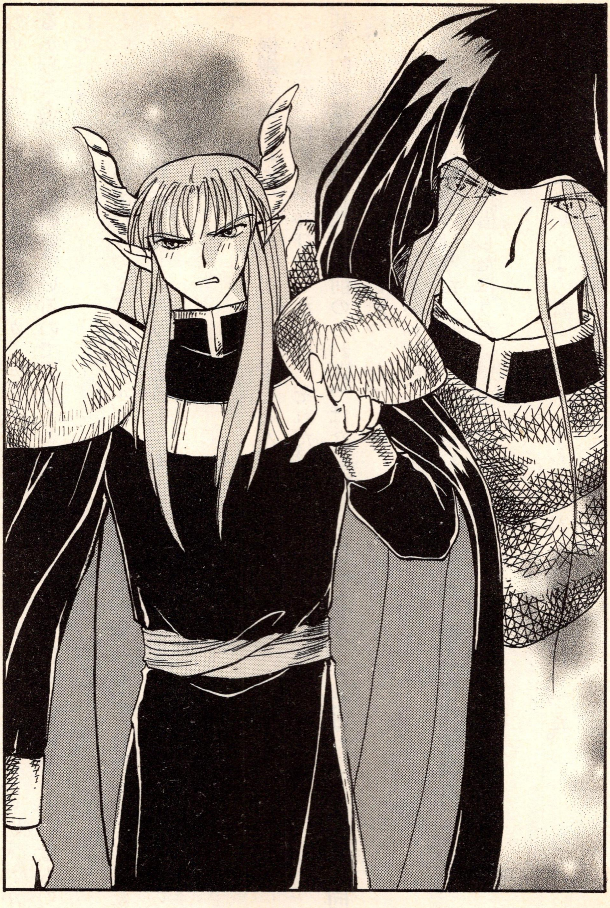
〝親愛なるシェゾ・ウィグィィへ――
闇(やみ)の剣を返してほしくば、我が軍門に降(くだ)れ。

すけとうだらより〟

7

『断っておくが、今回はオレじゃないぞ』
出し抜けにサタンはいった。
『では……』
深くかぶったフードの下半分からのぞく口をゆがめて、ルシファーが笑う。
『今回をのぞくすべての事柄は、お前がやったのか？』
『いちいち揚げ足を取るな！　どーして貴様はそうなんだ!?　すっげーハラが立つ！』
『騒ぐな、アルルくんが起きてしまう』
ビッ！
とサタンは、ルシファーの鼻先に人差し指を突き出す。
『貴様のそのスカした態度も、オレはだいいっっっっっっキライなんだよ！』
『そう怒るな。せっかくの兄弟水入らずじゃないか』
『ふん！』
たくさんの魔導書、魔法の巻物、魔法のアイテムで埋め尽くされた書斎。書籍などはもはや図書館なみの本棚にすら入りきらず、床や机に雑然と並べられている。
そんな部屋の中で、〝魔界の貴公子〟サタンとその双子の弟の魔導師ルシファーは、大きく

て古ぼけたマホガニーの机をはさんで、対峙して座っていた。
地下室で窓がないため、このルシファーの書斎には月明かりが入ってこず、ただ燭台のロウソクだけが、魔界の両巨頭の姿を照らしていた。
互いを見つめるその顔は、さすがに双子というだけあってウリふたつだった。ルシファーのほうはいま、漆黒のローブのフードで隠しているが、その下にはサタンと同じ、エメラルド色の長髪と端正な顔がある。ふたりが大きく異なる点は、サタンには魔界の貴族を象徴する二本の立派なツノがあるが、ルシファーにはないこと。そして、おのおの持つ、人柄ともいえる雰囲気だった。
一方のサタンの声質、雰囲気は、カミソリのように鋭い氷の刃を連想させる。それに対してルシファーのほうは、大地に豊穣を約束する太陽の光のようだった。
そのようなふたりゆえ、兄弟仲はお世辞にもいいとはいえない。それは、単に性格的な波長があわないからではない。いま、このルシファーの屋敷の二階でなにも知らずに眠っている、アルル・ナジャが原因だった。
アルルは、一流の魔導師となることを夢見てけなげな努力を続けている、ゲンキ者の少女である。紆余曲折……というか、さまざまな大騒ぎ、大冒険をへて魔導学校も無事卒業し、現在はルシファーに師事してさらなる修業を重ねている。そのためアルルとルシファーは寝食をともにしているワケだが、このアルルを妃にともくろんでいるサタンにとっては、まったく面白



くない。それだけなら事態は軽いが、ルシファーのほうとて、アルルにことのほか思い入れがあるからこそ、そばに置いているのである。この状況が、ふたりの仲をさらにやっかいなものにしていた。

といっても、このふたりのミゾは、アルルやほかの知人の前で見せることはない。だがふたりきりになると、特にサタンのほうがどうしても、兄弟への嫌悪感をムキだしにしてしまうのだった。

『で？』

不機嫌もあらわに、サタンがいう。もちろん、眼などあわさない。

『こんな夜中にオレを呼び出したのは、それだけか？』

『基本的には、この事態がお前のしわざではないことを確認したかっただけだ。だがそれと同時に、お前の知恵を借りようと思ってな』

『知恵なんか、貴様のほうがあふれるほど持っているだろうが』

『量で決まるのは知識のほうだ。知恵は知識量にも関連するが、個人によって異なるもの。だから知恵はたくさん拝借したほうがいいのだ』

『わかったわかった』

もう腹いっぱいだというようなジェスチャーをしながら、サタンはいった。

『わかったから、とっとと本題に戻せ』

『うむ』

ルシファーはうなずいて、机の上に広げられたカードの、一枚だけ表になっているものを手に取った。

『この〝車輪の双子座〟のカードが、私たちを表したものでないとすると……』

カードの四隅に車輪、真ん中に双子座のマークが描いてある。これは、車輪をいわゆるトランプのスート、星座のマークを数字に見立てた占い用のカードであり、そしてこれが、ルシファーのいう〝この事態〟を象徴するものだった。

『お前はなにを表していると思う？』

『双子座でオレたちか……。貴様にしては安直な連想だな』

問いには答えずに、サタンは憎まれ口をたたく。

『私もそう思う』

『カードがそのまま双子を表しているとは、オレにはとうてい思えんな。能力が同じとか、性格とか、単に顔が同じとか、いろいろあるだろう』

『やはりお前もそう思うか』

『あ？　どういうコトだ？』

『双子座のカードが私たちを表しているのではないコトは、はじめから予想できていた。それに、あとでわかったコトだが、何日か前ににわかに現れた彗星(すいせい)が、同じ色の光を放つ星に近づ

きつつある。カードと星の動きは、おそらく同じものを表しているのではないかな?』

『キサマ!!』

がたん!

とイスを鳴らして、サタンは立ち上がった。

『最初っからオレではないと知っていて、このオレを呼び出したのか!? バカにするのもいいかげんにしろ! オレは帰るぞ!!』

『だから、念のための確認と、お前の知恵を借りたかったといってるじゃないか。……まあ座れ。ハナシはまだ終わっちゃいない』

『…………』

『それに、お前には疑われるだけの充分な理由がある。なにしろお前には前科があるからな』

その昔——といっても十年や二十年ではなく、何百年も前のハナシ、サタンは、東の果てにある〝日出る国(ひいずるくに)〟を支配しようとしたことがあった。しかし、あろうことか途中で飽きてしまい、いつかまた支配する気になったときのために、魔力の一部を自分の〝影〟として、日出る国に封印しておいた。

その〝影〟が、ついこのあいだ——といっても何ヶ月も前のハナシ——あるキッカケをへて、なんと大暴走。サタンやルシファーどころか、アルル、ルルー、シェゾまでをも巻きこむ大騒

動となったのである。

ルシファーのいう前科とは、このコトだった。

『しかしあれは、貴様にも責任があるぞ！』

少々いいワケじみた口調で、サタンがいう。

『もちろん、私も騒動の原因となっていることに対して、否定はしない』

サタンの〝影〟が暴走したキッカケとは、ルシファーがサタンの魔力を封印してしまったからだった。行き場を失ったエネルギーが、もとは本体の一部であった〝影〟にイッキに流れこんだのである。もちろんいまは、サタンの〝影〟は完全に消滅し、封印された魔力ももとに戻っている。

『だが……』

ルシファーは続けた。

『私はそんなところに〝影〟があることなど、知りもしなかった。ところかまわず〝影〟を作り、あまつさえそれをすっかり忘れていることこそに、重大な責があると思わんか？』

『う……』

『それに、今回感じた魔導力のひずみは、あのとき感じたものによく似ていた。となると、いきなりお前が疑われたとしても、それは当然のことだろう？』

『わかったわかった。オレが悪いのは、じゅーぶんにわかった』

タメ息まじりにサタンはいう。
『そんなに気になるんなら、アルルにでも調べさせりゃいいじゃないか。いつも修業だとかいって、そういうコトをやらせてるんだろ？』
『ダメだ。危険度が判明しないうちに、アルルくんを動かすわけにはいかない』
『大丈夫だって。いつものように潜在能力をどかーんとバクハツさせて、解決しちまうって』
『そうかもしれんが、それをアテにしていたら大変なことになる。もし、お前の意にしたがってアルルくんを調査に向かわせ、そこでアルルくんの身になにかが起こったら、お前の責任になるのだぞ？』
これまで温和だったルシファーの声に、ほんの少し怒りの色が混じった。
『…………』
えもいわれぬ迫力に押されて、サタンは思わず息をのむ。
『まあいい……。いちおう確認しておくが、今回、魔導力のひずみは廃都ラーナの遺跡で感じた。過去に、お前はそこに訪れたことがあるか？』
また、学校の先生のような温和な声に戻って、ルシファーはいった。
ルシファーはよく、〝千里眼の水晶球〟で魔導力のひずんだところはないか、各地をチェックしている。魔導力のひずみが大きくなると、やがて、人の住むこの世界と魔界との空間をひずませることになり、最悪の場合、ルシファーやサタンが魔界に帰れなくなったり、この世界

での肉体を維持できなくなってしまうのだ。
とはいっても、それほど深刻になるほどのコトではない。では、なんのためにチェックをしているのかというと、弟子の修業も兼ねているからだった。
魔導力のひずみを発見したら、ルシファーはまず、その原因を調査する。そして、その原因の危険度がそれほど高くないコトがわかれば、弟子であるアルルを解決に向かわせるのだった。
『廃都ラーナの遺跡っつーと……』
なにかを思い出すようなポーズで、サタンはいう。
『あのルーンロードがいたところだよな？』
『そうだ』
ルーンロードは、しょせんは寿命の短い——サタンやルシファーにくらべてだが——人間とはいえ、全盛期はふたりに匹敵するほどの実力を持っていた。それほどの者を、魔界の最高実力者といえるこの双子が知らないはずがない。
『あそこに行った記憶は、オレにはないいな』
『そうか……。非常に残念だ』
『どういうコトだ？』
『いやまぁ、この件が本当にお前のしわざだったら、さぞかし面白いコトになっていただろうと思ってな』

『ふざけんな！』
『冗談だ』
というワリにはキマジメな顔をして、ルシファーはカードをそろえ、その山のイチバン上に〝車輪の双子座〟を表にして乗せた。
ルシファーはいつも、魔導力のひずみをキャッチすると、その原因を探るためにまず占いをする。そのカード占いの結果が、この〝車輪の双子座〟というワケだった。
『さて……。廃都ラーナの遺跡における魔導力のひずみについて占ったところ、このカードが出たワケだが……』
『そういえば、何年か前にルーンロードは消滅したって聞いたぜ』
『私もそう聞いている。その話を聞いたときに、千里眼の水晶をのぞいてみた。やはりルーンロードの魔導力は、その痕跡しかなかった』
『だったらなんで、今ごろになって魔導力がひずんだりするんだ？』
『それがわからないから、苦労をしている。……まあ、星占いの結果、天空ににわかに現れた彗星が、魔導力のひずみと関連しているのだろう』
『それが、双子の片方ってコトか？』
『かもしれん。そして、車輪のスートが表しているのは〝運命〟だ。彗星は、なにか——双子のもう一方と、運命的な力で結ばれていると考えられる』

『さっき、彗星が星に近づいてるといったよな？』
『うむ』
『その星とやらが双子の残り一方なんじゃないのか？』
『そこまでは、おおよその推測がついている。問題は、その星が、誰、もしくは何を表しているか、だ』
『その星には、なんか意味がついてないのか？』
『占星術的には、その星は〝悪の華〟と呼ばれている。もしそれが誰かを表しているのだとすれば、私たちの知る人物の中で該当するのはひとりしかいない』
『誰だ？　そいつは？　まさか、オレだなんて冗談でもいうなよ？』
『それはない』
『とにかく、そいつが犯人というワケだな？』
『そうと決まったワケではない。廃都ラーナで起きた魔導力のひずみに関して、深いかかわりを持っている可能性があるというだけだ。ただ……』
『ただ？』
『〝彼〟に関して、奇妙な現象が起きているのが気にかかる。そちらのほうがむしろ、双子座の暗示が表しているものなのではないかと私は思っているのだが……』
ルシファーはつぶやく。

そこへ……、

ブォォォォォォォォォォォォンッ!!

突然、机の上に真っ黒な竜巻が起こった。竜巻はすさまじく回転し、机の上のカードや書類、巻物、魔導書などを巻きこんで、そして吹き飛ばす。しかし、燭台の灯を消したりルシファーの書斎をメチャクチャにするほど激しくはない。

『な、なんだ……!?』

サタンとルシファーのふたりは、突然の出来事に驚き、ただ呆然と竜巻を見つめるのみ。

ヒュウウウウウウウウウン……!

竜巻はやがて、出てきたときとおなじように突然に、消えはじめた。そして、竜巻と入れ替わるように机の上に現れた、ふたつの人影……。

「久しぶりだな」

「さ、サタン様ぁ……!」

シェゾとルルーだった。

『ルルー!』

キズだらけで、ただならぬ様子のルルーに、サタンは慌てて駆け寄ろうとするが、

「サタン、動くな」

シェゾがルルーの首にかけた右腕をぐいと引き寄せるのを見て、思わず硬直した。ルルーの首にぐるりとかけた右手には、ギラリと光るナイフが握られ、その白刃がルルーの首筋にぴったりと接しているのだ。シェゾが望めば、すぐにでもナイフを横にずらし、ルルーの首に真っ赤な鮮血の華を咲かせることができるだろう。

「さ、サタン様ぁ……」

『くっ……！』

ルルーが悲痛な声をあげるが、こうなってはさすがのサタンも手出しできない。

『シェゾくん、私なら動いてかまわんのかね？』

こんな状況でも、ひどく落ち着いた様子でルシファーがいう。

「もちろん、あんたもだ。少しでも妙な動きをすれば、この娘の命はないと思え」

『そのナイフに塗られているのは、毒だな？』

刀身がなんらかの液体でギラついているのを、ルシファーは見逃さなかった。

「さすがだな。この毒はオレが作ったもので、キズ口から入った瞬間に死にいたる。解毒剤などないぞ。あんたなら、毒の成分がわかれば解毒剤を造れるかもしれんが、さすがのあんたでも一瞬にしてそれをやるのはムリだろう」

『そうだな。……これは困ったことになった。なんとかしてルルーくんを放してもらうワケにはいかんかね？』

「断る」

シェゾの顔は、ルルーと出会ったときよりもさらに邪悪さを増した笑みを浮かべていた。人質を取り、魔界の両巨頭のいるこの空間の支配者でいることが楽しくてタマラナイといった様子だ。

しかし表情に反して、シェゾの心の中は複雑だった。心の奥底、というよりまったく別の部分では、この状況下に対してえもいわれぬ快感を覚えている。だが、本当の心ともいえる部分では、シェゾはひたすら「違う！」と叫び続けていた。違う！　オレがやりたいのはこんなコトじゃない！　違う！　オレはこんな人質の扱いかたをしない！　違う！　オレが望む〝悪〟はこんなのじゃない！

どんなに叫んでみても、シェゾの身体を実際に動かすのは、突然に湧き起こった邪悪な力の奔流だった。

『ルルーを放せ！　さもないとキサマを吹き飛ばすぞ！』

シェゾの心の事情などつゆ知らず、サタンが吠える。

「やれるもんならやってみろ。いまのオレは心身ともに充実しきっている。中途ハンパなやり方ではオレに勝てんし、全力を出せば否が応でもルルーを巻きこむことになるぞ」

心身ともに充実しきっているというのは、正確には間違いだった。魔導エネルギーが充実しているのは事実だが、しかしそれは、シェゾが望んで手に入れたものではない。それがたまら

なく気に入らないうえ、この悪のエネルギーがだんだん制御不能になりはじめているのだった。
「サタン様！　あたくしにかまわないで！　はやくこんなヤツやっつけて！」
「うるさいっ！」
ぐいっ！
ルルーの首にかけた右腕を、シェゾは締め上げた。とたんにルルーの顔が苦痛にゆがむ。
「お前に発言を許した覚えはない！　妙なコトをしゃべれば、即座に殺す！」
『落ち着きたまえ、シェゾくん』
それとは気づかないほどかすかに怒気をはらんだ口調で、ルシファーはいった。
『どうすれば、ルルーくんを解放してくれるのかね？　単に、彼女の哀(あわ)れな姿を見せつけに来たワケではあるまい』
「あんたの占いはよく当たるらしいな」
ルシファーとサタンを交互に見ながら、シェゾはいう。サタンが妙な行動をせぬよう、眼で牽制(けんせい)しているのだ。
『しょせんは結果論ではあるが、よくそういわれる』
「ならばその力を、ひとつオレのために発揮してもらおう」
『それはかまわんが、ひとつ質問していいかね？』
「なんだ？」

『キミは、どっちのシェゾくんだね？』
「どういうコトだ？」
『千里眼の水晶をのぞいていたら、キミの〝気〟——というか魔導力を、ふたつほどキャッチした』
「なんだと⁉」
『何者かがどちらかに化けている可能性が大きいが、魔導力だけでは見分けがつかない。だから、どちらのシェゾくんか？　とたずねたのだ。ホンモノか？　ニセモノか？』
「そんなの知るか！　オレはオレだ！」
といいつつもシェゾは心の中で、突然やってきた悪のエネルギーは、そのあたりに原因があるのかもしれないと思っていた。
『まあ、ニセモノが化けていたのだとしても、素直に白状するワケがないか』
『ちょっと待て』
とサタン。
『貴様がいっていた、あの星が表す者とは、シェゾのことだったのか⁉』
『そうだ。問題は、もうひとつのシェゾくんの気、そして魔導力のひずみがどこに位置するか。車輪の双子座のカード、悪の華に近づく彗星（すいせい）……。それらをすべてつなげるには、まだまだ情報が足りん』

「貴様ら!!」

悪の華、というコトバになにか運命的なものを感じながら、シェゾは吠えた。

「勝手にしゃべっていいとは誰もいってないぞ！　いますぐおしゃべりをやめないと、即座にこの娘を殺す！　オレには、貴様らなんかと遊んでいる時間はないんだ！」

実際にタイムリミットがあるワケではないが、シェゾはだんだん焦りをムキ出しにしつつあった。だんだん、邪悪なエネルギーに飲みこまれそうになっていく自分に対して、怒りと、恐怖を感じていたのだ。

『わかったわかった』

急(せ)くようなシェゾの態度にあきれたサタンがいう。

『お前、そんなに血の気が多かったっけ？』

「そんなコトはどうでもいい！　ルシファー！　さっさと占え！」

『占うのはかまわんが、いったいなににについて占うのだ？　それがわからなければオハナシにもならん』

とルシファー。気の弱い番犬のように吠えまくるシェゾとは対照的に、口調はあくまでも穏やかだ。

「それはいまから教えてやる！」

『あと、机からいいかげんに降りてくれんかね？　ずっとそこに立たれていては、占いどころ

の騒ぎじゃない』

8

「うるぁっ!!」
ドバァンッ!
シェゾは、木のドアを魔法で吹き飛ばした。
その向こうには、ビックリして眼を丸くしている連中の顔がある。まあ、ノックもアイサツもなしにイキナリだから、当然といえばあまりにも当然の反応だ。
小さな納屋、というよりはホッタテ小屋に、ガン首をそろえてシェゾを呆然と見つめているのは4人。コドモドラゴン、スケルトンT、ドラコケンタウロス……。
そして手紙の差出人、すけとうだら!
「キサマが闇の剣をぉっ!」
「いよ〜ぅ、遅かったじゃないか」
怒りの形相でツカツカと歩み寄るシェゾに対して、すけとうだらはヤケに明るくいった。ドアを壊したことに怒りもしない。
「ハニービーのヤツが手紙を渡しそびれたと思って、ヒヤヒヤしていたところだ」
「うるさいっ!!」

ババンッ！

怒りのままに、シェゾは小屋の真ん中に置かれたテーブルを両手で叩いた。テーブルの上の皿に立てられたロウソクが、その勢いでゆれる。

いまや時間は、夜中から朝になろうかという頃合いである。ハニービーからの手紙を受け取ってからすぐ、シェゾはすけとうだらのアジトを探した。そして、裏通りの酒場や賭博場などにたむろするガラの悪い連中を脅しまくって、ようやく切り立ったガケの上にあるこの小屋を突き止めたのであった。

「さっさと闇の剣を返せ！」

「まあまあ、落ち着きたまえ」

すけとうだらの口調はまるで、成り上がりマフィアのボスのように尊大で、落ち着き払っている。いまにも葉巻を吸い出しそうな、たっぷりの余裕だ。

「いますぐ返さねば、この場でキサマらを吹き飛ばしてやる！」

ギュォォォォォォォォッ！

いいながらすでに、シェゾの右手には魔導力が凝縮しはじめている。

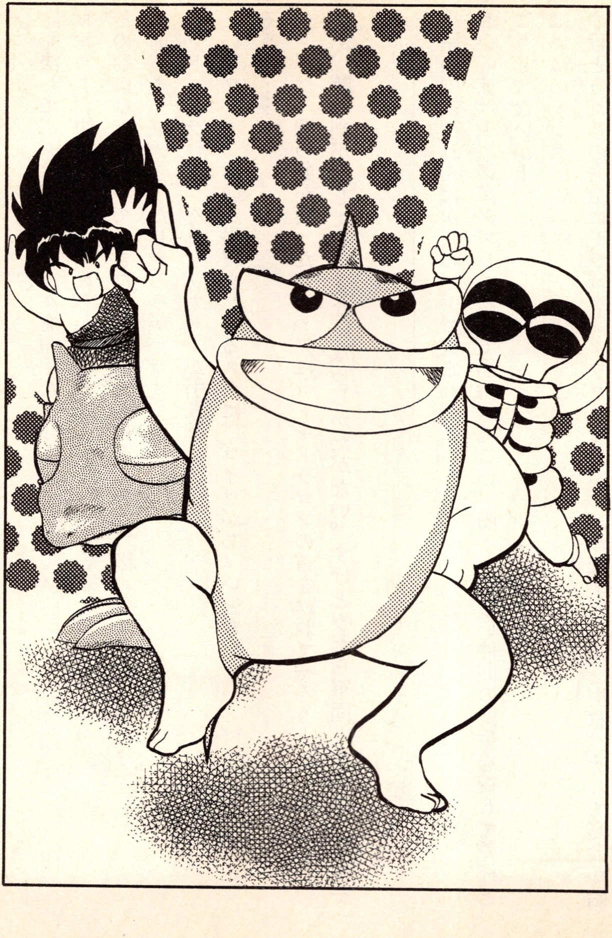
小屋の後ろにはガケがあり、深い深い谷底につながっていた。一撃で消し炭に変えることができなくても、吹き飛ばすくらいのパワーがあれば、相手を谷底に落すコトができる。その程度のパワーなら、たとえ自分中心に魔法をかけても、その爆風で自分自身がダメージを負うこ

とはない。
そして、たとえ実際に呪文を唱えなくても、この程度の脅しをかければ相手はカンタンにビビるはず。しかし……、
「かまわんよ」
あっさりと、すけとうだらはいってのけた。
「ただし、闇の剣の隠し場所はオレたちしか知らん。そのオレたちを殺せば、闇の剣は二度とその手に戻らなくなるぜ。なあ、お前たち」
「そうじゃそうじゃぁ！」
すけとうだらの呼びかけに、コドモドラゴンとスケルトンTが応じる。
「う……、ぐ……」
シェゾは絶句。
すけとうだらの余裕はそこにあった。闇の剣がシェゾにとって欠くことのできないアイテムで、それを自分たちが握っているからこそ、怒り爆発寸前のシェゾを眼の前にしてもビビらなかったのだ。
「まあ座れ、シェゾ」
まさしくマフィアのボス気取りで、すけとうだらはうながす。
「なにも、闇の剣を絶対に返さないとはこっちもいってない」

「ふん……！」
どかっ！
ひとつだけ空いていたイスに、シェゾは荒々しく腰を下ろした。
「で？　オレにどうしろというんだ？　どうすれば闇の剣を返してくれるのだ？」
「手紙を読まなかったのか？　闇の剣を返してほしかったら、オレたちの軍門に降ることだ」
「軍門？」
「ああ、オレたちは、ある秘密結社を造ったのだ」
「そういえば、チンピラがいってたな。すけとうだら軍団がどうしたとか……」
「最近、世の中が平和ボケしてきてると思わねぇか？」
「はぁ？」
突然の問いかけに、シェゾはすっとんきょうな声をあげる。
「オレたちは、そんな世の中にアキアキしてきてな……」
シェゾの応えをまたずにすけとうだらは続ける。
「いっちょ、のほほんとした世の中の連中を騒がしてやろうと結成したのよ！」
ダンッ！
イスの上に立ちあがり、すけとうだらは力をこめる。
「ゲンキ者のコドモドラゴン、中身はないが知謀のスケルトンT、紅一点のドラコケンタウロ

ス、そしてリーダーのこのオレによる、恐怖の〝すけとうだら軍団〟をっっっっ!!」
「おお――――――――っ！」
パチパチパチ……！
すっかり陶酔して、コドモドラゴンとスケルトンTは拍手喝采。しかしふと見ると、小屋のスミの壁にもたれていたドラコケンタウロスが、やれやれという顔で首を振っていた。どうやらドラコケンタウロスは、3人からは一歩引いているようだった。
「というワケでシェゾくん！」
すけとうだらは座り直し、ぐぐっと身を乗り出す。
「キミも今日からすけとうだら軍団の仲間入りだ！」
「わ――――――――っ！」
パチパチパチパチパチパチパチパチ……！
すけとうだらの宣言を合図に、拍手がさらに大きくなる。
「ちょ、ちょっと待て！　オレはそんなのに入るつもりなんてないぞ！　だいたい、お前らのお遊びにつきあってるヒマなぞない！」
「あ、そーいうコトをいうワケだ」
余裕シャクシャクのイヤミ顔で、すけとうだらはいった。
「だったら、闇の剣はゼーッタイに返さないもんね」

「ぐぐぐぐ……！」
それをいわれるとシェゾはツライ。しばらくして気を取り直し、シェゾはたずねた。
「なんでオレなんだ？　仲間にさそうんなら、もっとほかにもいるだろう!?」
「そうケンソンするな。お前は、オレがいちばんワルの素質があると見こんだ男よ」
見こまなくていいから、早く闇の剣を返してくれ……！　とシェゾは心底から思った。
「こう見えても、オレはお前さんを高く評価してるんだぜぇ。お前が入れば、オレたちの力は三倍にも四倍にもなると思ってるんだ。そうすりゃ、もっとデカイ悪事に手を出すことだってできるぜ。自警団やなんかが追いかけてきても、お前の呪文でイチコロだ。中には、悪の大魔導師シェゾの名前を聞いただけでビビるヤツもいるってぇじゃねぇか。まったく、たのもしいことだぜ……」
「………」
とりとめのないすけとうだらのハナシを聞き流しながら、シェゾは頭の中で計算をした。
コイツらをここで消しても、軍団に入らなくても闇の剣が戻ってこないとなれば、やはり入るしかない。どうやら連中は、用心棒として使うつもりらしい。ならば、戦いになったときに相手が強そうだとかなんとかいって闇の剣を出させよう。そうすればこっちのものだ。連中もまとめて消し去ってやる……！
「よしわかった！」



バン！
意を決して、シェゾはテーブルを叩いた。
「おおっ！　仲間になってくれるか！」
「その前にひとつ聞いておきたい。お前たちはどうやって闇の剣を手に入れた？」
「お前、よく眠っとったじゃろうが」
とコドモドラゴン。それをリーダーが引き継ぐ。
「というワケで、お前が昼寝をしてるスキに、コイツがちょいとな」
「そうか……」
シェゾは、闇の剣が戻ったら真っ先にコドモドラゴンの首をはねてやろうと思いつつ、
「まあ、闇の剣が返してもらえないならしかたがない。すけとうだら軍団とやらに入ってやる」
「おお――――――――――っ!!」
小屋の中は割れんばかりの拍手で包まれた。
「おいドラコ！　グズグズしてねぇで酒持ってこい、酒！　新しい仲間の誕生を祝して乾杯といこうじゃないか！」
「はいはい……」
すけとうだらの命令にドラコケンタウロスはしぶしぶうなずき、酒を用意。そして宴会が始

まった。

宴は朝まで続き、太陽がのぼりきったところでようやく解散。メンバーはひとまずそれぞれのねぐらに戻っていった。

「おい、ドラコケンタウロス」

シェゾはその途中で、ドラコケンタウロスをつかまえた。

「お前ともあろうものが、どうしてあんな連中とつきあってるんだ？　お前があいつらと同レベルだとはとうてい思えんが……」

「しょうがないじゃない！　アイツらに大事なものとられちゃったんだもの！」

「お前もそうなのか。お互いに災難にあったな……」

「はぁ～あ……」

そしてふたりは、同時にタメ息をついた……。

9

ルシファーの話を聞いて、シェゾはだいぶ落ち着きを取り戻した。さっきまでは、どんどんとふくらんでいく悪のパワーに取りこまれてしまうのではないかと恐怖し、アセればアセるほどパワーは制御不能になり、それがさらに恐怖とアセりを生むという悪循環におちいってしまっていたのだ。

だがいまはもう、恐怖もアセりもない。落ち着いていればなんのコトはなく、マグマのように沸き立つ邪悪な力も意のままに動く。この、突然に吹き出したエネルギーに対するイラだちが、シェゾから落ち着きを追いやってしまっていたようだった。

いまでは、その原因の見当がつきはじめている。廃都ラーナで発生した魔導力のひずみ。それを占った結果の、車輪の双子座のカード。そして、悪の華という星に近づく、突然現れた謎(なぞ)の彗星(すいせい)。元来が聡明なシェゾは、これだけのキーワードで事件がなにに起因しているか、おおよその見当がついたのだった。

その礼がわりに、シェゾはルシファーに数年前に起こった廃都ラーナでの事件を教えてやった。シェゾが闇(やみ)の剣の力を借りてルーンロードを倒し、〝悪〟の運命を引き継ぐことになったあの事件を。

『すると、あのときのキミの感情はどうあれ、運命は引き継がれてしまったワケだな?』

ルシファーはいった。
『ルーンロードを倒すことが、継承の儀式そのもののようだからな』
「うむ」
イスに座ったシェゾがうなずく。もう、ルルーを人質になどしていない。毒を塗ったナイフもルシファーにあずけてしまった。
「いまではオレもそう思っている」
『これで、車輪のスートの謎が解けた。原因も、おそらくは私の見たてどおりだろう』
どうやらルシファーも、シェゾと同じ結論に達したようだった。
『ってことは……』
ルルーをマントで包んでいる、サタンが口をはさむ。ルルーは疲れ果て、サタンに寄りかかっている。
『ルーンロードが犯人なのか？』
『その可能性は否定できないが、そう結論づけるにはまだ早い。疑問もまだいくつか残っているしな』
『もうひとりのシェゾとやらか』
『そう。それが、どこに位置するか？　どちらがホンモノで、どちらがニセモノなのか？　あるいは、どちらもホンモノなのかもしれないし、どちらもニセモノなのかもしれない』

「…………」

ホンモノだのニセモノだのという話は、シェゾにとって面白くないものだが、ルシファーのいうことももっともだとも思う。自分はもしかすると、ホンモノだという意識を植えつけられたニセモノかもしれないのだ。

『さて、話を本題に戻そう』

とルシファーは、シェゾのほうに顔を向けた。

『シェゾくん、私に占ってほしいコトとはなにかな？』

だいたいの見当はついているが、と思いつつ、

「闇の剣のありかだ」

シェゾは包み隠さずにいった。

『そういえば、いつもは真っ先に抜くのにと思っていたが、紛失したのか？』

「何日か前に、オレは夢を見た。闇の剣とルーンロードの会話という夢をな。その朝目覚めたときには、闇の剣はなくなっていた」

『誰かに盗まれたという可能性は？』

「それは否定できんが、剣はいつも異次元空間に隠してある。そんなところに手を出せるドロボウがいるとは思えん」

『ふむ』

『そんなの、ルーンロードのしわざなんじゃないのか？』
　とサタン。
『あるいはもうひとりのシェゾとか』
『そう結論づけるのは危険だな。もちろんその可能性もないとはいえんが、闇の剣が自らの意思で姿を消したということも考えられる』
「なんのために？」
『それを含めて、ちょっと占ってみるとしようか』
　ルシファーはヒトの頭ほどの大きさの水晶球を取り出し、机の上に置く。そして、その上に両手をかざして意識を集中しはじめた。
『これは……？』
　集中したまま、ルシファーはひとりごとのようにつぶやく。
『もうひとりのシェゾ……？　それが闇の剣を……？　いや……、そういうワケではなさそうだな……。しかし……、すごく近いぞ……』
「どこだ!?　闇の剣はどこにある!?」
『それは……』
　とルシファーが口を開いた瞬間！

ぶわぁっ!!

いきなり、水晶球から黒い光ともいうべきものが吹き出した。その黒い光はケムリのようにうねりはじめ、なにかを形作る。

肌は青白く、絹糸のように細く長い銀髪、それでいて、眼とくちびるは血のように紅(あか)い。黒い光は、そのまま朽ちかけたローブとなっていく。

ルーンロードであった。

「キサマ！　まだ生きていたのか⁉」

すかさずシェゾは身構える。が、ルーンロードはそんなコトなど眼に入っていない様子で、ときおり映像が乱れるようなゆらぎを見せながらつぶやいた。

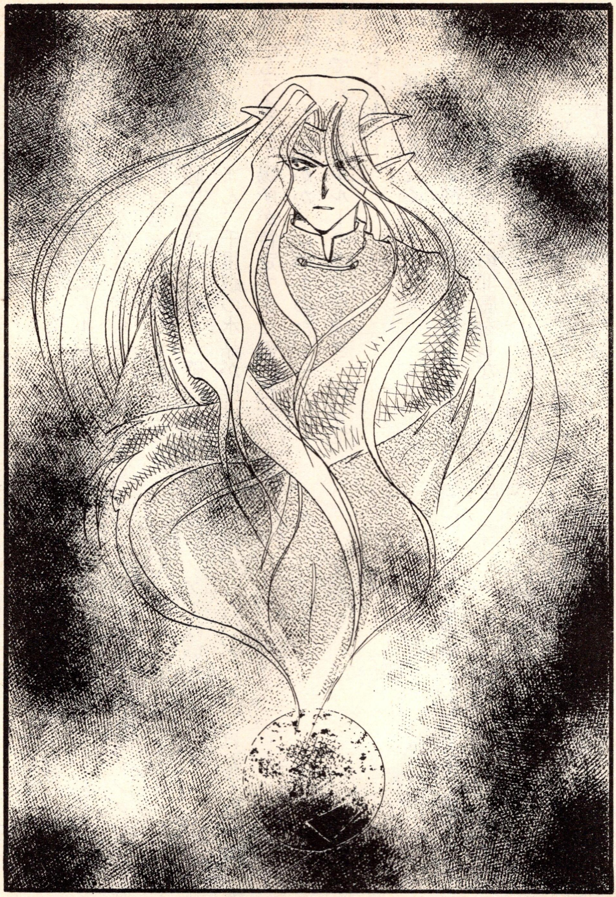
「すでに、あなたの魂には闇の種が植えられ、芽が顔を出しました……。わたしにはわかりますよ……。いずれ咲く華の色が、美しい闇であるというのが……！」

それは、ルーンロードの断末魔のセリフだった。やがて、ルーンロードの姿は再び大きくゆがみ、シェゾたちの眼をくらますほど爆発的に広がる。

そして……、

パリ――――――ンッ……！

ガラスの砕けるような音とともに、黒い光は出し抜けに消えた。机の上には、無残にもコナ



ゴナになった水晶球……。
「な、なんなの……!?」
皆の気持ちを代弁するように、ルルーがつぶやいた。
『ここにいるシェゾくんの気と、もうひとりのシェゾくんの気が水晶を通じてリンクし、それがルーンロードの残留思念と反応したか……』
砕けた水晶球の破片をひとつひとつ確認しながら、ルシファーはいう。
『シェゾくん、すまん。千里眼の水晶が砕けてしまったので、占いどころではなくなってしまった。もう少しで場所が特定できたのだが』
「いや、いい。手がかりはつかめた」
そしてシェゾはルルーのほうを向き、いった。
「行くぞ、ルルー」
「へ？　なんであたくしまで!?」
「もうしばらく、お前には人質になってもらう。ここにいるサタンやルシファー、果てはアルルまでもが出てきて、オレの邪魔をしないようにな」
『そんな必要はないぞ。私たち——少なくとも私は、キミに協力するつもりでいる』
「だったら、邪魔をしないでくれ。この事件は、いわばオレが種をまいたようなもの。ならば、このオレの手で刈り取らねばな」

『そう考えているのだったら、私は別に止めはしないが……』
「安心しろ、ルルーにさっきのようなマネはしない。一種の保険のようなものだ」
『行く前に、ひとつ質問に答えてくれないか？』
「なんだ？」
『いまのキミは、ルーンロードから引き継いだ〝運命〟を、どう考えている？』
「享受するのもやぶさかでないし、次世代に継承してもいいと考えている。ただし、すべてはオレのやりかたでな……」
セリフが終わるやいなや、シェゾはルルーの手を有無をいわせず引っつかみ、そのままワープの呪文を唱えた……。

10

翌日から、新生すけとうだら軍団は早くもフル活動を始めた。

万引き、食い逃げなどは基本で、落とし穴を掘って通行人を引っかけたり、背中に毛虫を投げ入れたりと、おおよそヒトの迷惑になりそうなコトはひととおりやった。もちろん、実行するのはすけとうだらとコドモドラゴンとスケルトンTだけで、ムリヤリつきあわされているシェゾやドラコケンタウロスはなにもしない。

果たして、すけとうだらの目論見(もくろみ)どおり、街はパニックとなった。やがて軍団は街の自警団に見つかって追いかけられたが、シェゾが——しぶしぶ——唱えた呪文(じゅもん)によって、自警団はあっというまに〝ばたんきゅ〜〟である。もちろん、さすがのシェゾも、こんなコトで相手を殺したりなんかはしない。

そして昼過ぎ。

5人はドアの壊れたアジトの前で、ひとまずの休息をとっていた。

「いや〜、アイツらの顔ったらねーぜ！」

とかいいながら、すけとうだら、コドモドラゴン、スケルトンTは今日の成果を語り合っている。ドラコケンタウロスは、完全にあきれはてて声もない。

「あのなー」

ついに耐え切れなくなったというカンジで、シェゾはいった。
「お前たちがいっていた悪事とは、この程度なのか？」
「いやいや、こんなのは序の口だぜ」
とすけとうだら。
「ここまでは昼の部。これからは夜の部が待ってるぜ！」
「ほほう。となると、夜の部はさぞかしスゴかろうな」
「おうよ！　寝静まった家の窓を石で割ったり、ドアをノックして逃げたり……」
「…………」
がっくり。
身体(からだ)から完全に力が抜け、シェゾは肩をおとした。少しでも期待したほうがバカだった……。
しょせん、小物の考える悪事などこんなものか……。
悪事というか、ただの子供のイタズラである。
「それだけじゃねぇぜ、夜中になったら賭博場(とばくじょう)でイカサマの嵐よ！」
「わかった、もういい」
「さぁ〜て……、夜の部に行く前に、もうひと働きするか！」
いいながら、すけとうだらは立ち上がる。
「野郎ども！　休憩は終わりだ！　街に降りてまたパニックにさせてやろうぜ！」

そこへ、
「そんなコトはさせないぞ！」
勇ましいセリフとともに、人影が5人の前に躍り出た。ちょこんと結んだ亜麻色の髪に、クリクリとした大きな眼、青いシャツとミニスカートの上にかぶった白のタンクトップ。
「アルル……、なぜここに？」
その少女の名を、シェゾはつぶやいた。
「なぜって、キミたちの悪事を止めるためだよ」
アルルはいう。
「街のヒトたちからルシファー先生に依頼があって、先生は忙しいから、代わりにボクが来たんだ」
ビッ！
とアルルは軍団を指差し、
「このボクが来たからには、もう好きなようにはさせないよ！」
ちょっとしたヒーロー気取りで、見得(みえ)を切る。
「シェゾもドラコも、すけとうだらたちのお遊びにいつまでもつきあってないで、さっさとおウチに帰りなさい！」
「うっさいわね！　アンタには関係ないでしょ！」

いまにも火を吹かんばかりの勢いで、ドラコケンタウロスが吠えた。
「おうおうおう！」
ずずいっ！
とすけとうだらが前に出る。
「オレ様の一大プロジェクトをお遊びとぬかすたぁ、いい度胸だ！　オレたちを止められるもんなら止めてみな！」
そしてすけとうだらはクルリと向きを変え、
「先生、出番です！」
とシェゾをうながした。
「おいおい、いつからオレは用心棒の先生になったんだ？」
「いや、別にヤってくれなくてもいーんスよ？」
闇の剣がいらなければ、というコトバが、セリフの裏に隠れている。
「わかったわかった。だったら、闇の剣を返せ」
「なんでだ？」
「アイツがタダものじゃないことは、お前も知ってるだろう？」
シェゾにとっては、チャ――ンス到来！　だった。
アルルはさすがにルシファーのもとで修業しているだけあって、実力はどんどん上がってい

る。闇の剣なしでは、負けはしないだろうが勝ち目は薄い。逆に闇の剣さえあれば、アルルとの戦いどころか、眼の前の問題をすべてイッキに片づけることができる！

「お前たちがずっと活動し続けたいなら、剣を返すことだ」

「う〜む……、しかたないな。おい！　スケルトンT！」

「へ〜いへい」

すけとうだらの命令に、スケルトンTは小屋のわきにある岩を持ち上げた。どうやら、その下に闇の剣が隠してあるらしい。

が……！

「ありぃ〜？」

スケルトンTは岩を持ち上げたままキョロキョロするばかりで、いっこうに闇の剣は出てこない。

「闇の剣がないっスよ」

「なにぃ――――――っ!!」

すけとうだらよりも先にシェゾがビックリ！

「どどどどどどどどどどどーいうコトだ!?」

「さあ……」

そこへ突然、
「ぐ――!」
黄色いナニかがぴょーんと飛び出し、岩の上で踊り出す。
「カーくん!」
とアルル。
「いままでドコに……うぃっ!?」
岩の上で踊るカーバンクルを見た瞬間、アルルは奇妙な驚きの声を上げた。なんと! カーバンクルの左の耳が、剣のようなカタチに大きくふくらんでいたのだ!
「カーくん! いったいナニ食べたの!?」
「ぐー!」
おいしかったぁ、とでもいっているように、カーバンクルは踊り続ける。
「あれは……!?」
シェゾは、あの耳のカタチに見覚えがあった。昨日からずっと探し続けていた、闇の剣にソックリだ。そのカタチとアルルのセリフから判断して、カーバンクルは闇の剣を飲みこんでしまったらしい。

「コラ――――――ッ!!」
ばぁっ!
マントをひるがえして、シェゾはカーバンクルに飛び掛かった。
「闇の剣を返せ――――っ!」
「ぐー!」
カーバンクルは、ジャンプでそれを避ける。
しかし……!
ぐらりっ。
大きさの違う耳が災いして、カーバンクルは空中でのバランスを失った。
そのまま、
ひゅううううううううううううううううううう……!
「ぐ――――――――……っ!」
深い谷底にまっさかさま!
「あ――っ! 闇の剣がぁっ!!」
キケンをかえりみず、シェゾはとっさにカーバンクルを追ってダイブした。
「カーくん! シェゾ!」

続いてアルルも思わずダイブ！

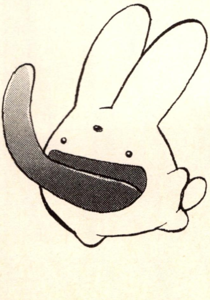
ひゅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ……！

すけとうだら軍団がボーゼンと見守る中、ふたりと一匹は、底の見えない谷底へと消えていった……。

弐 〝悪の華〟

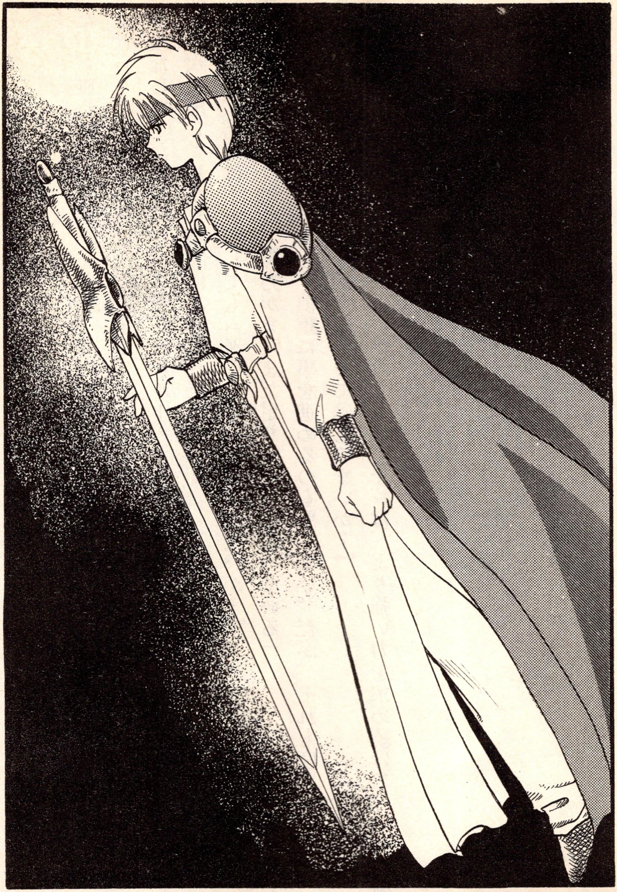
1

『主よ……シェゾ・ウィグィィ殿よ、いつまでくすぶっておるつもりだ？』
「くすぶってる？　お前の口からそんな言葉が出るとは思いもしなかったぞ、闇(やみ)の剣よ」
『無礼は許されよ。しかし……』
「わかっている。お前のいいたいコトは充分にな」
『ならば、なぜ行動を起こされぬ？』
「行動？」
『ルーンロードより運命を受け継ぎ、悪の力をもってこの世を席巻するのではないのか？』
「そのための行動なら、いつもしているではないか。いまは、まだ下準備の段階だがな」
『我とて、それくらいは理解できる。だが……』
「アルルのコトだな？」
『うむ』



「確かに、ヤツが出てくると、オレの行動はすべて失敗に終わってしまう。それがいかなる理由によるものなのか、オレにはわからん」
『コトによると、その少女は勇者の宿命を背負っているのではないのか？』
「むぅ……。それは考えたコトがなかったな」
『差し出がましいようだが、もし本当にそうならば、いつまでもその少女に執着するのは時間のムダだ』
「あの強大な潜在能力……、確かに、オレを倒すべき運命を背負っていても不思議ではない」
『ならば……』
「いや、結論を出すにはまだ早すぎる」
『すべてが水泡に帰したあとに結論を出しても、遅すぎるのだぞ』
「そうなったとしたら、しょせんはオレもその程度だというコトだ。ルーンロードのスキな言葉を借りれば、それも運命というヤツだ」
『………』
「悪いが、そのときにはまた新しい主を探してもらうことになるだろう」
『主よ……』
「お前にどう思われようと、どういわれようと、オレはアルルの魔力をあきらめないぞ。少なくとも、いましばらくはな」

『まぁ、我は主の意に従うのみだが……』
「断っておくが、オレはアルルにのみ執心しているワケではないぞ。アルルの魔導力を手に入れるコトは、ひとつのステップにすぎない。それはお前も知っていよう」
『ならば、アルルとやらが出てくると、計画がすべて無に帰すのはなぜだ？』
「それがわかれば苦労はしない。……まぁ、その事実が、オレがくすぶっているとお前に思わせてしまう原因なのかもしれんな」
『我には、主がアルルとやらに情けをかけているように見えてならぬ』
「情けだと？　なぜオレがそんなコトをする必要がある？」
『それはわからぬ。しかし我の眼には、主のブザマな敗退ぶりが、そのように映るのだ』
「…………」
『我が主よ……。そなたはルーンロードを倒し、その運命を継承した。つまりは、先任者にその素質を認められたというコトであり、さらには先任を倒すほどの実力を持っているというコトである』
「それくらい、オレにもわかっている」
『ならば、なぜ実力を発揮せぬ？　本気を出せば、アルルとやらの魔力を手に入れるコトも、世界を支配するコトもたやすいはずだ』
「そうやって己の力を過信するのは、極めて危険だ。過信は、たやすく慢心を生む」



『それは、我が力に変えることができよう。慢心は、怒りや憎しみと同じ、負の感情だからな』
「だが、慢心は即座に油断となる。この油断が、負けにつながるのだ」
『主なら、その程度の感情を制御することなど、たやすいだろう？』
「普段ならな。だがなぜか、アルルやルルーらを前にすると、普段は押さえつけている慢心や油断が吹き出してしまう傾向にあるようだ」
『それでは、結局は手を出してもムダ、というコトではないか？』
「いや……、オレは単に、実力がまだまだ足りんのだと思っている」
『精進する心は立派であるし、慎重に事を進めるのも悪くない。だが、それも度を過ぎれば、意気地なしと判断されてもしかたないのではあるまいか？』
「弱虫といわれようと、欲張りといわれようと、オレは、より強い力を求め続ける。それを邪魔するコトは、たとえお前でも許さん」
『主よ、まさかとは思うが……』
「なんだ？」
『まだ拒み続けているのか？』
「なにをだ？」
『運命を受け継ぐコトをだ』

「なぜそう思う？」
『主はあのとき、運命にしばられるなどゴメンだといった。そのときからいままでの様子を見ているると、もしかするとという思いにかられてしまったのだ』
「安心しろ。いまでは、そんなコトは考えていない。だいたい、ルーンロードを倒したコトで、運命は継承されてしまったのだろう？」
『そうだな』
「だから、運命を拒むなどというコトはしない。むしろ、その運命を立派に成就させようと考えている。せっかく悪の種が芽吹いたのだ。美しい華を咲かせてやろうじゃないか」
『ならばなぜ……』
「ただし!!」
『ただし？』
「オレのやり方でだ。誰の指図も受けん。オレのやりたい方法で、ルーンロード以上の悪の華を咲かせてやる」
『ふむ……』
「オレはあのとき、運命にしばられたくない、先のわかっている運命などつまらん、といった。だが、ものは考えようだ。形ある物は壊れ、人はいずれ死ぬ。魔法でどんなに寿命を引き伸ばそうと、やがて朽ち果てる時がやってくる。これも、先のわかっている運命と同じだとは思わ

んか？」
『……』
「だからこそ人は、生の時を精いっぱい謳歌するのだ。オレとて、それは変わらない」
『……』
「そしてオレは、〝結果〟だけでなく〝過程〟にも意義があるコトに気がついた。先に死があるのがわかりきっているのに、誰もが人生を楽しむ。それは過程において、なにが起きるかわからないからだ」
『……』
「アルルの魔力を手に入れることができるか、それとも、アルルが本当に勇者の宿命を背負っているのか……。それだけでも心が躍る。結果がどうなるのか、楽しみでしょうがない」
『……』
「もうひとつの考え方もある」
『それは？』
「世がすべて運命の輪の中にあるのなら、すべての事柄は運命によって必然的に導かれたのだ、というコトだ。オレとお前が出会ったのも、ルーンロードを倒したのも、アルルとの戦いに敗れ続けているのも、お前がオレの行動に疑念をいだくのもな」
『……』

「望みどおりに事が運ぶのも、夢がやぶれるのも、そうなるように運命づけられていたというコトだ。ならば、自分のやりたいように行動したほうがいいに決まってる」
『しかし、状況によってはやむをえずそれを曲げねばならぬコトもあろう』
「それは当然のことだが、悪いがいまのところは、お前に進言されて行動を起こす必要をまったく感じていない」
『なるほど、よくわかった』
「オレに愛想がつきたか？　それはそれでしかたないとは思うが……」
『いや、そうではない。むしろ、我のほうが主に対して疑念をいだいたコトを心から謝罪せねばならない。主がそこまで考えているとは思わなかった。許されよ』
「あやまる必要はない」
『我は、主を戒めるつもりで姿を消した。早々に戻って差し上げたいが、身動きが取れぬ』
「いまどこにいる？」
『皆目見当がつかぬ。申し訳ない』
「まあいい。お前が姿を消したのも運命というコトにしよう。それに、お前を探す過程において、オレはまた新たな物事を知るコトになろう。実は、さっき話したコトも、お前がいなくなってから考えた結果だ」
『さすがは我が主、再会できるときを楽しみにしている』

「ふっ、おだてたところで、なにも出ないぞ……」

2

廃都ラーナの遺跡——。

シェゾ・ウィグィィは、遺跡のド真ん中に立っていた。

見渡す限りの、ガレキの海原である。まだかろうじて柱らしきもの、壁らしきものが残っており、ここが遺跡であることを思い出させた。だが、柱のほとんどは横倒しになっており、壁などは虫に食われた葉っぱのようになっている。それらが完全に土に帰るのも、それほど永くはないだろう。

また、遺跡の持つ独特のわびしい雰囲気は砂漠化を促進させるようで、地面は乾燥してやせ細り、植物も花を咲かせているものも少しはあるが、大部分は生命力の強い雑草のたぐいだ。夏には早いというのに、まるで風化を加速させるかのように太陽はジリジリとして暑かった。

「ふむ……」

魔導学校をはじめとする幾多の学校が、ここを修学旅行の見学コースとして選ぶらしい。よくもまぁ、こんなヘンピなところを見学しにくるものだと思う。

それはもちろん、勇者との戦いをはじめとする、さまざまないわくがあるからだろうが……。が、勇者との戦い以外の、この遺跡に関するいわれがなんなのかは忘れてしまった。それどころか、二百年前からこんな荒れ果てた様子だったのか、それとも勇者との戦いでこうなってし

まったのかすら覚えていない。二百年前のコトなんていちいち覚えてる余裕も必要もないし、自分がそれを知っていて得になるものではない。……いや、知っていれば修学旅行のガイドで稼ぐコトぐらいはできるかも。

まぁとにかく、ひとつだけハッキリしているのは、この脚の下に、迷宮がまだしっかりと残っているというコトだ。

「さて……」

シェゾは、足元にちらりと眼をやった。亜麻色の髪の少女と黄色い謎の動物——アルル・ナジャとカーバンクルが、気を失って倒れている。

シェゾを含めたふたりと一匹は、すけとうだら軍団のアジトがあるガケの上から、底を見ることすらできない深い谷にダイブした。シェゾは闇の剣を飲みこんだカーバンクルを追って、アルルはそのふたりを追っての、とっさの行動だった。もちろん普通なら、とてつもない速度で谷底に叩きつけられ、そのまま引き続いてあの世に転落、という状況である。

しかしシェゾたちは、ケガひとつすることなく、あのガケからはるかに離れた廃都ラーナの遺跡にいる。

それは、シェゾの機転によるものだった。とはいうものの、死のダイブから、なんとか生を得ようとしたものではない。闇の剣を取り戻し、さらに計画を次のステップに進ませるために働いた計算だった。

闇の剣を飲みこんだカーバンクルが谷底に落ちた瞬間に、そのアイデアはひらめいた。カーバンクルを追ってアルルより先にダイブしたのは、お人好しのアルルのこと、自分が飛びこめばアルルも思わずそれを追うだろうと考えてのコトである。すでにカーバンクルが落ちていたのだから、遅かれ早かれアルルも飛びこむことはわかっていたが、念には念をという意味と、ダイブしても絶対に無事で脱出できるという自信があった。

そしてシェゾは、空中でアルルとカーバンクルを引っつかみ、この遺跡に向けてワープの呪(じゅ)文(もん)を唱えたのだった。その時点ですでに、アルルとカーバンクルは自分たちの状況にようやく気がつき、眼を回してしまっていた。

とにかくそういったワケで、アルルとカーバンクル、そしてシェゾは廃都ラーナの遺跡にいる。ようやく、すけとうだらの魔の手から逃れることができた。もし、ヤツらがこの位置を知ったとしても、ワープの呪文か転送の魔法陣を使わない限り、あそこからここまでは何日も旅することになるだろう。その頃にはすでに、自分の用事は終わっている。

あとは、その用事を首尾よく済ませるだけだ。カーバンクルの体内から闇の剣を取りだし、そして、アルルの魔導力を吸収する。

そうすれば……！

「…………」

ちらり。

まだ気を失っている。
これから先の展開に胸を躍らせながら、シェゾはアルルたちをまた見やった。ふたりとも、
「ふむ……」
別に、このままコトを実行してもいいのだが、それでは面白くない。やはり悪の大魔導師たるもの、獲物に最大限の恐怖を与えなければ、その名がすたる。ここはひとつ、アルルの眼の前でカーバンクルをズタズタに切り裂き、そこから取り出した闇の剣でアルルを袈裟斬りにし、その断末魔の表情をサカナに魔力吸収とシャレこもうじゃないか。
その様子を想像して、ニヤリと笑みを浮かべたのち、
「おいアルル、起きろ」
シェゾは爪先でアルルを軽くこづいた。
「う〜ん……」
しばらく反応がなかったので、はじめは本当に死んでしまったのかと思ったが、どうやら違った。アルルは、気だるそうに身体をもぞもぞさせる。しかし、眼を覚ます気配はない。
「起きろ！　寝てる場合じゃないぞ！」
「うぅ〜ん……」
ツンツン、とまたこづくが、アルルはうっとうしそうに身体を動かすだけ。
「あと5分〜……」

「あと5分ではない！　さっさと起きんか！」
ツンツン。
「う〜ん……」
「まったく……！」
どうやらアルルは、自分の家で寝ているものと思っているらしい。このまま思い切り蹴飛(けと)ばしてやろうかという思いにかられつつ、そこでシェゾは一計を案じた。
「アルル、早く起きないと朝メシがカーバンクルに食われるぞ」
「ええっ!?　それはヤダぁ！」
がばっ！
シェゾの決めゼリフで、アルルはようやく飛び起きた。
「ようやく起きたか」
「あれ？　シェゾじゃない。朝ゴハンは？」
「いつまでも寝ボケてるんじゃない！　まわりをよく見ろ！　これが朝メシを悠長に食っていられる状況か!?」
オマケに、いまは昼をとっくにまわっている。ブレックファストにも、ランチにも少々遅すぎる時間だ。

「え〜〜〜……？」

まだ寝ボケまなこで、アルルはまわりを見渡した。

「ここドコ？」

「廃都ラーナの遺跡だ」

やっぱり、この場で引導を渡してやろうかと思いながら、シェゾはぶっきらぼうにいう。

「お前も魔導学校にいたなら、修学旅行で来たコトがあるだろう」

「え〜っとぉ……」

エンジンのかかりきっていない頭を必死で回転させながら、アルルは考える。そして、

「あ〜、そーいえば。うんうん、来たコトあるよ」

と、どことなく気のない応えを返した。「なんとなく思い出した」が半分、「よくわかんないケド話を合わせとこう」が半分というカンジだ。

「で、ボクたちはなんでココにいるの？」

「それくらい、自分で考えろ」

「え〜っ、教えてくれてもいいじゃない。シェゾのケチンボ」

などと不満をもらしつつ、アルルは再びブツブツと考えこみはじめる。見てて飽きのこないヤツだ、とシェゾは思った。

「そうだ、ボクはルシファー先生にいわれて、すけとうだら軍団をやっつけようとしてたんだ。

でもそしたら、カーくんがヘンなものを飲んじゃってて谷底に落ちちゃって……、シェゾもそれを追っかけて飛んだから、ボクも慌てて追いかけて……」
「………」
だんだん思い出してきたらしい。
「谷がメチャクチャ深いのに気がついて……、もうダメだ！　死ぬ！　って思った瞬間に眼の前が真っ暗になって……」
「………」
その後、シェゾがワープの呪文を使ったコトは、アルルには知るよしもない。
「そしていま、ボクたちはココにいる。ってコトは……」
アルルは、地べたにぺたんと座りこんだ格好のまま、シェゾを見上げた。
「ってコトは、ボクたち助かったの!?」
「少なくとも、死んでないのは事実だな」
「よかったぁ……」
ホッ、とアルルは胸をなでおろすが、すぐにまたハッ！とした顔になる。
「そうだ！　カーくんは!?　カーくんはドコ!?」
「カーバンクルも無事だ。安心しろ」
いいながらシェゾは、足元のカーバンクルをひょいと持ち上げる。カーバンクルはまだ眼を

覚ましておらず、左の耳も剣のカタチにゆがんだまま。
「よかったぁ、カーくんも無事だったんだね」
とアルルはカーバンクルを抱きかかえようとするが、
「おっと」
シェゾは闘牛士のように、カーバンクルを高くかかげてアルルをかわした。
「コイツが飲みこんだのは闇(やみ)の剣だ。それがオレの手に戻ってくるまで、カーバンクルはあずからせてもらう」
「闇の剣って……、シェゾがいつも持ってるアレ？」
「そうだ」
「まーったく……、カーくんたら、キョーミがあったらナンでも飲みこんじゃうんだから」
「お前もコイツの飼い主なら、ウロチョロしないように見張っておけ。わた……オレの大事な剣は食い物ではないんだぞ」
「だったらシェゾも、そんなに大事なモノだったらちゃんと持ってなさいよ」
「確かにこっちの不注意もあるが、悪いのはあのすけとうだらたちだ」
「なんで？」
「オレを軍団に入れるため、闇の剣を人質に取ったのだ」
「そうなの？」

「カーバンクルは偶然に隠し場所を見つけて、飲みこんでしまったのだろう」
「どーりで……。シェゾみたいな一匹オオカミが、すけとうだらといっしょに悪さをしてるなんてオカシイと思ってたんだ」
「ちなみに、ドラコケンタウロスもなにか大事なものを人質に取られてるらしいぞ」
「じゃあじゃあ、サッソクすけとうだらたちをこらしめに行こうよ。ドラコも仲間にしてさ」
「それは、闇の剣をコイツから取り出してからだ」
「どうやって取り出すの？」
「なに、カンタンだ……」
ぐぐっ。
シェゾはカーバンクルを握る右手に力をこめた。
「ぐぅ～……」
途端に、気を失ったままのカーバンクルが苦しそうなうめき声をあげる。
「こうやって握りツブして、果物の種を取り出すようにすればいい。もしくは、なますに切り刻むか……」
「ええっ!?」
アルルの顔が、真っ青な恐怖の色に染まった。シェゾの目論見（もくろみ）どおりである。
「そんなコトをしたら、カーくんが死んじゃう……！」

「……冗談だ」
いいながらも、シェゾは心の中でほくそえんでいた。この顔が、あとでもっと深い悲しみと驚きと恐怖に変わる……！　それを想像しただけでゾクゾクする。
「実のところ、あながち冗談でもないんだがな……」
「ど、どーいうコト!?」
「カーバンクルを殺すのは、最後の手段に取っておくというコトだ。剣を取り出す有効な手段がどうしても見つからなかったら、オレはヤるからな」
「そ、そんなぁ……」
「安心しろ。少なくともお前の見ているところで、そんなコトはせん」
バサァッ！
思いきりのウソをつきながら、シェゾはマントをひるがえしてアルルに背を向ける。
「行くぞ」
「行くぞって……、ドコへ？」
「闇の剣を取り出す方法を探しにだ」
「だったら、ルシファー先生のところに行こうよ」
「ルシファー？」
「うん。先生だったら、なんとかできると思うよ」

「お前はルシファーを知っているのか？」
「……って、シェゾだって知ってるじゃない」
「ずいぶんと懐かしい名前だな」
「懐かしいって……、そう何年も会ってないワケじゃないじゃん」
「まぁ、そんなコトはどうでもいい」
アルルに背を向けたまま、シェゾは首を振った。
「あんなヤツの力を借りる必要はない。こっちにも心当たりがある」
「でも……」
「うるさいっ!!」
びくぅっ！
背を向けたままのシェゾの一喝に、アルルは雷に打たれたように身を震わせた。
「キサマに意見を求めた覚えはない！　黙ってついてくる気がないのなら、この場でカーバンクルを殺すぞ！」
「シェゾ……」
アルルはようやく、シェゾの様子がおかしいコトに気がついた。すけとうだら軍団のアジトにいたとき、昨日——アルルは知らないが、草原で闇の剣を探していたとき——に会ったときとは雰囲気がゼンゼン違う。

シェゾがふたつの顔を持っているコトは、アルルも知っている。普段は超ニヒルでカッコイイのに、ときどきだけれど、ドジでオマヌケなコトをやったりする。そーいうときに限って、本人はいたって大マジメ。それだけによけい面白い。またそれが、変態だとか、魔法のウデは一流なのにアタマは三流といわれたりするゆえんだったりする。

しかしいまのシェゾは、そんなふたつの顔とはまったく違う。いつものニヒルなシェゾかとはじめアルルは思ったが、それとも違うようだ。カーバンクルを握りツブすとか、そんな残忍な話をするシェゾは見たことがない。

まるで、邪悪な魂が乗り移ったような——というか、邪悪な大魔導師そのもののような雰囲気を、いまのシェゾは持っていた。

「行くぞ……」

シェゾはそういうと、アルルの返事を待たずに歩き出した。足元に、なんとか砂漠化をさせまいとがんばって咲いている草花があったが、気にせずに踏みツブしていく。

「あ……。ま、待ってよぉ」

アルルはあわてて、邪気をまとったその後ろ姿を追いかけた……。

3

「……ゾ！　シェゾ……！」
「………」
「シェゾってば！」
「……!!」
ルルーの声で、シェゾはハッ！と我にかえった。
「ああ……、ルルーか」
「ルルーか、じゃないわよ。どうしちゃったのよ、ぼーっと突っ立っちゃって」
「なんでもない。……ところで」
いいながら、シェゾはまわりを見渡す。
「ここはどこだ？」
しかしすぐに、自分の現在位置を把握した。ゼッタイに忘れるコトのない光景が広がっていたからだ。
朽ち果て、もうすぐ土に帰ろうとしている人の営為の跡。最近では見ない造りの壁や柱の破片がそこらじゅうに散らばっている。以前に——やむをえず——おとずれたときよりも、いちだんと風化が進んでいるようだ。

廃都ラーナの遺跡――。
シェゾがいま立っているのは、ちょうど遺跡の入り口あたりだった。
この地下には、勇者に封印されたルーンロードの迷宮がある。しかしその主は、数年前にその運命を次代に託し、完全に消滅しているはずだが……。
「…………」
さらに視線をめぐらすと、自分の前で女性が仁王立ちになっているのがわかった。陽光を浴びてキラキラと光る、ウェーブのかかった水晶色のロングヘア。プロポーションを見事に強調している、露出度の高い水色のドレス。もちろん顔は、誰もがハッ！　とするほどに美しい。どこから見ても、良家のワガママなお嬢サマというカンジである。しかしそんな外見には似合わず、格闘家としての腕前は超がつくほどの一流だ。細い鉄腕から繰り出される技の強さは、シェゾと同格か――シェゾ個人の判断としては――やや劣る程度。
「あなたねぇ……！」
その美女、ルルーの顔が、みるみるうちに怒りにゆがんでいった。
「自分で連れ出しといて、ここはどこだ？　はないでしょ!?　それともあなた、ルシファー先生のところに脳ミソを忘れてきちゃったワケ!?」
「そう、ぎゃいぎゃい騒ぐな。少しばかり混乱しただけだ」
「まったくもう……！」

「ところでルルー」
「なによ」
「オレはどれくらい気を失っていた？」
「だいたい半日くらいよ」
ルルーは天を指差す。
「ここに着いたのは朝だったのに……、見なさい！　もうお昼をとっくにまわってるわ」
「………」
空をあおぐと、確かに、傾きかけた太陽がそこにあった。
「なぜ起こさなかった？」
「起こしたわよ！　でもあなた、叩いても蹴ってもビクともしなかったじゃない！　ロウ人形みたいにうつろな眼で突っ立っちゃってさ……、もう、死んじゃったかと思ったわよ！」
「そうか……」
「サタン様やルシファー先生に助けてもらおうとしても、ここがどこだかわかんないし……」
「わからないはずがないだろう。お前も魔導学校にいたなら、ここに来たことがあるはずだ」
「へ？　そうだったかしら……？」
と、ルルーは考えこむ。やがて、ポンと手を打ち、いった。
「思い出したわ。確か、修学旅行で来たわね。〝掃いて捨てる〟遺跡だっけ？」

「廃都ラーナの遺跡だ」
「あー、そうそう！　そんなような名前だったわ」
「まぁ、そんなコトはどうでもいい」
シェゾはルルーの脇(わき)を通り、遺跡の奥へと歩きはじめた。
「行くぞ」
「ちょ、ちょっと待ってよ」
あわてて、ルルーが追いすがる。
「ねぇシェゾ、あなた熱かなにかあるんじゃない？　昨日からずっとヘンよ」
「お前には関係ない」
「はいはい、わかったわよ。人質なら人質らしく、おとなしくしてろっていうんでしょ？」
「…………」
ルルーがさらになにかブツクサいっているが、すでにシェゾの耳はなにも聞いていなかった。頭の中は、闇(やみ)の剣と交わした会話でいっぱいである。
シェゾは何日か前に闇の剣を失い、以来ずっとそれを探していた。そしてルシファーの占いの結果——正確には占いの結果ではなく、ちょっとしたハプニングによるものだったが、この事件にはルーンロードと関わりがあるコトが判明。ならば、この廃都ラーナの遺跡に来ればさらなる手がかりがつかめると思い、やってきたのだった。

それが起きたのは、遺跡を目標にワープの呪文(じゅもん)を唱えた瞬間であった。
普通はワープを唱えると、一瞬だけ思い切り放り投げられるような感覚に襲われ、気がついたときにはすでに目的地に到着している。移動に要する時間は、多少の誤差はあるものの、だいたい一瞬である。ルシファーの書斎は地下にあったので正確な時間はわからないが、出発したのは多分朝方だろう。しかしルルーの話によると、到着したのは陽の昇りきった朝だという。明らかに移動時間がかかりすぎだ。これだけでも、今回がいつものワープと違うコトがわかる。
ルシファーの書斎でワープの呪文を唱えた瞬間、シェゾは、いつもの放り出されるような感覚ではなく、奈落の闇の中に落ちこむような感覚に襲われた。肉体もなにもなく、ただ魂だけが深海のような闇にただよっているというカンジだ。
そして気がつくと、シェゾは闇の剣と会話していた。肉体の感覚もなにもない闇の中にもかかわらず、まるで旧来の親友が眼の前にいるような話しぶりだった。その会話が、現実世界では目的地に到着し、さらに昼をまわるまで続いていたのだろう。
「…………」
なぜ突然に、そのようなコトが起きたのか？　シェゾは考えた。
シェゾと闇の剣は、異次元空間をとおして精神的にリンクしている。数年前に初めて会ったときにくらべて、そのつながりはさらに密なものになっていた。さすがに距離があると話しもできないが。

そして、ワープや転送の魔法陣といったものは、異次元空間を経由して瞬間移動を行うものである。となると闇の剣は、シェゾが異次元空間に入ったところをつかまえたのか……？　確かに、異次元空間の中であれば、物理的な距離など関係ない。

それはいったいなんのために……？

もちろん、〝何か〟を伝えるためだ。

あの会話が真実なのだとすれば、少なくとも闇の剣は何者かに盗まれたのではなく、自分の意志で姿を消したコトになる。だが、闇の剣が伝えたかった〝何か〟とは、それだけか……？

闇の剣が姿を消したのは、ルーンロードから運命を引き継いだ者としての行動を起こさないシェゾに疑念を抱いたからだという。シェゾが闇の剣を手にしてから何年もたつが、闇の剣がそんな疑念を抱いたのは一度もない。その疑念とやらは、突発的に闇の剣の意識の中に芽生えたものなのか？　いや、そうではあるまい。なにがしかのキッカケがあったはずだ。

そして、そのキッカケと深い関わりを持っていると思われるのが、やはりルーンロード……。

「ちっ……」

シェゾは心の中で舌打ちした。

初めてルーンロードに会ったときから、シェゾは彼のコトが気に入らなかった。常に腹黒いところを持っているような、奸物（かんぶつ）に思えてしょうがないのだ。自分は引退するといっておきながら、結局は裏で次代をあやつり、事を自分の思い通りに進ませようとする輩（やから）だ。

シェゾはあやつられるコトが大キライだが、影でヒトをあやつるような輩はもっとキライだった。シェゾの心情として、それは美しくない方法だからだ。たとえ誰かを使って行動を起こすにしても、必ず互いの利益になるように取り計らう。それでなしえる悪こそ美しい、とシェゾは考えていた。

とにもかくにも、消滅したはずのルーンロードが再び現れ、この件の黒幕となっているコトは間違いない。あのときに運命を引き継いでから、なんらかのカタチでアクセスがあるだろうとは予測していたが……。

まったく、男らしく引き下がるというコトを知らないヤツだ。いったい、何を企(たく)んでやがるんだ……？

シェゾは、だんだんムカッ腹が立ってきた。しかしそれは、数日前から続いていた、意味のない悪のエネルギーの膨張に対するイライラとは違う。いまにして思えば、それすらもルーンロードが引き金になっているのだろう。それを考えると、ますますムカムカくる。

邪悪なパワーはまだシェゾの体内でうごめいているが、制御できずにイライラするというほどではない。いまならかなり冷静に、昨日ルルーと戦ったときのような力を容易にコントロールすることができるだろう。

「…………」

それにつけてもルーンロードのヤツ……！

シェゾは心の中で歯噛(はが)みした。いま一度ルーンロードの顔をおがみ、その青白いツラにアレイアード・スペシャルのイッパツでもお見舞いしてやらない限り、このイライラは収まらないであろう。

悪としての運命を享受するのはかまわない。だがそれは、自分のやりたいようにやれればのハナシだ。他人のあやつり糸で踊らされるなんてもってのほかである。自分の意志で行動できなければ、まったく意味がない。それでは〝託した〟コトにならないだろう。

どうにもこの事件、ルーンロードがなんとかしてシェゾをコントロールしようとしているフシがある。シェゾにとってはもちろん、それがイヤでイヤでたまらない。

「……ちょっと！　人のハナシ聞いてる!?」

ルルーの言葉で、シェゾはようやく我にかえった。シェゾがずっと考えこんでいるあいだずっと、ルルーは背後で何かしゃべっていたらしい。

「ああ!?」

ルーンロードに対するイライラが収まらず、シェゾは思わず、それをルルーにぶつけるように返事をしてしまった。

「な、なによ……、そんなに怒らなくたっていいじゃない」

「別に、お前に対して怒ってるワケじゃない。いったい何の用だ」

「なにしにココに来たのかって聞いてるの。さっきからまたぼーっとしちゃって……、よくそ

れでまっすぐ歩けるもんだわね」
「お前、人質はおとなしくしてるんじゃなかったのか?」
「いいじゃない、それくらい教えてくれたって。それともなに? いつもみたいに、人にいえないようなやましいコトを考えてるワケ?」
「いつもどころか、オレはやましいコトなんて考えたこともないぞ」
ルーンロードなんかとは違う、とシェゾは思いながらいった。
「じゃあ教えてよ」
「数日前からオレにふりかかった災い、それはすべてルーンロードのしわざらしい。それを解決するために、ココに来たのだ」
「ルーンロードって……、昨日ルシファー先生のところに出たオバケのコト?」
「お前、ココに来たコトがあるなら、ルーンロードの名前ぐらい知ってるだろう」
「思い出したわ。確か、二百年前に勇者に封じられた悪の魔導師よね」
「そうだ」
「で、封印された場所が、この掃いて捨てる……」
「廃都ラーナの遺跡だ」
「あー、そうそう、そうよね。でも……」
「なんだ?」

「でもどうして、そのルーンロードがシェゾに災いになるようなコトをするワケ？」
「数年前まで……といっても、お前やアルルがまだ魔導学校にすら入っていない頃だが、そのときまでルーンロードは遺跡の地下迷宮で生きていた」
「生きてたって……、二百年も？」
「ヤッとて魔導師のはしくれ、延命の術(じゅつ)ぐらい心得ている」
「で……？　そのルーンロードが、数年前にどうしたの？」
「数年前、ルーンロードに引導を渡したヤッがいる」
「引導を渡したって……、殺しちゃったってコト？」
「そのとおり」
「それってまさか……!?」
「お前の考えているとおりだ。ヤッをこの世から消したのは、このオレだ」
「ってコトは、シェゾのコトを恨んで化けて出たってコト？」
恨んで化けた、か……。なかなかうまいコトをいう、とシェゾは思った。
「まぁ、似たようなものだな」
人は誰でも欲望を持っている。特に悪の大魔導師と呼ばれるたぐいの連中は、欲望のカタマリといっても過言ではない。自分の中にも深い欲望が渦巻いているのは認めるところだし、ましてやルーンロードがとても禁欲的だったとはとうてい思えない。

ルーンロードも、運命を次世代に引き継ぐことなく、ずっと生き長らえていたかっただろう。そして力を貯え、再び地上を席巻したかっただろう。シェゾ自身も、いつかはそう思うようになるのかもしれない。そして、それが恨みつらみとなり、亡霊となって後継者の前に現れるようになるのかもしれない。

それはそれでいい。しかし、やり方が気に入らない。オレを恨んでいるなら、なぜ直接姿を現さない？　なぜ闇の剣をたぶらかすようなコトをする？　「将を射んと欲すれば……」とはよくいうが、まず馬を射るのではなく、馬を手なずけるようなやり方はオレは好まない。

しかし……。

ふと、新たな疑問がシェゾの心の中に生まれた。

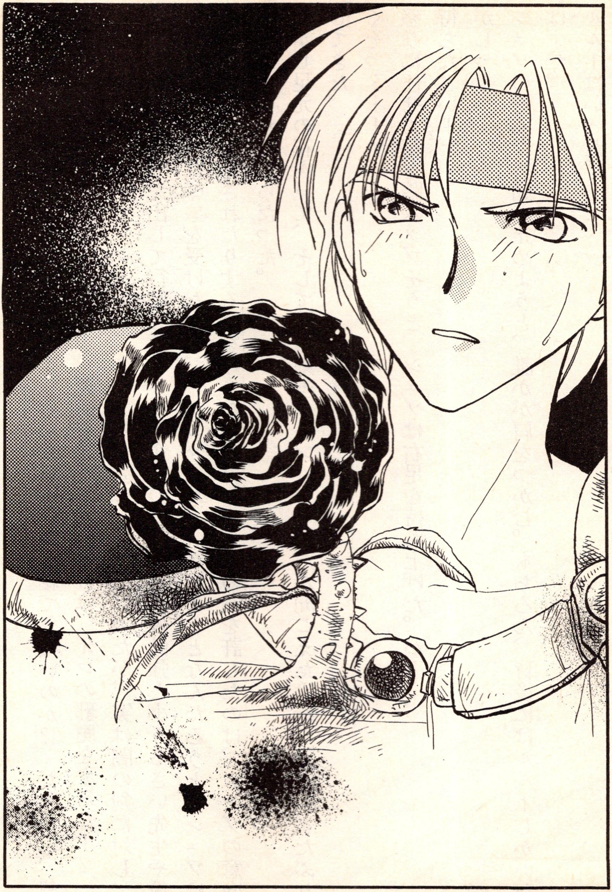
すべてが実は、裏も表もない真実だとしたらどうだ……？　ルーンロードが腹黒いというのは、オレの個人的な見解にすぎない。文献にも人となりについて書いてあるものはなかったしな……。実はもし、ルーンロードというヤツはかなり禁欲的で、悪としての運命を忠実に成就させようとしていたなら……？　闇の剣と同じ疑念をあの世で抱き、オレをうながすために復活したのだとしたら……？　もちろん、そこにはなんの計算もなく、運命の輪を崩したくない一心で……。

「……！」

シェゾはふと、足元に眼をやった。そこには一輪の花が咲いている。まわりの草花は何者か

によって踏み荒されていたが、コイツだけはその災厄から逃れられたようだ。
茎は太く、どっしりとしていて、何者をもよせつけないトゲにおおわれている。花はバラによく似ていて、色は限りなく黒に近い紺。もし、〝悪の華〟というものが本当にあるのだとしたら、こんなカンジかもしれないなとシェゾは思った。
その花は、じっとシェゾを見つめていた。何かを訴えかけるように。
『主よ、いつまでくすぶっておるつもりだ？』
突然、闇の剣のセリフがよみがえった。
『なぜ実力を発揮せぬ？　本気を出せば、アルルとやらの魔力を手に入れるコトも、世界を支配するコトもたやすいはずだ』
そのセリフが、何度も何度も頭の中でくり返される。声はやがて、ルーンロードのものに変わっていった。
『最強最大の能力を持っていなければ、悪になることはできません……。それも、勇者をはるかに凌駕するほどの……。しかし、勇者には絶対に勝てないという運命……。この〝滅びの美学〟というべきものも、とても魅力的ではありませんか……？　あなたには悪になる素質があるのです……。さあ、私の後継となって運命に殉じ、悪の華を咲かせましょう……！』

ムカッ!!



途端に、シェゾの心の中で炎が吹き出す。

どいつもこいつも、大きなお世話だ！　そんなにオレが信頼できないのか!?　だったら、望みどおりにしてやってもいいんだぞ！　運命を成就させたければ、オレの邪魔をするな！

闇の剣との会話の中で、シェゾは「あやまる必要はない」といったが、実は闇の剣に対しても怒っていた。本気を出して行動しろとうながすその口調が、勉強勉強と小うるさい先生や教育ママと同じような印象を受けたからだ。ワガママだといわれようとなんだろうと、シェゾはうながされたり急かされたりするのを好まない。それでも闇の剣を許したのは、シェゾの意向を理解してくれたからだった。

しかし足元の花を見て、そして闇の剣やルーンロードの声が聞こえた途端、怒りがまたぶり返してきた。

「くそっ……！」

怒りに任せて花を踏みツブそうと、シェゾは右足を持ち上げた。が……、

「待ちなさい！」

がしっ！

シェゾのそんな行動を止めようと、誰かが肩をつかむ。もちろん、背後にはルルーしかいないはずだ。

ルルーはいった。

「あなたは悪いヤツだけど、無意味に花を踏みツブすようなコトはしなかったはずよ。もしそれをやったら、あたくしはあなたをニセモノと見なすからね！」

「…………」

ルルーのその言葉が救いになった。怒りが、身体中からすうっと抜けていく。もう少しで、らしくない行動を起こしてしまうところだった。

「ふぅっ……」

深呼吸のようにタメ息をつきながら、シェゾはゆっくりと足を降ろす。そして、肩にかかったルルーの手をゆっくりと外した。

事件の影響からか、ここ数日、シェゾの情緒は極めて不安定だった。それもいまは、まるで憑き物が落ちたような感覚で満たされている。昨夜のルシファーによる状況説明、そして、いまのルルーのセリフがダメ押しになったようだ。少なくとも、このふたりには感謝せねばなるまい。

だが、そのまま素直に感謝してしまうのも、シェゾらしくない行動である。

「行くぞ……」

だからシェゾはそれだけいって、再び歩き出した。

「あ……、ちょ、ちょっとぉ！」

パタパタと追いかけるルルーの足音が、背後から聞こえてくる。それを耳にしながら、シェ

ゾは思った。

とにかくオレは、誰になんといわれようと、自分が最も美しいと思える方法で動くのみだ。それがうまくいくのも運命、うまくいかないのも運命だろう。ルーンロードのヤツが奸物(かんぶつ)か正直者か……、まぁどっちにころんでも運命だ。

ひとつだけいえるのは、どちらにしてもやり方がオレの気に入らないし、少なくともコトの真相をルーンロードから聞き出すまでは腹の虫が収まらんというコトだ。それ次第では、今度こそヤツをこの世から消し去ってくれる……！

それもまた、ルーンロードの好きな運命ってヤツだ……。

4

ゴォォォォォォォォォォォォ……ン。
実際にそのような効果音が聞こえてくるワケではないが、つまりは、それほどまでに迷宮内の空気は重苦しく、邪悪な雰囲気に包まれていたのだった。
シェゾとアルルのふたりは、遺跡の奥にある、姿見のように立てられた黒曜石の板をくぐって、この地下迷宮へと入りこんだ。アルルははじめ、カガミのような石の壁から入ると知ってかなり驚いたが、シェゾはそんなアルルを気にもとめずに、まるで水の壁をくぐるみたいにあっさりと中に入ってしまった。もちろん、アルルがあわててそれを追いかけたのは、もはやいうまでもない。肝心のカーバンクルはシェゾが握っているのだ。
「へぇ～……」
無言でスタスタと歩くシェゾの後ろになんとかついて行きながら、アルルはキョロキョロと迷宮内を見まわした。
「遺跡の地下にこんな迷宮があったなんて、知らなかったなぁ」
地上と違って、ここはまったく風化していない。空気も、カラカラに乾燥した地上と違って、しっとりとしていて重みがある。ちょっちルシファー先生の書斎に似てるかも、とアルルは思った。

しかしルシファーの地下室とは、広さも邪悪さも違う。ここは石造りの壁、床、天井に囲まれた通路がまさしく迷路状に広がっており、あちこちに扉がはめこまれている。そして、あたりからビンビンに感じるのは、多数のモンスターの気配。だがなぜか、そのモンスターたちが襲いかかってくる様子はまったくなかった。

「お前……」

振り向くことなく、シェゾが迷宮の空気のように重々しい口調でいった。それでいて、まるで水を得たサカナのようなイキイキとした張りがある。

「ルーンロードは知らないのか……？」

「それくらい知ってるよ。二百年前にラーナの遺跡で勇者に封印された悪い魔導師でしょ？」

「そうだ……。そのルーンロードが封印されていたのが、この地下迷宮なのだ……」

「へぇ〜、そうなんだ」

「遺跡に来たとき、ガイドか先生に教えてもらわなかったのか……？」

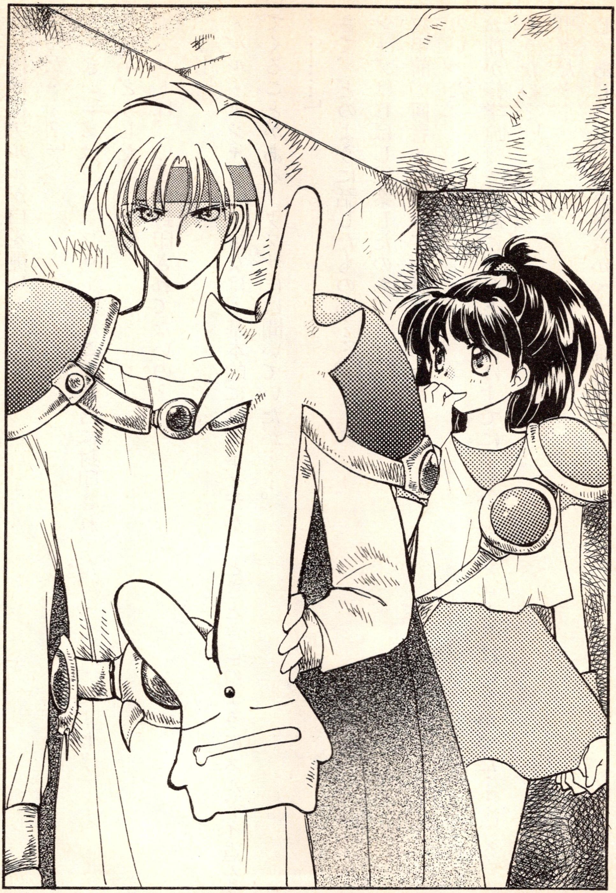
「えへへ、ちょっち忘れてたかも」

「………」

会話はそこで途切れ、ふたりはまたしばらく黙々と歩く。

やがて、

「ねぇねぇ、シェゾ」



出し抜けにアルルが口を開いた。
「なんだ……？」
「さっきシェゾは、ルーンロードがこの迷宮に封印されてた、っていったよね？」
「それがどうした……？」
「ってコトは、いまは封印されてないの？」
「……!!」
アルル・ナジャという少女は、基本的には大ボケだが、ときどきこのようにスルドイ点を突いてくることがある。ウワサには聞いていたが……。
「………」
さて、どのように話したものか……。
シェゾはしばし思案したのち、
「数年前、何者かによって消滅させられた……」
といった。
「お前が修学旅行で遺跡に来たときにはすでに……、ルーンロードはいなかった……」
「そうなの？」
「事実だ……」
「じゃあじゃあ、その何者かって、誰？」

「シェゾ・ウィグィィだ……」

「え―――っ!?」

驚くアルルの声が、あたりに乱反射して大音響となった。

「シェゾがやっつけちゃったのぉ!?」

「やっつけた、という表現は正確ではない……」

「え？　なんで？」

「お前は……」

足を止め、シェゾはクルリと振り返る。

「シェゾ・ウィグィィという名前に……、〝神を汚す華やかなる者〟という意味があるのを知っているか……？」

「ん～……。ずっと前に、シェゾから聞いたような気がする」

「名前の意味からもわかるとおり……、オレはどうやら〝悪〟としての運命を背負っているらしい……」

「へ？」

「歴史をひもとけばわかるが、この世は善と悪との戦いによって成り立っているといっても過言ではない……。人々に恐怖を与える巨悪が現れ、それを勇者とよばれる存在が打ち倒す……。

そのくり返しだ……」
「…………」
突然、ナニをいい始めるの？　というような表情で、アルルはシェゾを見ている。
「二百年前にこの遺跡で起きた戦いも、そのサイクルのひとつに過ぎない……」
「…………」
「ところで……、世界各地に英雄伝説といわれるものは多々あるが、それぞれ勇者像、魔王像が異なっている……。まぁ、多少の類似はあるがな……」
「…………」
「それは……、常に同一人物が戦っているワケではないコトを示している……。たとえば城主が代替わりするように、勇者や悪も代が替わっているのだ……」
「家族ってコト？」
「この場合、現実世界の血のつながりはまったく関係ない……。それよりももっと大きな……、いわゆる〝運命〟というべきものによって、つながっているのだ……」
「…………」
「二百年前は、ルーンロードの番だった……。そして次が……」
「シェゾの番というコトなんだね？」
「そのとおり……」

「でもさ、それとシェゾがルーンロードをやっつけたハナシと、なんの関係があるワケ？」
「数年前に修学旅行でここを訪れたとき……、迷宮の最深部でルーンロードに出会った……」
「え？　ってコトは、シェゾも魔導学校の生徒だったの？」
「そうらしいな……」
「じゃあ、センパイなんだね」
「このさい、そんなコトはどうでもいい……」
そしてシェゾはさらに続ける。
「ルーンロードから運命について聞かされたオレは、ルーンロードを倒した……。いや……、倒さなければならなかった……」
「どうして？」
「ルーンロード……、つまり先代を倒して実力を示すことが、運命を継承する重要な儀式だったからだ……」
「つまりシェゾは、そのときから悪の大魔導師になったんだね？」
「そういうコトだ……」
「じゃあさ、なんでスグに世界を支配しようとしなかったの？　ルーンロードって、それほどの力があったんでしょ？」
このセリフに気をよくしたのか、シェゾはニヤリと笑った。

「それほどのヒトを倒しちゃったんだから、シェゾはもっと強いってコトじゃない」
「あのときは14歳で、コトを起こすには少々若すぎた……」
いいながらシェゾは、誇らしげに両手——その一方には、気絶したままのカーバンクルが握られている——を広げる。
「しかしいまでは、精神的にも肉体的にも成長した……。いまでこそこんなトコロでくすぶっているが、闇（やみ）の剣を取り戻したらすぐにでも行動を起こしてやるぞ……！」
「ひとつだけいっとくケド……」
「なんだ……？」
「悪いコトをしたら、ボクが許さないからね」
「ふん……！　お前なんぞ、私の魔導力となってオシマイだ……」
「なによ、やる気!?　ボクだったらいつでも相手になるよ」
とアルルは身構えるが、シェゾのほうはいまここでコトをかまえる気はない。
「そんなのは後回しだ……。先を急ぐぞ……」
再びクルリとまわり、スタスタと歩き出す。
「ちょ、ちょっと待って！　それはいいんだけどさ、いったいドコに向かってるワケ？」
「迷宮の最深部だ……。そこにルーンロードの部屋がある……」

「そこに行けば、カーくんを傷つけないで闇の剣を取り出す方法がわかるんだね?」
「多分な……」
ふたりはしばらく歩き続ける。やがて、
「ところでさぁ……」
また突然に、アルルがいった。
「なんだ……?」
「シェゾがルーンロードの後継者になったなんて、ボク初めて聞いたよ。そんなコト、いままで一度も話してくれなかったじゃない?」
「……!!」
アルルの質問に、シェゾは一瞬ドキッ! とした。しかし、アルルに背を向けていたおかげで表情を見られずにすんだ。
一方のアルルはといえば、純粋な疑問を投げかけただけである。さっきのシェゾの話しぶりからして、ルーンロードの後継になったコトを誇っているようだった。ならば、シェゾの尊大な性格からして、もっと早くから話していてもよかったはずだとアルルは思ったのである。
「こんなコトを……、わざわざお前なんぞに話す必要はないと思っていたのだ……」
シェゾは背中を向けたまま、吐き捨てるようにいった。
「特に話す機会もなかったしな……」

「そ〜ぉ……？」
アルルの口調はまだ疑わしげだったが、それ以上の質問が出てくることはなかった。
少々ホッとしたシェゾと、アルルがしばらく歩き続けると、ほどなくして、これまで見たものよりもはるかに立派な扉の前に到着。
「ここが……、ルーンロードの部屋だ……」
いかにもといったカンジで、扉いっぱいに悪魔かなにかをかたどった紋章が彫刻されている。
その扉のわきには、なぜかインターホン。といっても、この部屋にはもうルーンロードはいないのだから、押しても返事があるワケない。
「へぇ〜……」
扉を見上げながら、アルルはつぶやく。
「ここがシェゾを変態にしたところなのね……」
「ちっが──う！」
とりあえずツッコミを入れつつ、シェゾは扉の取っ手を握る。
そして……！
『さあ……！　ここからが本番ですよ……！』
力いっぱい扉を引き開けたとき、シェゾの口調はまったく変わっていた……。

5

「なんだか陰気くさいところねぇ……」
迷宮内の重苦しい空気を煙たがるように、ルルーはいった。
「まるでお墓の中にいるみたい」
「迷宮とはすべからく、そういうものだ」
ルルーの前を歩くシェゾが、振り向きもせずに応（こた）える。
「もっとも、持ち主や造った者の性格に似る場合が多いがな」
シェゾの手にした魔法の杖（つえ）にはライトの呪文（じゅもん）がかけられ、こうこうと前方を照らしていた。
迷宮は、明かりがなければまったく進めないというワケではないが、一応の用心である。
「ってコトはナニ？　ルーンロードってそんなにジメジメした陰気なヤツなの？」
「ふっ……」
ルルーの言葉に、シェゾは思わず笑みをもらした。
「そうだな」
考え方はどうあれ、とにかくルーンロードの手口、話し方などは確かに、この迷宮に立ちこめる暗黒の瘴気（しょうき）のようだ。ジメジメねっとりと、絡みつくようなうっとうしさを持っている。
「ところで、シェゾ」

しばらく歩いたところで、ルルーがまた口を開いた。
「なんだ？」
「あたくしたちはいま、いったいドコに向かってるワケ？」
「とりあえず、占いオババのところに行く」
「占いオババ？」
「この迷宮にいるのは、ルーンロードやモンスターばかりではない」
「そのうちのひとりが、その占いオババってワケね」
「そうだ。以前、オレがここに迷いこんだとき、いろいろと知恵を授けてくれた。あれから何年もたっているが、運がよければまだ生きているはずだ」
そしてシェゾとルルーは、さらに歩みを進める。
いくつかの扉をくぐり、大部屋小部屋、通路を抜け、やがて行き止まりに突き当たった。そこには、うずくまっているような人影がある。
「おやおや、こんなトコロに人とは珍しいねぇ」
老人特有のかすれた声で人影はいった。
「久しぶりだな、オババ」
シェゾが杖のライトを向けると、ネズミの顔をした老婆の姿がぼぅと浮かび上がる。確かに占い師らしく、ルシファーが持っているような水晶球を大事そうに抱え、床に座りこんでいた。

「何年か前はずいぶん世話になった」
シェゾがそういうと、オババは孫と再会したかのように顔をくしゃくしゃにした。
「おうおう、あんときの坊主かえ。オババはちゃぁんと覚えとるぞ。ちょっと見ぬまに大きくなったのぉ。……おや？」
オババは右手の小指を突き立て、
「後ろのキレイな娘さんは、お前さんのコレかえ？」
「じょっ……!!」
オババのセリフに即反応したのはルルーだった。
「冗談じゃないわ！　誰がこんなヤツと……！」
「ほっほっほ、隠さんでもええ」
「隠してなんかいないわよ！　あたくしとシェゾは、つきあってなんかいませんからね！」
「ところでオババ……」
いきり立つルルーを後ろに押しやるように、シェゾが割ってはいる。
「ちょっと聞きたいコトがある」
「おう、なんでも聞くがええぞ。この迷宮でオババの知らぬコトなぞ……」
突然、オババの動きが止まったかと思うと、すぐに細長い首をかしげた。
「はて……？」

「どうした？」
「お前さん、さっきもこの迷宮に来なかったかえ？」
「いいや。オレがここに来たのは数年ぶりだし、迷宮に入ってからすぐにオババのところを目指したのだ」
「ほうかえ？　わしがさっき迷宮をうろついとったら、お前さんとちっちゃな娘っこが歩いてるのを見かけたぞえ」
「小さな娘？」
「茶色っぽい髪をちょこぉんと束ねての、そこのお嬢さんみたいにグラマーじゃあなかったが、クリクリっとしたカンジでカワイイ娘っこだったぞえ」
「それってまさか……！」
ルルーが、小さな悲鳴に似た声をあげた。
「………」
シェゾの心の中では、イヤな予感がざわつき始めている。ルーンロードのヤツ、いったいナニを考えてる……？　果たしてルーンロードが運命に殉じる者かタダの奸物(かんぶつ)か、悪い予感は後者に一票を投じていた。
オババのいう娘とは、十中八九アルルに間違いない。
「お前さんもフタマタかけるとは、なかなかやるのう」

シェゾやルルーの悪い予感などつゆ知らず、オババはいう。
「オババ、その娘といっしょに歩いていたのは、多分オレのニセモノだ」
「おや、そうなのかえ？」
「頼む！　そいつがどこに向かっているのかを占ってくれ。すぐにだ！」
「ほんなもん、占う必要もあるまいよ。この迷宮で立ち寄るトコロといったら、このオババのトコロかルーンロードの部屋しかないじゃろうて」
「やはりそうか」
「はて……？　しかしルーンロードは、お前さんに倒されたのじゃなかったかのう？」
「理由はわからんが、ヤツは復活したらしい」
「おや、そうなのかえ。そりゃ知らんかったのう」
「行くぞルルー、かなりやばいコトになりつつある。場合によっては、お前にも協力してもらうぞ」
「わかってるわよ」
そしてふたりは、オババへの挨拶（あいさつ）もそこそこに、迷宮の最深部――ルーンロードの部屋に向かって走り出した……。

6

「シェゾ……。い、いったい、どうしちゃったの……？」

アルルは恐怖のあまり、そこに立ち尽くしたまま一歩も動けない。本当ならばソッコーで逃げ出したいところだけれど、勝手がまったくわからないこの迷宮では、逃げるだけムダというもの。それよりもなによりも、カーバンクルがまだ相手の手の中にある。

『ふっふっふっふ……』

邪悪な瘴気が渦巻く部屋の真ん中で、シェゾは笑っていた。まるで、部屋に立ちこめる暗黒のエネルギーに取りつかれたかのように。いや、どちらかといえば、本領を発揮したというほうが近い。

ルーンロードの部屋の扉を開け、中から吹き出した瘴気を浴びた途端に、シェゾの態度はまるで別人のようになってしまっていた。口調がヘンになったのは扉を開けた瞬間だけだったが、悪魔そのもののような声の質はそのときからまったく変わっていない。

『さぁ〜て……、アルル……』

ぶはぁ〜っ……。

と暗黒の瘴気を吐き出すように、シェゾはいった。いまの状況が楽しくてしょうがないといったカンジだ。もはやアルルは、ヘビににらまれたカエル状態。さぁ〜て……、どうやって料

理してやろうか……。
『非常に残念なハナシをせねばならん……』
「………」
『ここに来ればカーバンクルをキズつけずに剣を取り出す方法がわかるかと思ったが……、どうやらオレの間違いだったようだ……。許せ……』
しかし顔は、まったくすまなそうな表情ではない。むしろ、はじめからそれを知っていたというカンジを隠そうともしていない。
「そ、そんなぁ……。さっきはあるっていってたじゃない」
『多分……、ともいったはずだ……』
「じゃ、じゃあ、ルシファー先生のところに行こうよ！」
『ダメだ……』
「どうして？」
『それは……』
いいながらシェゾは、カーバンクルを握っていない左手をすぅっと持ち上げた。
『この瞬間を待っていたからだっ!!』
そしてシェゾは呪文(じゅもん)を唱える！

『アレイアード！』

ギュォッ!!

左手に凝縮した魔導エネルギーが黒い弾丸となり、アルルに襲いかかる！

「きゃぁっ！」

ドドォンッ!!

なんとかアルルは、攻撃を寸前でかわした。ついさっきまでアルルが立っていた床は、呪文の爆発でグズグズに砕けている。

「……!!」

その様を見たアルルの背筋は完全に凍りついた。

これまで何度もシェゾと戦ってきたが、古代魔法アレイアードがこれほどまでに威力のある呪文だとは思ってもみなかった。やはり、この部屋いっぱいに渦巻く暗黒の瘴気のせいか……。

それでもアルルは、なんとか気を取り直し、強気の眼で相手をにらんだ。

「そっちがその気なら、ボクだって……!!」

右手を天にかざし、呪文を唱える。

「ダイアキュート！」

その途端、身体(からだ)中の魔導力がイッキにふくれあがるのを感じた。ダイアキュートは、次に唱える呪文の威力を増幅させるものである。いまの相手には中途半端な呪文など効果がないだろ

うと思っての行動だった。
『ほほう……』
しかしシェゾは、まったく余裕の表情。
『次の呪文はファイヤーか……？　それともジュゲムか……？　こっちを攻撃するのはかまわんが……、コイツに当たっても知らんぞ……』
シェゾは、これみよがしにカーバンクルを握った右手を突き出す。もうとっくにカーバンクルは眼を覚ましていたが、シェゾにずっと握られっぱなしだったためか、ぐったりしている。
「ぐぅ〜……」
「う……」
カーバンクルを人質にされては、アルルはなにもできない。
『安心しろ……、アルル……。すぐにお前を殺しはせんよ……。とりあえず動けなくするだけだ……。そうしたら、お前にはいいモノを見せてやろう……』
そしてシェゾはニヤリと笑った。
『砕け散るカーバンクルの身体から飛び出す……、闇(やみ)の剣の姿をな……！　その後、お前の魔導力をいただいてやる……！』
「そ、そんな……！」
途端にアルルの顔が絶望にゆがむ。こっちからなんとかする手段がない以上、いずれはシェ

ゾのいうとおりになってしまうのは眼に見えていたからだ。
『ん〜……。いいねぇ……、その表情……』
ぶはぁ〜っ……。
とシェゾはまた暗黒の瘴気(しょうき)を吐き出す。身体にエネルギーが満ちあふれてしょうがないというカンジだ。
『一瞬ですむ……！　そこを動くな!!』
右手を降ろしてまた左を突き出し、シェゾは呪文を唱える。
『アレイアード！』
「きゃぁっ！」
ドドォンッ！
アルルはなんとかまた避けた。そしてまた床に穴があく。
『動くなというのに！　アレイアード!!』
「きゃぁっ！」
ドドォンッ！
今度は3つめの穴があき、
『動くな!!　アレイアード!!』
「きゃぁっ!!」

ドドォンッ！
そして4つめの穴が床にあいた。
『おのれぇ……！　チョロチョロしおって……！』
さすがにアレイアードの連発で攻め疲れしたのか、シェゾの呼吸が少々荒くなっている。
『しかたがない……。アルル、オレの眼を見ろ！』
「え……？」
アルルは思わず、その言葉にしたがってしまった。
ふたりの視線があうと同時に……、

カッ！

シェゾの両目が真っ赤な光を発した。
その瞬間！
キィンッ!!
「あっ!?」
何かが張り詰めるような音とともに、アルルの身体が突然硬直した。
「か、身体が……！」
まるでロウ人形のように突っ立った姿勢のまま、アルルの身体はピクともしない。金縛りの

術にかかってしまったのだ。

『まったく……、余計な手間をかけさせおって……！　アレイアード!!』

ギュォッ！

5発めのアレイアードが、アルルめがけて飛んでくる。さすがのアルルも、今度ばかりはよけられない！

「……!!」

もうダメだ！　と眼を閉じた瞬間、

「アレイアード！」

アルルの背後で、同じ呪文を唱えるどこかで聞いたような声がした。

眼を開けると同時に、前から飛んできたアレイアードと、後ろからのアレイアードがアルルの前で炸裂（さくれつ）！

ズドドォンッ!!

「くぅっ……！」

とてつもない爆風にアルルはあおられたが、動けない身体ながら、気力で吹き飛ばされないようにふんばった。

「アルル！　大丈夫!?」

今度は後ろから女の人の声がし、誰かがアルルの背中に触れた。
「はぁっ!!」
背後の女の人が気を送った途端、アルルの身体が自由になる。
「ルルー!?」
さっそく振り向くと、やはりルルーの顔がそこにあった。
そしてその後ろには、アルルを助けるように呪文を唱えたシェゾの姿がある。
「あれ!?」
アルルはあわてて部屋の真ん中を見た。そこにはやはり、カーバンクルを握ったシェゾが、亡霊かなにかのように立っている。
「あれれ!?」
また背後を向く。そこにもやはりシェゾ。ただし、そっちのシェゾはカーバンクルの代わりに、魔法の杖(つえ)を握っている。
「どどどどどどど、どーいうコトぉ!?」
ワケがわからず、すっかりアルルは混乱してしまった。アタマの上にたくさんのハテナマークが浮かぶ。
「いままであなたといっしょにいたシェゾは、真っ赤なニセモノよ」
とルルー。

「キサマ……」

後から来たほうのシェゾは、もう一方のシェゾに向かって杖を突き出した。

「ルーンロードだな……!?」

『なんだ、バレてしまったのですか……』

部屋の真ん中の凶悪シェゾの口調が、突然変わった。この部屋の扉を開ける瞬間のように。

『ならば……、このような格好をしていてもしかたありませんね……』

バサァッ！

凶悪シェゾはマントを脱いだ。その下から現れたのは、死人のように青白い肌と流れるような銀髪を持った魔導師。幽霊のようなその姿に似合わず、唇と眼が血のように紅い。

『アルルさん、ルルーさん、お初にお眼にかかります……。ルーンロードと申します……』

「やはりそうだったか……」

ホンモノのシェゾは、汚い物にツバを吐きかけるようにいった。

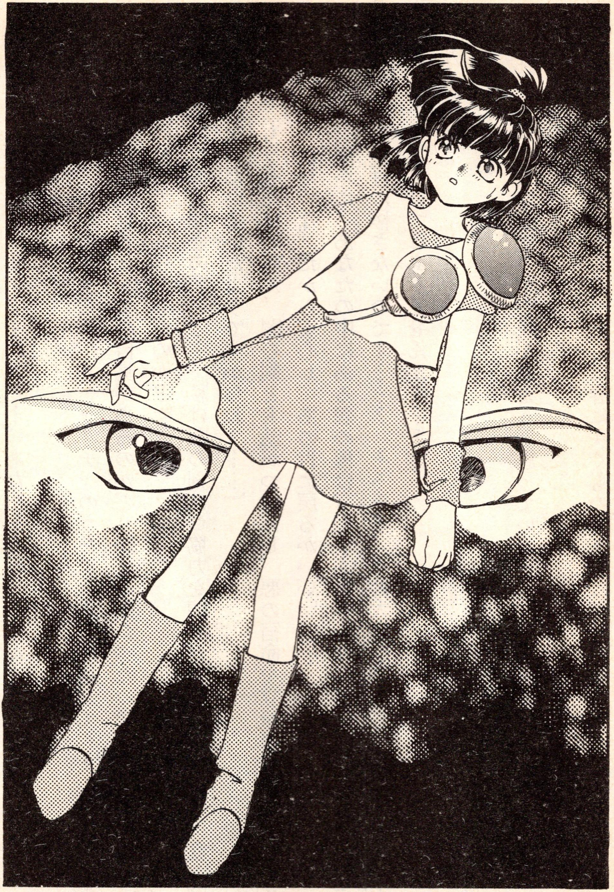
「ねぇルルー、これどうなってんの？」

「そんなコトあたくしに聞かないでよ。あたくしはただ巻きこまれただけなんだから」

「ルーンロードよ……」

アルルとルルーの会話をよそに、シェゾはルーンロードをにらみつける。

「なにしに戻ってきた？」



『なにし に……とはごアイサツですねぇ……。あなたを心配して来たというのに……』
「心配だと？　笑わせる」
『本当ですよ……。あのときは結局、メチャクチャのうちに儀式を通過してしまいましたからねぇ……。あなたに後継者としての自覚があるのかどうか、心配だったのですよ……』
「それで、闇の剣までたぶらかしたのか？」
『たぶらかすなんて人聞きの悪い……。私は闇の剣にご協力を願っただけ……。彼も、私と同じような疑念をいだいていたようですからねぇ……』
「それなら、もう心配はいらん。闇の剣とも話がついたし、悪の宿命を立派に成就させてやる。オレなりのやりかたでな。だから安心してあの世に戻るがいい」
『ふ～む……。確かに、あなたの中にある悪の種は、だいぶ大きくなっているようですね……。でしたら、なぜ実行に移さないのです……？　そろそろ、悪の大魔導師として世の中を震え上がらせてもいい頃合いではありませんか……？』
「いや、まだだ」
『なぜです……？』
「オレはいずれ、大輪の悪の華を咲かせようと思っている」
『結構なことですな……』
「だが、華には季節というものがある。春に咲くものもあれば、秋に咲くものもある。少なく

ともオレの華は、まだ咲く時期ではない。いつ咲けばいいかは、お前の大好きな運命というヤツが教えてくれるだろう」
『どうして、あなたにそんなコトがわかるんです……？』
「では聞くが、お前はどうして、いまがオレの華が咲く時期だとわかるんだ……？」
『む……』
「それは、お前の都合があるからじゃないのか？」
『………』
「オレには、お前の真っ黒な腹の中身が手に取るようにわかるぞ。お前、アルルをどうするつもりだったのだ？」
『そりゃあもちろん……、彼女の魔力を手に入れて、あなたに差し上げようと……。あなたがずいぶん苦労している様子でしたからねぇ……』
「本当は逆なんじゃないのか？　アルルの魔力を手に入れた後でオレの魔力まで吸収して、オレになりすまそうとか考えているんじゃないのか？」
『………』
「その必要もあって闇(やみ)の剣をたぶらかしたんじゃないのか？　オレの力を半減させ、『後継者になる資格はありません』とかいって襲いかかってくるために」
『………』

「だいたい、復活のタイミングがよすぎるのが気に入らん。あらかじめ、そうなるように細工をしておいたんじゃないのか？　なにかあったら、すぐオレに成り代われるように」
『ふっ……』
突然、ルーンロードは吹き出し、
『はぁっはっはっはっはっはっは……!!』
高らかに笑いはじめた。
『さすがですね……。あなたのことを少々見くびっていたようです……。もうそこまでおわかりとは……』
「やはりそうか」
ルーンロードはやはり、シェゾの最もキライなタイプの奸物だった。
「ひとつ聞いておいてやる」
『なんでしょう……？』
「なぜ、このようなコトをする？」
『そりゃぁもちろん、悪の華としてずっと咲いていたいからですよ……。それは、あなたがより大きな魔導力を求めるのと同じ、悪の欲望です……』
「キサマなんかといっしょにするな！　あのときオレに破滅の美学だとかぬかしておきながら、

本当は死ぬのが怖いんじゃないのか？」
『そうであることは否定しませんよ……。永遠の命を得たいというのは、誰もが持っているではありませんか……？』
「だが、そうそううまくいかないのは、運命の輪があるからだ。人はいずれ死ぬ。咲いた華は散るのが定めなんだ」
『そうですね……。でも、そんなことはもうどうでもいいんです……。私が生き長らえることができさえすればね……』
「とうとう本音を出したか……。その生に執着する様、醜すぎる」
チャキッ！
シェゾは魔法の杖を構えた。
「キサマも一度は咲いた華なら、おとなしく散れ。そして、さっさとあの世に帰れ」
『いやですよ……』
「ならば、オレがもう一度引導を渡してやる！」
パリパリパリッ……！
シェゾが念をこめると、杖の先がスパークし始める。
「アイツを攻撃しちゃダメ！」
呪文（じゅもん）を放つ直前、アルルがすがるようにシェゾのマントをつかんだ。

「カーくんと闇の剣が……！」

「なんだと!?」

そこでシェゾは初めて、ルーンロードの右手にカーバンクルが握られていることに気がついた。しかも、カーバンクルの左耳のカタチが妙だ。

『どうぞどうぞ、攻撃をお続けになってください……』

余裕たっぷりの表情で、ルーンロードがいう。

『カーバンクルと闇の剣がどうなってもいいのならね……』

「もしかして、カーバンクルが闇の剣を飲みこんじゃったの!?」

ルルーもカーバンクルの様子に気づいたらしい。

「うん……。ゴメン、シェゾ。ボクが眼をはなしたスキに……」

「いや、どういう状況であああなったのかは知らんが、お前があやまるコトではないだろう。しかし……」

まずはあれをなんとかしないと、ルーンロードに手を出すことすらできない。

「しかたがない……。奥の手を使うか……」

シェゾは意を決して、魔法の杖をルルーに放り投げた。

「ルルー、それを使え」

「ええっ!?　あたくしは魔法使いじゃないんだから、こんなの使えないわよ」

「大丈夫だ。杖に念を送るだけでいい。オレが合図したら、ありったけの念をこめるんだ。それからアルル！」
「は、はい！」
「ルルーにタイミングをあわせて、最大パワーでジュゲムを唱えろ。ふたりとも、目標はヤツの右腕だ」
「ええっ!?　そんなコトしたらカーくんと剣が……！」
「安心しろ、オレがなんとかしてやる」
「わ、わかった……」
「わかったわ」
シェゾの真剣なまなざしに、アルルとルルーは生ツバを飲みこむようにうなずいた。
「よし行くぞ！」
いうが早いか、シェゾはルーンロードに向かって駆け出す。
『ふふん……。なにをやってもムダですよ』
「せいぜい、そうやって慢心してるがいいさ。……アルル、ルルー、いまだ!!」
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ!!」
ルルーが念をこめると、シェゾがやったときと同じように杖がスパークする。そして、
ドォンッ！

真っ白な光の球が、杖の先から発射された。
それにあわせて、アルルもすかさず呪文を唱える。
「ジュゲム!!」
ふたつの光弾が、ルーンロードの右腕めがけて飛んでいく。
「とぉっ！」
エネルギーが右腕に着弾すると同時に、シェゾはあろうことか、自分もルーンロードの右腕めがけてダイブした。
「シェゾ!!」
ドドォンッ!!
ふたりが叫んだときにはもう遅く、シェゾは爆発に巻きこまれていた。
「シェゾ――――ッ!!」
『うがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ!!』
悲痛なふたりの叫びに応えたのは、同じく悲痛なルーンロードの叫びだった。
『私の右腕がぁっ!!』
よく見ると、ルーンロードの右腕がなくなっている。しかも、超高熱で一気に焼かれたせいか、キズ口が炭化していて血も出ていない。

だがルーンロードの右腕だけでなく、闇の剣を飲みこんだカーバンクルの姿も、シェゾの姿もない。
「シェゾ——————ッ!!」
アルルとルルーはまた叫んだ。
そこへ、
「オレはここにいる」
ブォォォンッ!
突然、ふたりの前に黒い竜巻が発生した。そこから姿を現したのは、カーバンクルを抱えた若き闇の魔導師!
「シェゾ!」
「無事だったんだね!」
「だから大丈夫だといったろう」
「でも、いったいどうやって……?」
とルルー。
「爆発に巻きこまれる直前、カーバンクルを奪ってそのままワープを唱えたのだ。ごくごく短距離のな」
「そうか、ワープにはそんな使い方もあるんだ」

感心してアルルがいう。
「まだまだ修業が足りんな。ルシファーにはオレからよくいっておこう」
『うぬぅっ……!!』
無事を喜ぶ3人のあいだに、ルーンロードのうめき声が割ってはいった。
『よくも私の右腕をぉっ……!!』
「油断したな、ルーンロード。慢心は油断を、そして油断は負けにつながるのだ。つまりは、お前は負け犬だというコトだ！」
『もう許しませんよ……！』
「だからどうだというんだ。運命の輪をくずすようなヤツに、運命は味方しない。特に、さんざん運命運命とほざいてきたキサマにはな！」
『うぬぬ……！　いわせておけば……！』
「オレがお前の代わりになって、立派な悪の華を咲かせてやる。だから運命にのっとり、安心して死ね！」
『そんなコトはさせません……！　悪の華となるのは私です……！　私の生命力になっていただこうかとも思いましたが、これ以上ナマイキな口がきけないように、あなたがたをこの場で殺します……！』
いいながらルーンロードは、残った左手に魔力を集中しはじめた。

『アレイアード・スペシャル!!』

グォォォォォォォォォォッ!!

アレイアードの何倍ものエネルギーが、シェゾたち3人めがけて襲いかかる!

すかさずシェゾも呪文を唱える。

「アレイアード・スペシャル!!」

ガドドォンッ!!

ふたつのエネルギーはシェゾとルーンロードのあいだで接触し、迷宮全体をゆるがすほどの大爆発となった。

「ちっ……」

これはまずいな……。

爆風に耐えながら、シェゾはそう思った。

どうやら、呪文の威力は互角のようである。となると総力戦になり、結果としてアレイアード・スペシャルの撃ち合いになる。そうなったら、いずれ迷宮全体を破壊してしまうのは、いまの大爆発を見ても明らかだ。

実は、アルルとルルーの力を借りれば、シェゾは楽に戦えるはずである。しかしそれは、シェゾのプライドが許さなかった。自分のまいた種は自分で刈り取らねばならない。正確には自

分のまいた種ではないが、ルーンロードと深い因縁を持っているのはシェゾだけである。ここはやはり、自分の力だけで戦い、因縁を完全に断っておきたい。

だがこのままでは、千日手になるのは明々白々。

『主よ、我の力を使うのだ！』

突然、シェゾの頭の中になつかしい声が飛びこんできた。もちろん、カーバンクルの中にいる闇の剣の声である。

『我の力を解放し、ルーンロードにいま再び引導を渡すのだ！』

「しかし、こんな状態でお前の力が使えるのか？」

『大丈夫だ。カーバンクル殿との話はもうついている。彼は我々に力を貸してくれよう』

「本当に大丈夫なのか？」

シェゾは、闇の剣にではなくカーバンクルに問いかけた。すると、

「ぐー！」

カーバンクルは「だいじょぶだいじょぶ」とでもいっているように、右手を上げた。

「よぉし！　アルル！　コイツをちょっと借りるぞ！」

アルルの返事を待たずに、シェゾはカーバンクルをルーンロードに向けて突き出した。その先では、次のアレイアード・スペシャルの準備が始まっている。

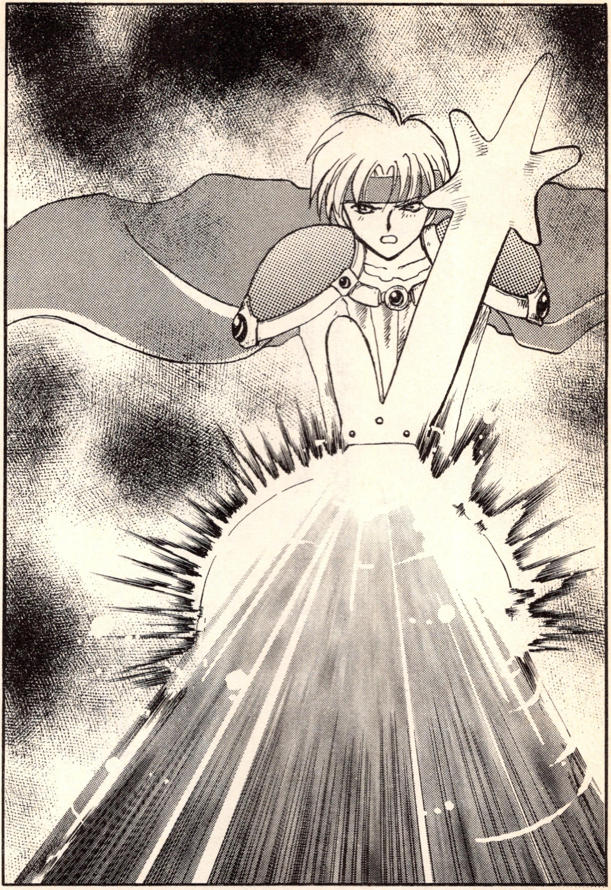
「闇の剣よ……！」

『アレイアード・スペシャル!!』
一瞬だけ、ルーンロードのほうが早かった。
しかし！

「切り裂けっっっっっっ!!」

「ぐ――――――――――――――――――――――――――っ!!」
ドォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォッ……!!
シェゾの掛け声と同時に、カーバンクルの口から、増幅された闇の剣のエネルギーが飛び出した。
その超エネルギーは迫りくるアレイアード・スペシャルを打ち消し、そして……！
『――――――――――――――――――っ……!!』
断末魔の叫びもろとも、ルーンロードを包みこんだ。
エネルギーが消え去ったときにはもはや、ルーンロードは影もカタチもなくなっていた……。
「な、なんてパワーだ……！」
放った本人が呆然（ぼうぜん）とする後ろで、コトの成り行きを見ているしかなかったアルルとルルーも眼を点にしている。
それから、どれくらい時間がたっただろう。

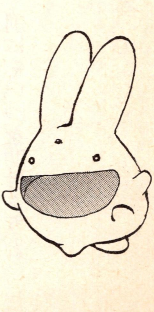
カキィ――――ンッ……!
足元の金属音で、シェゾはようやく我にかえった。
見ると、闇の剣が床に横たわっていた。エネルギーを放出した勢いがあまってか、カーバンクルがようやく剣を吐き出したらしい。
「ぐー!」
スッキリした表情でカーバンクルはシェゾの手から飛び出し、ぴょんぴょんと踊りはじめる。
『久しぶりだな、主よ』
踊るカーバンクルをよそに、闇の剣はいった。
「まったくだ」
『ルーンロードの甘言に乗せられてしまい、迷惑をかけた。許されよ』
「まぁ、これも運命ってヤツだろう。とにかく、これでルーンロードの因縁は断ち切られ、完全に運命を継承することになったようだな」
『うむ。あとは主が精進なされるだけだ』
「ところで、ひとつ聞きたいんだが」
『なにか?』
「前の持ち主はルーンロードだったのか?」
『いや、違う。我の主は、悪の運命とは直接関係がない。結果的にそうなるコトが多いが』



「ではなぜ、ルーンロードはお前の使い手になれなかった？」
『それは、あまりにも深い生への欲望のためだ』
「欲望はお前のエネルギーにはならないのか？」
『うむ。欲望は己の体内で還元してしまう。我の力にはなりえない。主も努々忘れぬことだ』
「ルーンロードのヤツは、お前を手に入れようとはしてないのか？」
『二百年ものあいだ、彼奴はムダな努力を続けていた。我がささった岩をこの迷宮に運びこんだのもそのためだ』
「なるほど」
『哀れなヤツよ、あまりにも深い欲望に眼がくらみ、身の程を知ることができなんだ……』
「ま、それもルーンロードの好きな言葉を借りれば、運命ってヤツだな……」

終章

　シェゾ、アルル、ルルーの3人はようやく地上に出た。もちろんカーバンクルもいっしょで、闇の剣はすでに異次元にしまわれている。
「ん〜っ……！　なんだかよくわからない事件だったわねぇ」
　大きく伸びをしながら、ルルーがいった。
「ホントホント。いったい、ナニがどうなってるワケ？」
　とアルル。
「事件としては極めて単純だ」
「どーいうコト？」
　シェゾの言葉に、アルルとルルーが同時に反応する。
「哀れなほどに生に執着する男が、生き長らえたいためだけに引き起こした事件なのだ」
「？？？」
　ふたりは、よく理解できずにハテナマークを浮かべている。
「ヤツにとって不運だったのは、オレを悪の後継者とやらにしたことと、お前たちを事件に巻



きこんだコトだ」

「なにいってんのよ、あたくしを巻きこんだのはあなたでしょう⁉」

「そんな細かいことは気にするな」

「あ、そうだ！」

シェゾとルルーの会話を尻目に、アルルは突然、ポンと手を打ったかと思うと、

「どうもありがとう」

とシェゾの前に立ってぺこりとお辞儀した。

「なんのコトだ？」

「ほらほら、さっき身体はってカーくんを助けてくれたじゃない。だから、いちおうお礼をいっとかなきゃと思って」

「ああ、あれはナイスだったわね。あたくしもちょっとは見直したわ」

「ふん」

ふたりの誉め言葉に、シェゾは照れ隠しぎみに鼻を鳴らした。

「たまたま、カーバンクルの中に闇の剣があったからやっただけだ。別にそいつを助けようと思ってやったワケじゃない」

「スナオじゃないわねぇ」

ルルーがそう毒づくが、実はシェゾも、内心ではそのとおりだと思っていた。

アルルのくったくのない素直さは、シェゾにはないものである。この素直さが、善と悪との運命をわけるのかもしれないと、ふと思った。伝説を為し得る勇者のように、自分よりもはるかに強い巨悪を倒すほどの、運命をくつがえすほどの潜在能力を持ち得るゆえんなのかもしれない。ならば、もし自分がアルルのような素直さを持てば、悪の華としての運命をくつがえすことができるのだろうか……？

そういえば、自分はいつから素直さを失ってしまったのだろう？　とシェゾは考えた。小さい頃は、アルルのように素直だったはずだ。……いや、昔からオレはヒネたガキだったか？

まぁ、そんなコトはどうでもいい。オレは、いまの状態が気に入っているのだ。それになんの不都合がある？　その後はどう転ぼうと、それは運命だ。あとは、運命がオレの死を告げるまで、自分が美しいと思える方法で心の中の悪の華を立派に咲かせるだけだ。もはや、とりあえずの障害となりそうなルーンロードはもういない……。

「なによ、やる気なの？」

ルルーの言葉で、シェゾの思考は中断された。

「あんな戦いの後なのに、そのままアルルの魔力を奪おうとしてるワケ？　あなたもたいした男ね」

どうやらシェゾは、考えこんでいるあいだにずっとアルルを凝視していたらしい。それが、ルルーの眼にはアルルの魔力を狙っていると映ったのだろう。

「この場で戦おうっていうんなら、あたくしはアルルの味方をするからね。昨日あなたに負けたうえ、そのままこんな事件に巻きこまれた恨みは忘れてませんからね」

シェゾは、それに対して釈明する気力もなく、

「今日のところは勘弁しておいてやる。だが、次に会ったときは容赦しないぞ。お前はオレのものだ！」

それだけいい残して、ふたりに背を向けて歩き出す。

——決まった。

心の中で、シェゾはそうほくそえんだ。

しかしそれは、大いなる油断だった！

ふと、シェゾは遺跡の入り口付近でたむろしている人々に気がついた。どいつもこいつも、皆コワイ顔でシェゾをにらんでいる。

「待ってたわよ、シェゾ！」

先頭のドラコケンタウロスが、いまにも火を吹かんばかりの勢いでいった。手には、オレンジ色をしたセパレーツの水着をかけたハンガーを持っている。

「オレを待ってた？」

「とぼけないでよ！」

くいっ、とドラコケンタウロスがあごを動かすと、パン屋と八百屋らしきオッサンが誰かを

引っ立ててきた。
　それは、顔をボコボコにはらしたすけとうだら、スケルトンT、コドモドラゴンだった。3人とも、まるで罪人のようにロープでぐるぐる巻きにされている。
「あんた、こいつらの親玉らしいな」
「つかまえてブン殴ったら、あらいざらい白状したぜ。全部あんたの命令だってな」
　パン屋のセリフを、八百屋が引き継ぐ。
「ちょっと待て、オレはこんなヤツら知らんぞ」
「とぼけないでっていってるでしょ!!」
　ドラコケンタウロスが吠(ほ)えた。
「オマケに、あたしまでダマしてくれちゃって……!!」
「な、なんのコトだ?」
「このあたしのおニューの水着、これがあんたのねぐらから出てきたわ。それが動かぬショーコよ！　すけとうだらたちに水着を盗ませて、それをダシに軍団に入れようとするなんて、許せないわ！」
「待てって！　軍団ってなんのコトだ!?」
「そんなコトはどうでもいい！」
　大きな包丁を持った肉屋が、ずずいっとシェゾに迫る。

「コイツらが食い逃げした代金を、耳そろえて払ってもらおうじゃねぇか」
「万引きしたものの代金もだよ」
と、雑貨屋らしいオバサン。
「道路の修理代も請求させてもらいますよ」
ついに街の役人まで出てきた。しかし、シェゾにはなんのコトやらサッパリ見当がつかない。
「みんなの用事が終わったら、次はあたしだからね！」
ドラコケンタウロスも迫る。いつのまにかシェゾは、街の人々に囲まれていた。
「ステーキになるのと、バーベキューになるのとどっちがいい？」
「どっちも同じだと思うんスけど……」
そこでシェゾは、ようやくある可能性に気がついた。シェゾに化けていたルーンロードがしでかした可能性だ。
「わ、わかった！　すべてはオレが悪いんじゃない！　ルーンロードが悪いんだ！」
「ルーンロードって誰よ!?」
「この遺跡の地下にいるヤツだ」
「だったら、そいつを連れてきなさいよ！」
「いや、それは……」
ルーンロードはさっきの戦いで完全に消滅してしまっている。それをコイツらの前に出すコ

トができるのは神くらいだ。
「口からでまかせをいうんじゃないの！」
ずずいっ。
人々の輪がまた小さくなった。このままでは、なんだかよくわからない事件の犯人として袋叩きにあうのは必至！
「わ――――――っ!!」
シェゾはとっさにジャンプし、人々の輪から飛び出した。そのまま一心不乱に逃げる！
「待て――――っ!!」
鬼のような形相で追いかける、ドラコケンタウロスをはじめとする街の人々。
「のわ――――っ!!」
ほうほうのていで逃げ惑う、悪の魔導師シェゾ・ウィグィィ。
遺跡にポツリと咲いていた悪の華は、その追いかけっこの様をいつまでも見守っていた……。
「結局こーいうオチかぁ〜〜っ!!」

おわり

あとがき

魔導物語はとぉっても楽し、
みんなでぺらぺらしゃべりますぅ〜。
は、ちょんこちょんこ。

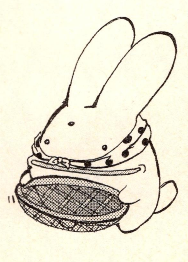
いや〜、早いもんでこの『新★魔導物語』シリーズもはや3巻め。その前の『魔導物語』とあわせれば、なんと通算6巻であります。本屋さんの棚に一連の作品がズラリと並ぶのはちょっちイイかんじ。

それもこれも、みなさんのおかげでございます。感謝カンシャ★

つーコトで、『新★魔導物語』第3巻〝シェゾと悪の華〟はいかがでしたか？　今回はいつもとちょっと趣向を変えて、最初に「アレッ？」と思うような展開にしてあります。

しかも主人公は、ファン待望のシェゾ・ウィグィィ!!

彼はゲームの『魔導物語』みたいなカッコイイ顔と、『ぷよぷよ』のときみたいなオマヌケな顔のふたつを持っているので、そのへんをどう表現するのか悩みました。それを逆手に取って本編のような展開になったワケですが、そのあたりを楽しんでいただけるとウレシイです。



ちなみに、ルーンロードのファンの人はごめんなさい。立場上、ちょっとナニなカンジになってしまいました。ルーンロードがすっげースキ!!　っていうヒトは読まないほうがいいかもしれません……。って、書いた本人がいっちゃいけないコトなんですが。
それ以前に「ルーンロードってなに？　そんなの『ぷよぷよ』に出てこなかったよ」というヒトもごめんなさい。
この『新★魔導物語』シリーズは、パソコンゲーム『魔導物語ＡＲＳ』をモチーフにしています。それはアルル、ルルー、シェゾをそれぞれ主人公にしたストーリーを３本パックにしたもので、『ぷよぷよ』とかには出てこないキャラもいます。ちなみにルーンロードは、シェゾ編のボスキャラです。
まぁ『ＡＲＳ』をモチーフにしているというのは何度も申しているコトですが、もちろんほかの作品からもいろいろとアイデアを拝借させていただいてます。たとえばスーパーファミコン『ルルーの鉄腕繁盛期』とかね。
だから、『新★魔導物語』シリーズは、魔導＆ぷよ関連をすべてチェックしているとさらにさらに楽しむことができるというオイシイ作品になっています。自分でいうのもナンですが。
ちなみに（コレが多いな）前回に出てきた料理３品、〝生バロメッツ〟〝パキスタの活け造り〟〝ゆうことなーす〟は、パソコン用ソフト＆マガジン『ディスクステーション』にホントに載っている料理です。『ＤＳ』にはレシピも載っているので、お料理ができるヒトはためしてみ

てくださいね。

ハナシはガラッと変わって、ここで重大発表!! うすうす感じているヒトもいらっしゃるでしょうが、この『新★魔導物語』シリーズは今回でオシマイです。

もちろん『ARS』をモチーフにしてるってコトで、

だからといってもう魔導の小説を書かないってワケではありません。前のシリーズは『魔導物語1―2―3』を、今回のシリーズは『魔導物語ARS』をモチーフにしています。どちらも3つのストーリーで構成されているので、小説もそれにならって3巻でひと区切りにしようというワケです。ダラダラと続けてもしょうがないですしね。

ボク個人としても、このまま魔導小説を終わらせてしまうのはちょっちイヤです。まだまだ書きたいエピソードはありますし、ずいぶん前のハナシですがコンパイルのMOO仁井谷社長からは100巻出してもいいというお墨つきも得ていることですしね。それに、パソコン版『魔導物語』のストーリーをそのまま小説化して欲しいというお手紙もたくさんいただいてますからね。ここで心機一転して、また新しいシリーズを展開したいと思います。楽しみに待っててくださいね。

つーことで、再会の約束代わりに最後の一言!

I'll be back!

一九九七年八月吉日　ＦＥＡＲ事務所にて

新★魔導物語 3

シェゾと悪の華

山本 剛

角川文庫 10489

平成九年十月一日　初版発行

発行者――角川歴彦

発行所――株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話　編集部(〇三)三二三八―八四五一

営業部(〇三)三二三八―八五二一

〒一〇二　振替〇〇一三〇―九―一九五二〇八

印刷所――新興印刷　製本所――本間製本

装幀者――杉浦康平

S 56-6　ISBN4-04-415606-9　C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

冒険、愛、友情、ファンタジー……。
無限に広がる、
夢と感動のノベル・ワールド！

スニーカー文庫
SNEAKER BUNKO

いつも「スニーカー文庫」を
ご愛読いただきありがとうございます。
今回の作品はいかがでしたか？
ぜひ、ご感想をお送りください。

〈ファンレターのあて先〉
〒102 東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店 書籍第一編集部気付
「山本　剛先生」係



ボクはアルル・ナジャ。
よろしく!!
山本 剛
ILLUSTRATION 壱
© COMPILE
魔導物語


新機動戦記
ガンダムW
ウイング
戦いは少年を何処へ導く？
著 神代 創
原作 矢立 肇
富野由悠季
イラスト／美樹本晴彦


極東少年
全4巻完結
小林めぐみ
ILLUSTRATION 秋山たまよ
神器の番人・日下美和と神霊ナミ
を身体にとりこんだ平山進の介。
二人の出会いが闇の者達を覚醒
させた!! ハイパーファンタジー!!
極東少年
復讐の女神
極東少年II
精霊王
極東少年III
戦乙女
極東少年IV
スニーカー文庫
SNEAKER BUNKO

第2回角川学園小説大賞

「角川学園小説大賞」は、[エンタテインメント小説の新しい形]を求めています。既存の小説分野にとらわれないフレッシュな感覚で、若者のライフスタイルを描いてください。あなた自身の言葉であなた自身の世界を語る、熱い小説を待っています。

●大　賞　正賞のトロフィーならびに副賞100万円、応募原稿出版の際の印税
●応募資格　性別不問。年齢30歳まで。アマチュアに限ります。
●募集作品　エンタテインメント小説。キーワードは[学園]です。恋愛、ミステリー、ファンタジー、SF、ホラーなど、ジャンルは問いません。
作品は、自作未発表のものに限ります。
●原稿枚数　400字詰め縦書原稿用紙200枚から350枚以内
●応募締切　1997年11月30日(当日消印有効)
●選　考　スニーカー文庫編集部、ザ・スニーカー編集部

作品募集中

第4回スニーカー大賞

スニーカー文庫編集部では、若いフレッシュな才能を発掘し、新人作家として次世代に送り出すために「スニーカー大賞」を設置します。夢にみちた物語を紡ぎ出し、新しい時代を切り開くのは、君たちだ!

●大　賞　正賞の盾ならびに副賞100万円、応募原稿出版の際の印税
●応募資格　年齢、性別、プロアマ不問
●募集作品　異世界ファンタジーにこだわらず、ホラー・伝奇・SFなど広い範囲でのファンタジー。但し、未発表のものに限ります。
●原稿枚数　400字詰縦書原稿用紙200枚から400枚以内
●応募締切　1998年6月30日(当日消印有効)
●選考委員　天野喜孝/藤本ひとみ/水野良/角川歴彦

※詳しい応募要項につきましては、雑誌『ザ・スニーカー』(偶数月の30日発売)をご覧ください。
電話によるお問い合わせには応じられませんのでご了承ください。